

平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、会社社屋建設工事に伴う平安京跡・西ノ京遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

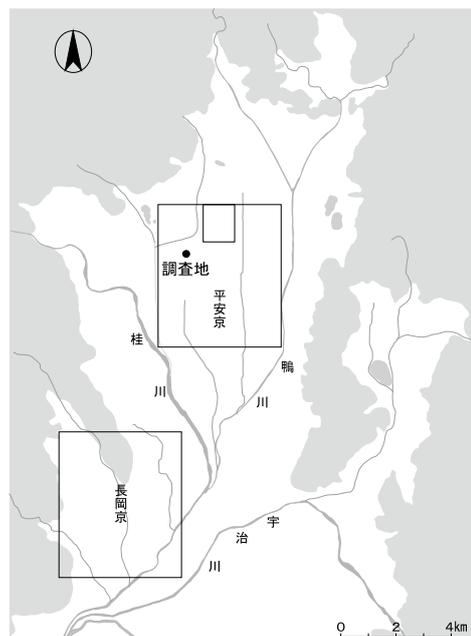
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年6月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・西ノ京遺跡（文化財保護課番号 11H426）
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京桑原町1（島津製作所敷地内）
- 3 委 託 者 太平工業株式会社 代表取締役社長 吉田由起夫
- 4 調査期間 2012年11月19日～2013年2月22日
- 5 調査面積 1650㎡
- 6 調査担当者 南 孝雄・金島恵一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 南 孝雄
- 14 分 析 井戸340・溝116の花粉分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託した。
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 16 協 力 者 調査・整理作業にあたっては下記の方々からご教示を頂いた。記して謝意を表します。
河角龍典、國下多美樹、高 正
龍、辻本裕也、西山良平、平尾
政幸（五十音順、敬称略）



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構の概要	9
(3) 室町時代の遺構	9
(4) 平安時代の遺構	11
(5) 古墳時代の遺構	28
4. 遺 物	29
(1) 土器類	29
(2) その他の遺物	36
5. ま と め	38
(1) 古墳時代	38
(2) 平安時代	38
(3) 10世紀中頃以降	43
6. 付章 自然科学分析	49

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景（西から）
		2	調査区南東部、柵2・3（北東から）
図版2	遺構	1	建物1～3、拡張前（北から）
		2	建物1～3、拡張区（南から）
		3	柵2（北から）
図版3	遺構	1	井戸340（南西から）
		2	井戸340半裁状況（西から）
図版4	遺構	1	井戸340側板検出状況（北西から）
		2	井戸340水溜半裁状況（西から）

- 3 井戸340水溜細部（北西から）
- 4 井戸340東側板検出状況（西から）
- 図版5 遺構
 - 1 土坑158（北西から）
 - 2 ピット151（北東から）
 - 3 柱穴130（東から）
- 図版6 遺構
 - 1 ピット400土器出土状況（東から）
 - 2 柵6柱穴234貞観永寶出土状況（東から）
 - 3 土坑259（南から）
 - 4 ピット142（東から）
- 図版7 遺構
 - 1 溝116新段階、溝153検出状況（北東から）
 - 2 溝153（東から）
 - 3 溝116古段階（北東から）
- 図版8 遺構
 - 1 溝396（北東から）
 - 2 溝396断面（北東から）
 - 3 溝30（西から）
 - 4 北壁断面、Y=-24,675付近（南から）
- 図版9 遺物 土器類
- 図版10 遺物 土器類、硯、櫛、錢貨

挿 図 目 次

図1	調査区配置図（1：1,000）	1
図2	調査前風景（南西から）	2
図3	作業風景（南西から）	2
図4	社内見学会風景（北西から）	2
図5	平安京域の地形分類図（1：80,000）	3
図6	調査地と周辺調査位置図（1：5,000）	4
図7	調査区等高線図（1：500）	7
図8	調査区北壁・西壁断面柱状図（1：40）	8
図9	調査区平面図（1：300）	10
図10	溝30実測図（1：30）	11
図11	建物1実測図（1：60）	12
図12	建物2実測図（1：60）	13

図13	建物3実測図（1：60）	14
図14	柵1・2実測図（1：60）	15
図15	柵3実測図（1：60）	16
図16	柵4・5実測図（1：60）	17
図17	柵6・7実測図（1：60）	18
図18	柵8実測図（1：60）	19
図19	ピット400・151・142、柱穴130実測図（1：20）	20
図20	土坑158・259実測図（1：20）	21
図21	井戸340実測図（1：40）	22
図22	溝116周辺平面図〔古段階〕（1：100）	24
図23	溝116周辺平面図〔新段階〕（1：100）	25
図24	溝116・153・88・90断面図（1：50）	26
図25	北三・四門境界排水遺構変遷図（1：200）	27
図26	溝390実測図（平面図1：100、断面図1：50）	27
図27	落込み41断面図（1：50）	28
図28	溝396実測図（平面図1：80、断面図1：50）	28
図29	落込み41出土土器実測図（1：4）	30
図30	土坑158出土土器実測図（1：4）	31
図31	柱穴・ピット・土坑・その他出土土器実測図（1：4）	32
図32	溝88・90・116・153、井戸340出土土器実測図（1：4）	34
図33	溝30・46出土土器実測図（1：4）	35
図34	硯実測図（1：4）	36
図35	井戸340出土櫛実測図（1：2）	36
図36	銭貨拓影（1：2）	36
図37	遺構配置図 古墳時代（1：1,000）	39
図38	右京三条三坊三町遺構配置図 平安時代（1：1,000）	40
図39	調査地周辺遺構配置図（1：4,000）	42
図40	右京三条二坊十町から三坊三町柱状断面図（1：40）	44
図41	右京河川変遷図（1：20,000）	45
図42	調査地点の模式断面図および資料写真	50
図43	花粉化石群集	54
図44	溝116の植物珪酸体含量	55
図45	花粉化石	61
図46	植物珪酸体	62

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	29
表4	右京三条三坊三町主要遺構一覧表	41
表5	右京三条三坊宅地規模一覧表	43
表6	右京二坊・三坊検出河川一覧表	44
表7	花粉分析結果	54
表8	溝116の植物珪酸体含量	55
表9	井戸340出土大型植物遺体	56

平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡

1. 調査経過（図1）

今回の発掘調査は、株式会社島津製作所（以下「島津製作所」という。）の社屋建設工事に伴う発掘調査である。島津製作所構内では、これまで15次にわたる発掘調査が行われており、当研究所が実施する調査としては12次調査となる。

調査地は平安京右京三条三坊三町跡にあたる。当地に会社社屋建設が計画されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）による試掘調査が実施され、平安時代の柱穴などが検出された。これを受けて文化財保護課は埋蔵文化財調査の指導を行い、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査区は文化財保護課の指導に基づき、東西40m、南北は西壁が49m、東壁が32mで、調査区の平面形は南西部が南に張り出す形に設定した。調査の過程で、調査区北東部において掘立柱建物

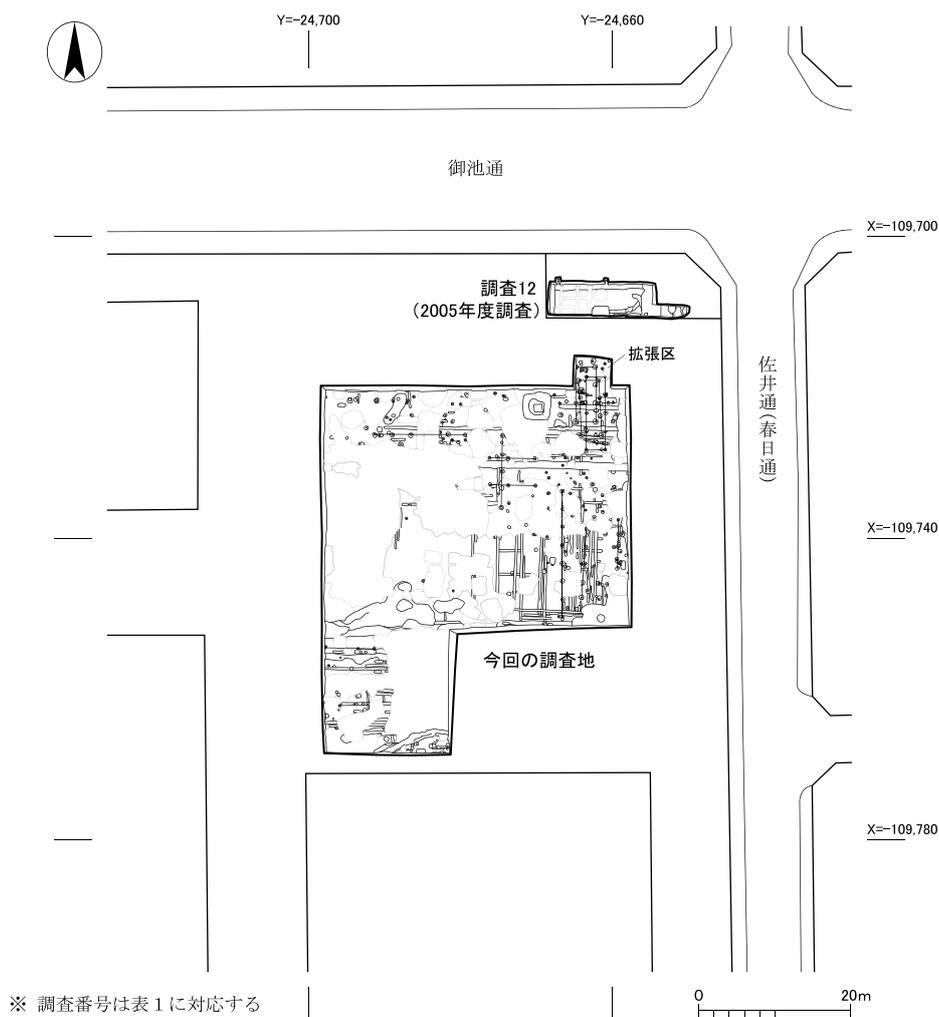


図1 調査区配置図（1：1,000）



図2 調査前風景（南西から）



図3 作業風景（南西から）



図4 社内見学風景（北西から）

の柱穴を多数検出し、これらの北側への広がりを確認するため、調査区の北東部に拡張区を設定した。調査面積は合わせて1,650㎡である。

調査は2012年11月19日から開始した。重機により現代盛土から室町時代の耕土までを掘削したのち、地山上面で古墳時代・平安時代・室町時代・江戸時代の4時期の調査を行った。遺構面では遺構検出、遺構の掘り下げを行い、写真撮影・遺構実測などの記録作業を行った。平面図の作成は、土器出土状況図、井戸340平面図などの一部を除き、トータルステーションにより行っている。2013年2月22日にすべての現地作業を終了した。

なお、調査期間中の2013年1月31日と2月5日の2回に分けて、島津製作所社員を対象に調査状況についての説明会を行った。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境 (図5)

調査地は京都盆地北西部に位置する。京都盆地はいくつかの扇状地によって構成されるが、調査地は紙屋川(天神川)の形成した扇状地上に立地している。紙屋川扇状地の扇頂部標高は88m、扇端部標高は32mである。調査地の標高は33.2~32.7mを測り、扇端部に近い¹⁾。

紙屋川は鷹ヶ峯を源流とし、京都盆地西部を南流して、西ノ京円町を経て流れを西に変え太秦の南東で御室川に合流した後、再び南流し吉祥院で桂川に合流する。現在のこの河道は、昭和10年(1935)の京都大洪水の後に付け替えられたもので、それ以前の紙屋川は、円町から流れを南西に小さく変えた後、再び南に曲がり今回の調査地の西側を南流していた²⁾。調査地北西側には、この旧河道の痕跡が北北東から南南西に向かう道路や地割として残っている。

調査地は平安京右京三条三坊三町の北東部に位置し、東側の道祖大路、北側の三条坊門小路の交差点に近い。平安京以前の遺跡としては西ノ京遺跡の範囲に含まれる³⁾。西ノ京遺跡は、おおよそ北は丸太町通、東は西大路通東側、南は六角通、西は西小路通に囲まれた南北1.2km・東西0.8kmの範囲に広がる遺跡で、遺構の検出は少ないものの旧石器時代から古墳時代の遺物が出土している。

(2) 周辺の調査 (図6、表1)

調査地周辺では、これまでに多数の調査を実施している。主な調査成果については図6・表1にまとめた。

旧石器時代から弥生時代 調査16で平安時代の整地層などから石器類が出土している。周辺でこの時期に該当する遺構の検出は今のところないが、集落遺跡などの存在が推定される。

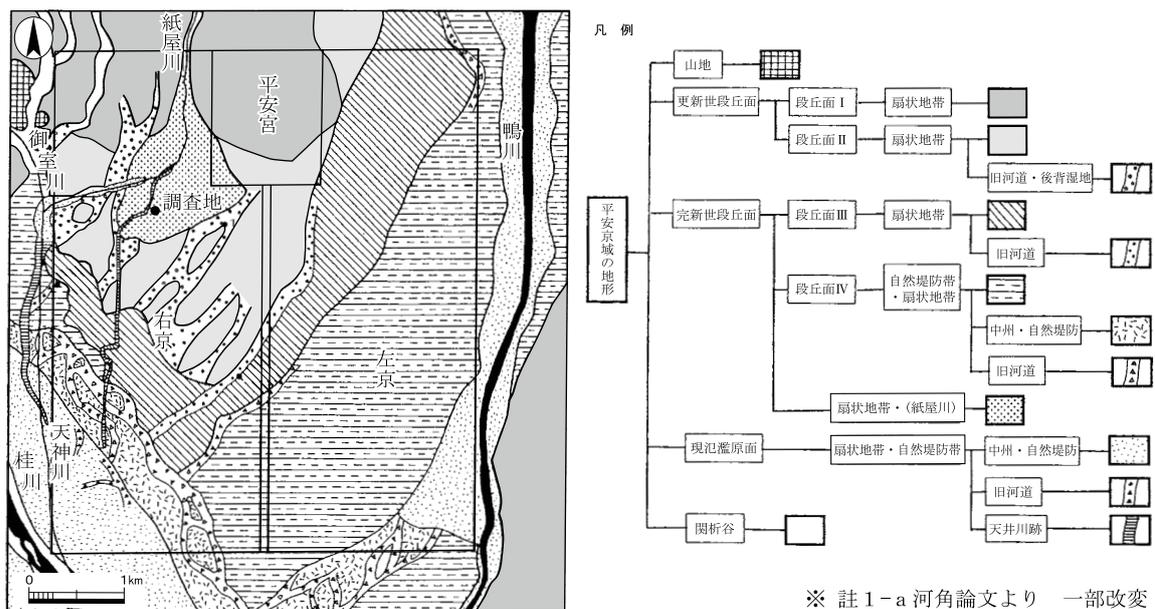


図5 平安京城の地形分類図 (1:80,000)

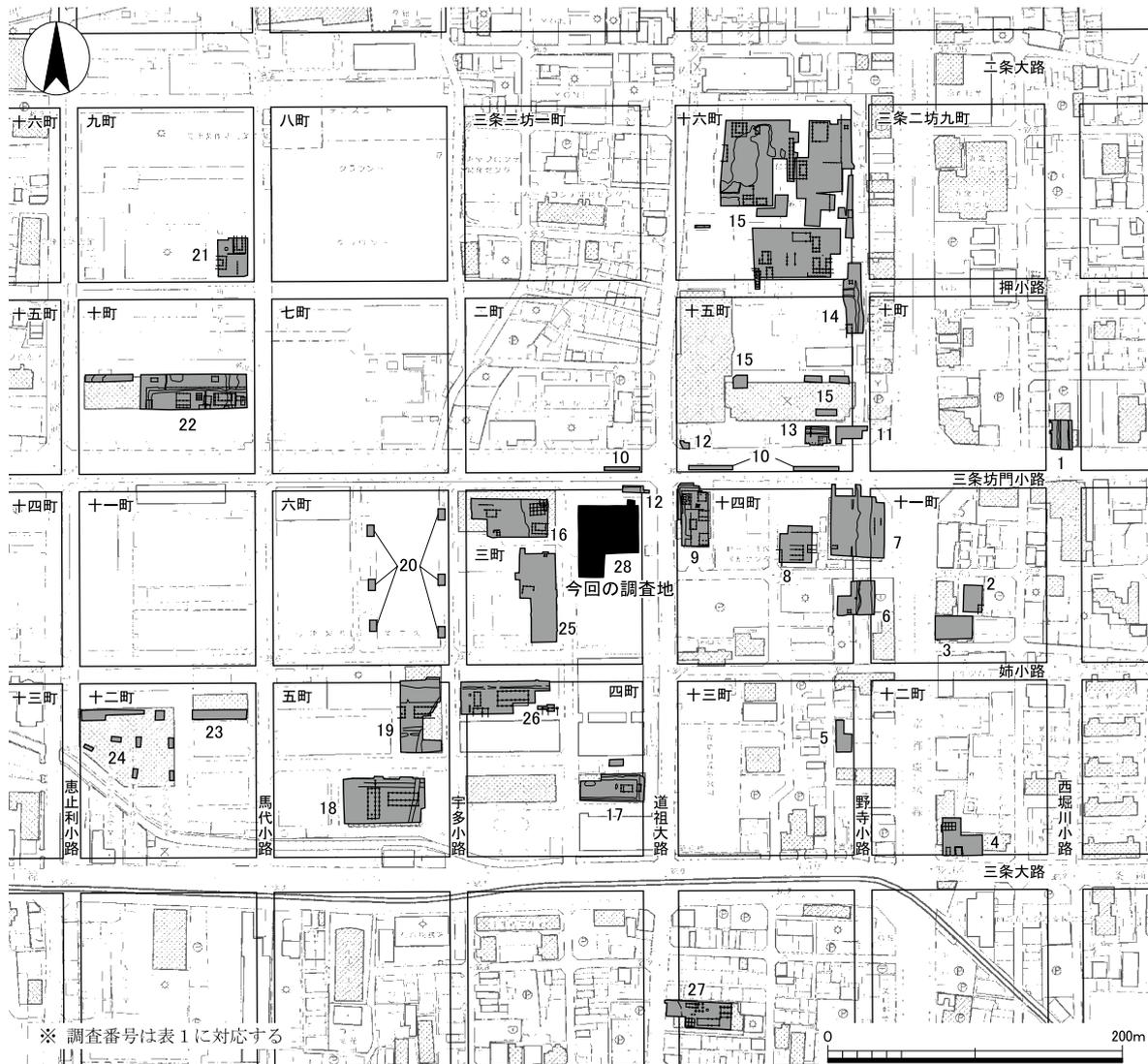


図6 調査地と周辺調査位置図 (1:5,000)

古墳時代 庄内式期の溝を調査25で検出している。古墳時代中期では調査21の竪穴住居1棟のほか土坑を検出し、土師器・須恵器が出土した。調査22では流路から土師器・須恵器・滑石製模造品が出土しており、この周辺に居住域が存在したことがわかる。調査16・25・26では、それぞれ幅1m前後、深さ0.3~0.8mの溝を検出している。

平安時代 ほとんどの調査で平安時代前期から中期前半(8世紀末から10世紀前半)の建物・柵・井戸・土坑・柱穴など多数の遺構を検出している。二坊十六町の調査15では、平安時代中期前半の庭園を有する1町規模の邸宅の全容がほぼ明らかとなった。出土した墨書土器から「齋宮」の邸宅と推定できる。今回の調査地である三坊三町の調査16・25では、平安時代前期から中期前半の掘立柱建物5棟・柵1列・井戸2基・溝3条・湿地状の落ち込みなどを検出している。三坊四町の調査17・26では、平安時代前期のコの字形に配置される3棟の大規模な掘立柱建物を検出している。道祖大路西築地内溝に橋を架けており、大路に面して門を開いていたことがわかる。1町規模邸宅と考えられる。三坊五町の調査18・19でも、南東部で平安時代前期の大規模な掘立柱建物を検出しており、1町規模の邸宅であった可能性が高い。また、三坊九町の調査21では四面庇

表1 周辺調査一覧表

番号	調査概要	備考	文献
1	10世紀後半の西堀川小路路面・西側溝・西堀川など。		註4
2	9世紀の建物、10世紀中頃の整地層・溝など。		註5
3	詳細不明。	財団法人古代学協会の調査、未報告。	
4	9世紀前半の井戸、平安時代前期から中期の建物・十二町中央を流れる南北水路。		註6
5	鎌倉時代から室町時代の土取跡・柱穴。		註7
6	10世紀中頃の野寺小路西側溝・井戸・柱穴、10・11世紀の野寺小路川、鎌倉時代の野寺小路川と堰など。		註8
7	平安時代中期の三条坊門小路南側溝・野寺小路東西側溝・柵、平安時代後期から鎌倉時代の野寺小路川など。		註9
8	9世紀後半の二面庇建物を含む建物3棟。		註10
9	9世紀中頃から10世紀前半の3時期の建物群・三条坊門小路南側溝・道祖大路川・井戸。		註11
10	9世紀前半の土坑、9世紀中頃の三条坊門小路北築地内溝、室町時代の溝など。		註12
11	10世紀前半の建物・土坑、12世紀の柵・野寺小路川など。		註13
12	9世紀後半から10世紀前半の三条坊門小路南側溝・道祖大路西側溝・道祖大路川など。		註14
13	9世紀末から10世紀前半の建物・溝、平安時代後期の溝、室町時代の井戸など。		註15
14	平安時代中期の建物・井戸、平安時代後期の押小路南北側溝・野寺小路川など。		註16
15	9世紀後半から10世紀前半の建物・庭園・井戸・道路、「齊宮」などと記した多数の墨書土器。	齋宮の1町規模邸宅。	註17
16	古墳時代前期の溝、9世紀後半の建物・柵・井戸・溝・落込みなど。		註18
17	9世紀前半から中頃の道祖大路西築地内溝と橋・建物・土坑など。	調査26の大型建物の宅地の大路からの入り口、1町規模邸宅。	註18
18	9世紀前半の大型建物・溝など。	調査19と同一宅地、1町規模邸宅。	註19
19	9世紀前半の建物・柵・井戸・姉小路南築地内溝など。	調査18と同一宅地、1町規模邸宅。	註18
20	遺構未検出。		註20
21	古墳時代中期の堅穴建物・土坑・河川、9世紀中頃から後半の四面庇建物2棟・井戸・溝・土坑など。		註21
22	古墳時代中期以前の流路、古墳時代中期の溝、9世紀中頃から後半の建物・柵・溝・土坑、11世紀の木棺墓など。		註18
23	平安時代の整地層。		註22
24	古墳時代以降の湿地状の堆積。		註18
25	古墳時代初頭と中期の溝、9世紀中頃の井戸、溝、小径、土坑など。		註23
26	古墳時代中期の溝、9世紀前半の大型建物・宇多小路東築地と内溝・姉小路南築地内溝など。	調査17と同一宅地、1町規模邸宅。	註24
27	9世紀後半と12世紀の建物、9世紀後半の井戸、10～12世紀の道祖大路川。		註25
28	9世紀後半から10世紀前半の建物、10世紀前半の井戸、10世紀の道祖大路東側溝。	今回の調査。	

※ 調査番号は図6に対応する。

建物を2棟検出し、三彩の精巧な獅子頭が出土している。三坊十町の調査22では、9世紀前半は掘立柱建物が検出され宅地として利用されている。この後、10世紀前半の木棺墓を検出しており宅地としての利用はなくなっている。副葬品として漆皮の折敷の上に載せた土師器皿・毛抜き・墨などの化粧道具、銅鏡、須恵器壺などがまとまって出土しており、相応の身分の貴族の墓であることがわかる。

以上のように、周辺の調査では平安時代前期から中期前半までは宅地としての活発な土地利用の様子が窺える。しかし、平安時代中期の10世紀中頃になると、建物遺構は検出されなくなり居住域としての利用は途絶える。平安時代中期の遺構はほとんど検出されないが、調査9では道祖大道路面に掘削された排水路である道祖大路川が検出されている。この時期の遺構はほとんど検出されないが、大規模な排水路の存在は、この時期にも何らかの土地利用が存在したことを証明する。平安時代後期になると、一部で再び居住域として利用される。調査15では押小路に近い場所に掘立柱建物を検出している。

鎌倉時代 遺構はほとんど検出されていないが、野寺小路川が掘削され、用水を取水するためと思われる堰も検出していることから、周辺で水田などの土地利用が存在したことが考えられる。

室町時代 ほとんどの調査地点で耕作に伴う素掘り溝を検出しており、調査地周辺のほぼ全域が耕作地となっていたことがわかる。ただし、素掘り溝の埋土には一定量の土器類が含まれる地点が多いことから、周辺には耕作地のみならず集落の存在が推測される。この農村的な景観は、20世紀の戦後しばらくまで続き、本格的に市街化するのとは昭和40年代以降である。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図7・8)

現況地形は北東部に高く南西側へ低くなっている。遺構面の標高は北東部で32.40m、南西部の最も低い場所で約32.0mである。平安時代の建物や柵など居住域を想定させる遺構は、主に調査区の北東部で検出されている。既存建物基礎による攪乱が地表面から深さ2.0mまで及んでいる部分があり、これにより遺構面が失われている。

調査区全体の基本的な層序は、上から順に現代盛土、近世耕土、中世耕土、これ以下が無遺物層のいわゆる地山であり、平安時代および古墳時代の遺構面である。ただし、地形的に高い位置にある北壁と、低くなる西壁では層序が若干異なっており、以下に北壁と西壁に分けて述べる。

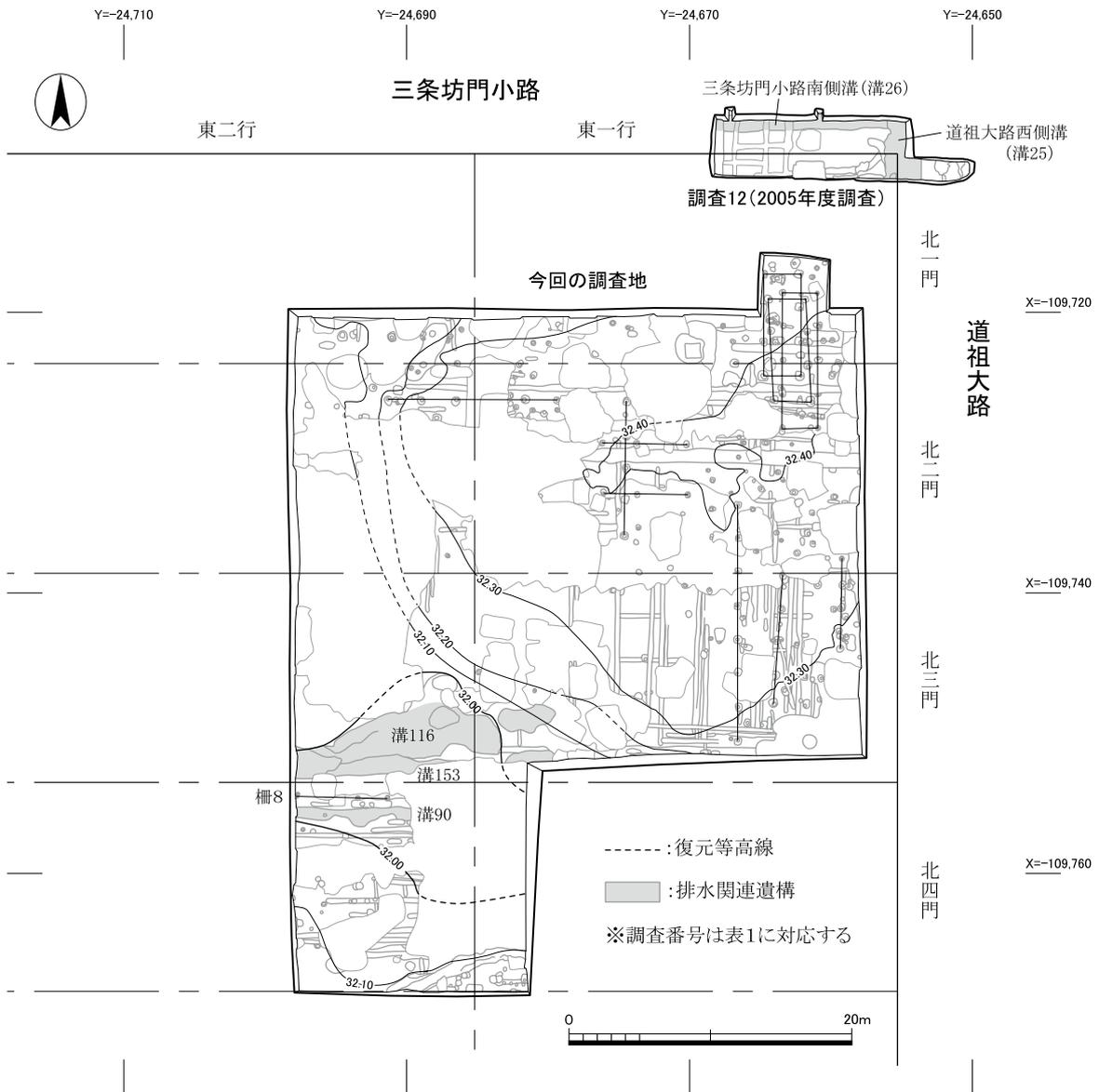
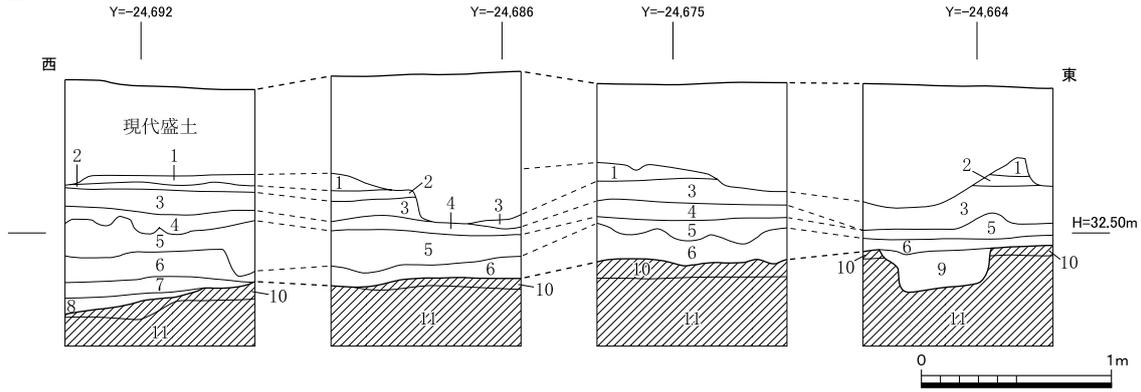


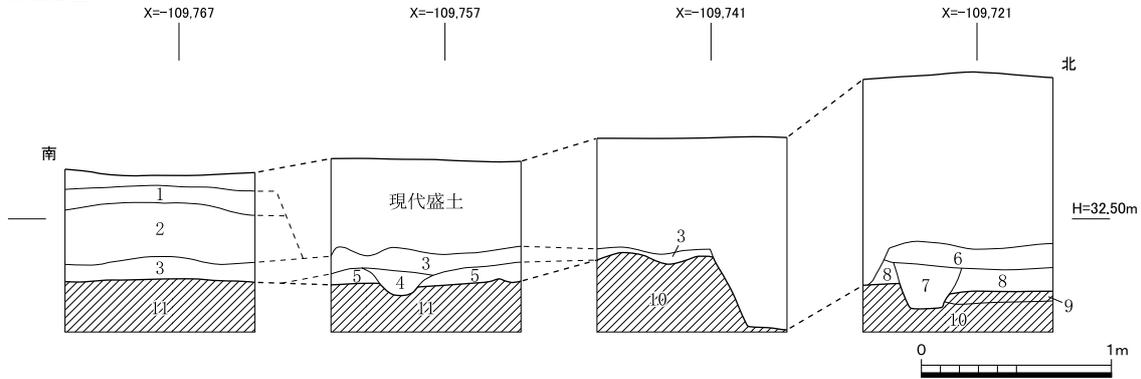
図7 調査区等高線図 (1 : 500)

調査区北壁



- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 7.5YR5/1 褐灰色微砂(近代耕土) 2 10YR5/2 灰黄褐色細砂、葉埋あり(洪水層) 3 7.5YR5/1 褐灰色微砂、φ1cmの礫少量含む(江戸時代耕土) 4 10YR4/1 褐灰色微砂～細砂、φ2cmの礫・炭含む(室町時代耕土) 5 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック混(室町時代耕土) 6 10YR2/3 黒褐色微砂+10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック混、φ2cmの礫・炭・土器片含む(室町時代耕土) | <ul style="list-style-type: none"> 7 10YR2/1 黒色微砂+10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック混、平安時代土器片含む 8 10YR2/1 黒色微砂+10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック混、炭・平安時代土器片含む 9 10YR3/1 黒褐色微砂(土坑259) 10 7.5YR2/1 黒色シルト～微砂、11の土壤化層(地山) 11 10YR6/6 明黄褐色シルト～微砂(地山) |
|---|---|

調査区西壁



- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂、炭少量含む(近代耕土) 2 10YR5/2 灰黄褐色細砂～粗砂、φ5cmの礫・炭少量含む 3 10YR3/1 黒褐色微砂、φ2cmの礫・土器片少量含む(室町時代耕土) 4 10YR3/1 黒褐色微砂(室町時代溝) 5 7.5YR3/1 黒褐色+7.5YR5/2 灰褐色微砂混(室町時代耕土) 6 10YR2/3 黒褐色微砂+10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック混、φ2cmの礫・炭・平安時代土器片含む(室町時代耕土) | <ul style="list-style-type: none"> 7 10YR2/1 黒色微砂、炭・土器片含む(中世ビット) 8 10YR2/1 黒色微砂+10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック混、平安時代土器片含む 9 7.5YR2/1 黒色シルト～微砂、10の土壤化層(地山) 10 10YR6/6 明黄褐色シルト～微砂(地山) 11 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂(地山) |
|--|--|

図8 調査区北壁・西壁断面柱状図(1:40)

北壁では、厚さ0.5～0.8mの現代の盛土が存在する。盛土下の1層は近代の耕土、2層は紙屋川の氾濫に伴う砂礫の堆積、3・4層は褐灰色微砂を主とする室町時代から江戸時代の耕土、5・6層は灰黄褐色微砂を主とする室町時代の耕土である。7・8層は地形的に低くなる西側にしか存在しない。この層の正確な時期は不明であるが、平安時代の遺物を含み、直上が室町時代の耕土であることから、平安時代から室町時代の幅で捉えられる整地層である。古墳時代と平安時代の遺構を検出した無遺物層(いわゆる地山)は、基本的には明黄褐色シルトであるが、これの上部約10cmは土壤化して黒色シルトとなっている。この土壤化層は主に調査区の北半部で確認した。平安時代の遺構の埋土は基本的には黒色微砂であり、遺構の検出は、土壤化層の黒色シルト上面では困難であることから、これを若干掘り下げて行った。

西壁では、現代の攪乱が著しく本来の層序が残る部分が少ない。攪乱の影響により中世耕土の堆積が薄いこと、西壁南部では近世もしくは近代以降の紙屋川の氾濫に伴う砂層の堆積が顕著であ

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	溝396	
平安時代	建物1～3、柵1～8、柱穴130、ピット142・151・255・342・400、土坑158・259、井戸340、溝88・90・116・153・390、落込み41	
室町時代	溝30・46、素掘り溝群	

ることなど、北壁の堆積とは異なる部分もある。地表面から0.6～0.8mが現代盛土。1層は近代の耕土、攪乱の影響で南側でのみ確認した。2層は江戸時代あるいは近代の紙屋川の氾濫堆積物である細砂から粗砂であるが、葉理がなく、洪水の後に人為的に整地などを目的として動かされたものである。3～6層は黒褐色の微砂を主とする室町時代の耕土または耕作に伴う溝である。8層は北壁の8層に対応する。7のピットの存在から何らかの土地利用が存在したことがわかる。遺構面となる無遺物層は北半部は北壁と同じ明黄褐色シルトであるが、南半はにぶい黄褐色微砂となっている。無遺物層上面は基本的には北から南へ傾斜するが、北壁付近ではやや低くなる。

以上のように平安時代の遺構面の直上に堆積する土は、基本的には室町時代の耕土である。調査地は、この時期に耕作に伴う大きな地形改変が行われ、平安時代の遺構は一定の削平を受けていると思われる。

(2) 遺構の概要 (図9)

遺構はすべて地山上面で検出し、室町時代・平安時代・古墳時代の3時期の遺構を検出した。

検出した遺構には、室町時代の耕作溝、平安時代の掘立柱建物・柵・井戸・土坑・溝、古墳時代の溝などがある。このほか江戸時代の溝も少数検出している。

調査区の西半部は既存工場基礎により広い範囲で遺構面が失われていた。平安時代の柵は8条確認している。これらの中には、本来建物の一部を構成するものが存在する可能性があるが、ここでは検出状況にしたがい柵として報告する。

検出遺構の時期は平安京・京都I期～XIV期の編年案を準用する²⁶⁾。

(3) 室町時代の遺構

室町時代の遺構には、耕作に伴う素掘りの溝がある。

溝の方向は東西・南北方向を示すものがあり、概して東西方向の溝は調査区北部と南部で、南北方向の溝はおもに中央付近で多く検出した。幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mのものが大半を占める。埋土は黒褐色微砂が主体とするものが多いが、褐灰色微砂を主体とするものもあり、前者は北壁5・6層から成立した遺構で、後者は北壁4層から成立した遺構と考えられる。

溝30(図10、図版8) 調査区北部で検出した東西方向の溝である。断面形は逆台形で、検出長約30m、幅0.3～0.5m、深さ約0.1～0.2mで西に浅くなる。一部分が約1.5mの範囲で拳大から人



図9 調査区平面図 (1 : 300)

頭大の石で溝が埋められていた。埋土は褐灰色微砂。Ⅹ期の土師器が出土した。

溝46 (図9) 調査区中央で検出した南北方向の溝。検出長18m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色微砂。Ⅸ期の土師器が出土した。

(4) 平安時代の遺構

建物・柵・井戸・溝などを検出した。検出した遺構は平安時代前期から中期である。建物は小規模な掘立柱建物で、すべて調査区の北東部で検出している。建物・柵の主軸方位は建物3と柵2を除き、ほぼ正方位である。平安時代の遺構埋土は、黒褐色微砂を主体とし黄橙色微砂を含むものがある。また、検出した小穴遺構のうち、柱痕跡を検出したものは柱穴とし、同程度の規模であっても柱痕跡が確認できなかったものをピットとした。単体遺構としての柱穴・ピットは土器・銭貨・石を埋納したものを報告する。

建物1 (図11、図版2) 南北棟掘立柱建物である。東西1間×南北3間。柱間は梁行が2.7m(9尺)、桁行が2.4m(8尺)である。柱掘形の平面形はほぼ方形を呈し、一辺0.5~0.6m、深さ0.1~0.4mを測る。Ⅲ期古段階の土師器皿が出土した。

建物2 (図12、図版2) 南北棟掘立柱建物である。東西1間×南北4間。柱間は梁行が2.7m(9尺)、桁行が2.4m(8尺)である。柱掘形の平面形は円形あるいは楕円形を呈し、径0.3~0.6m、深さ0.1~0.4mを測る。柱穴325には、直径10~15cmの石を柱の根固めに入れている。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

建物3 (図13、図版2) 南北棟掘立柱建物である。東西1間×南北3間。柱間は梁行が北側で2.55m(8.5尺)、南側で2.7m(9尺)、桁行が2.4(8尺)mである。建物方位はN-3°-Wに振れる。柱掘形の平面形は方形もしくは楕円形を呈し、径0.3~0.8m、深さ0.1~0.4mある。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

柵1 (図14) 調査区南東部で検出した南北方向に4間の柵。柱間は不等間で北から1.95m(6.5尺)、1.65m(5.5尺)、1.8m(6尺)、1.2m(4尺)である。柱掘形の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、径0.35~0.6m、深さ0.1~0.35mを測る。後述する道祖大路西側溝である溝390のすぐ西側に位置することから、道祖大路与宅地を遮蔽する塀の一部である可能性がある。小片のため図示できないがⅡ期新段階の土器類が出土した。

柵2 (図14、図版1・2) 調査区南東部で検出した南北方向に4間の柵。柱間は不等間で北から2.4m(8尺)、2.25m(7.5尺)、2.55m(8.5尺)、2.1m(7尺)である。柱掘形の平面形は円形

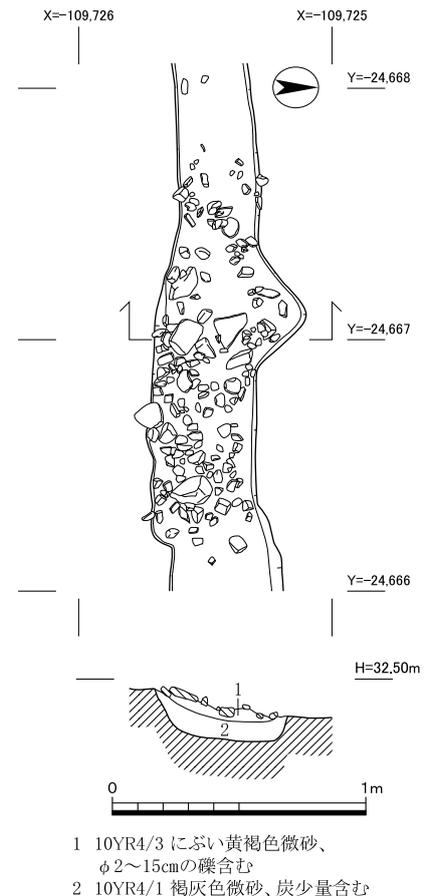
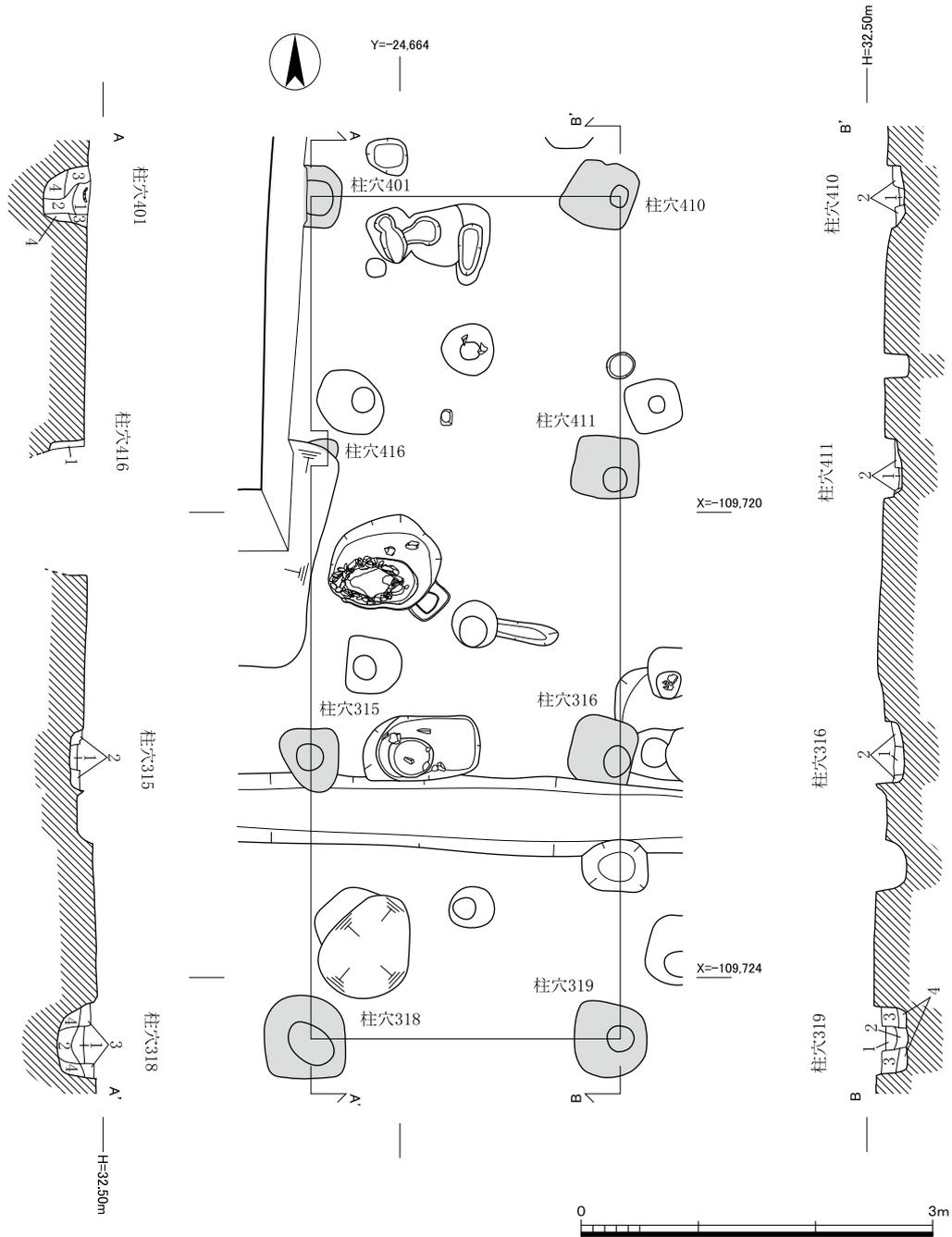


図10 溝30実測図(1:30)

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂、
φ2~15cmの礫含む
- 2 10YR4/1 褐灰色微砂、炭少量含む



柱穴401

- 1 10YR2/1 黒色微砂、土器片・炭微量含む
- 2 10YR2/2 黒褐色微砂
- 3 10YR2/1 黒色微砂+10YR6/2 灰黄褐色微砂少量混
- 4 7.5YR2/2 黒褐色微砂+10YR6/3 にぶい黄褐色シルト少量混

柱穴416

- 1 10YR2/2 黒褐色微砂

柱穴315

- 1 10YR2/2 黒褐色細砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂微量混
- 2 10YR2/3 黒褐色細砂+10YR6/4 にぶい黄褐色微砂少量混

柱穴318

- 1 10YR2/2 黒褐色微砂+10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混
- 2 10YR2/1 黒色微砂+10YR5/6 黄褐色シルト微量混
- 3 7.5YR2/2 黒褐色微砂+10YR6/4 にぶい黄褐色シルト少量混
- 4 10YR2/1 黒色微砂+10YR5/6 褐色シルト中量混

柱穴319

- 1 7.5YR2/2 黒褐色微砂+7.5YR5/3 にぶい褐色シルト少量混
- 2 7.5YR1.7/1 黒色微砂
- 3 10YR6/4 明黄褐色微砂+7.5YR2/1 黒褐色微砂少量混
- 4 10YR6/6 明黄褐色微砂+7.5YR2/1 黒色微砂中量混

柱穴316

- 1 10YR2/2 黒褐色微砂、土器片含む
- 2 7.5YR2/2 黒褐色微砂

柱穴411

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト

柱穴410

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
- 2 10YR2/1 黒色シルト微砂+10YR5/6 にぶい黄褐色微砂

図11 建物1実測図 (1:60)

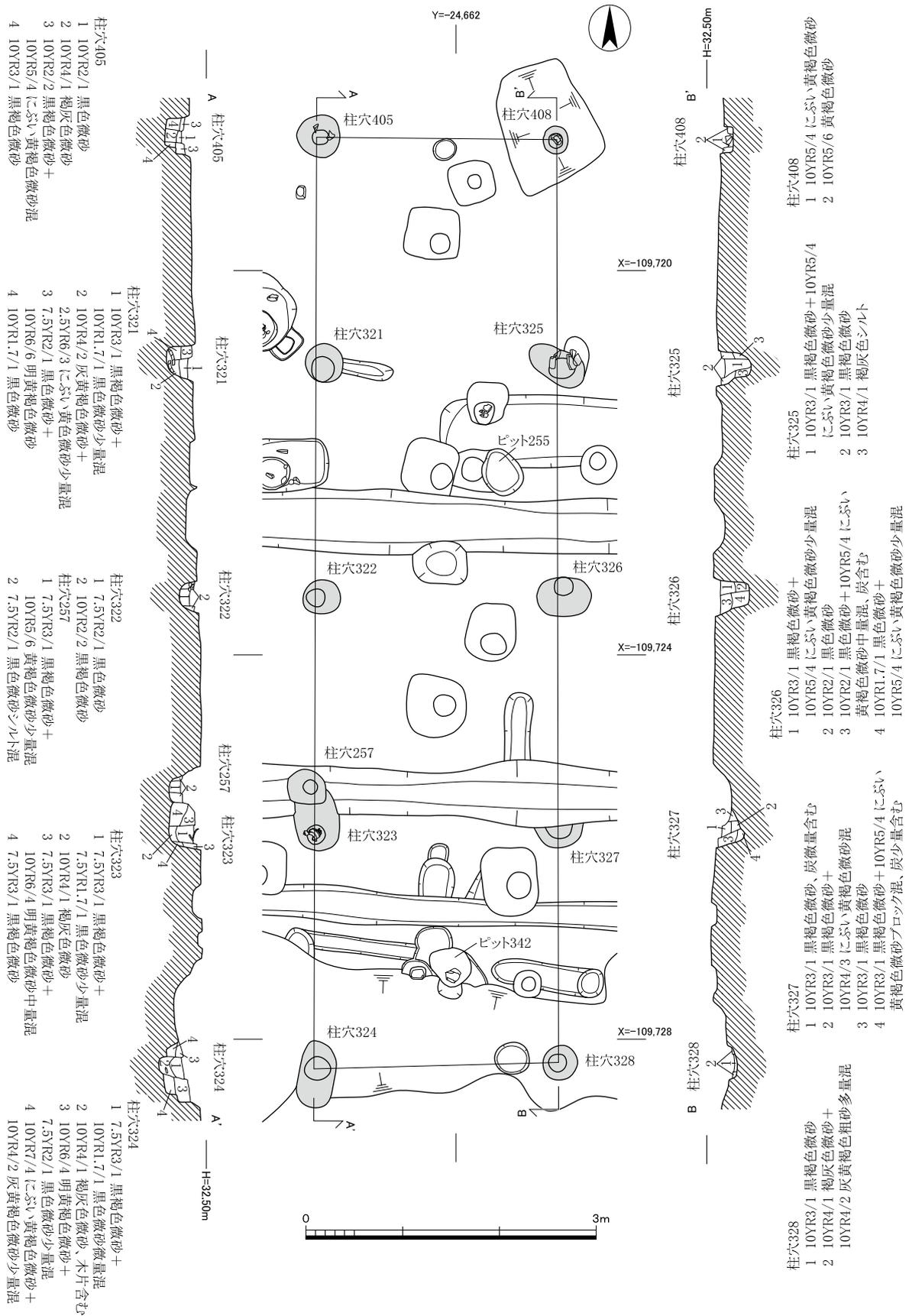
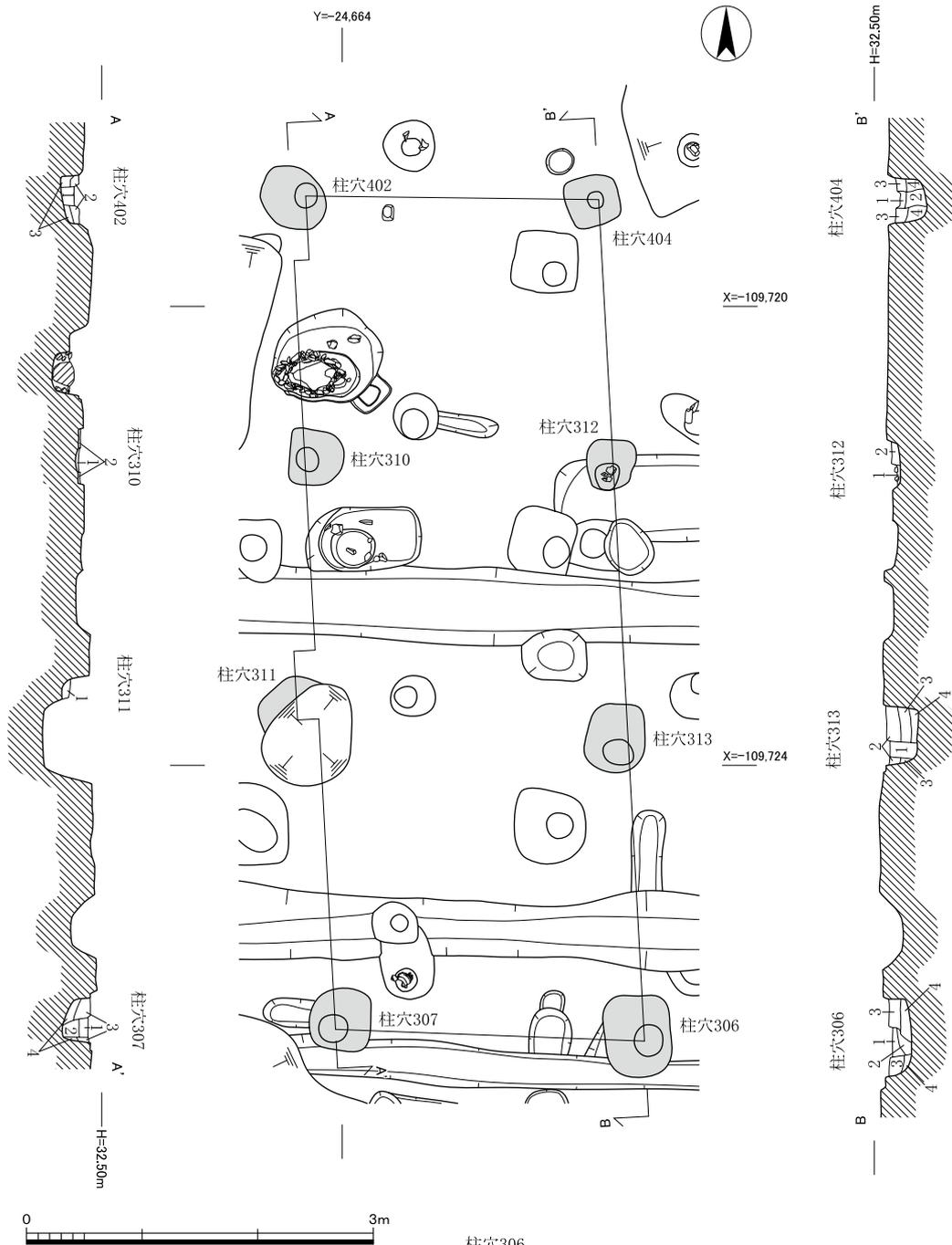


図12 建物2実測図 (1:60)



柱穴402

- 1 10YR4/1 褐灰色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混
- 2 10YR2/1 黒色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混
- 3 10YR2/2 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混

柱穴310

- 1 7.5YR2/1 黒色微砂
- 2 7.5YR2/1 黒色微砂+10YR5/6~6/4 黄褐色シルト(微砂混) 中量混

柱穴311

- 1 7.5YR1.7/1 黒色微砂(シルト混)+7.5YR4/2 褐灰色微砂混

柱穴307

- 1 7.5YR2/1 黒色微砂+10YR6/8 明黄褐色微砂少量混
- 2 7.5YR3/1 黒褐色微砂+10YR6/8 明黄褐色微砂少量混
- 3 10YR2/1 黒色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂少量混
- 4 10YR1.7/1 黒色微砂+10YR6/4 にぶい黄褐色微砂中量混

柱穴306

- 1 10YR2/1 黒色微砂(シルト混)+7.5YR3/4 黒褐色微砂少量混
- 2 10YR1.7/1~2/1 黒色微砂(シルト混)+10YR6/4 にぶい黄褐色微砂少量混
- 3 10YR1.7/1 黒色微砂(シルト混)+10YR6/4 にぶい黄褐色微砂少量混
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂

柱穴313

- 1 7.5YR2/1 黒色微砂、土器片少量含む
- 2 7.5YR2/2~3/1 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混
- 3 10YR3/2 黒褐色微砂+10YR6/4 にぶい黄褐色微砂少量混
- 4 10YR2/1 黒色微砂

柱穴312

- 1 10YR2/2 黒褐色微砂
- 2 10YR2/1 黒色微砂+10YR6/4 にぶい黄褐色微砂中量混

柱穴404

- 1 10YR2/2 黒褐色微砂
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混
- 3 10YR1.7/1 黒色微砂
- 4 10YR2/1 黒色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混

図13 建物3実測図 (1:60)

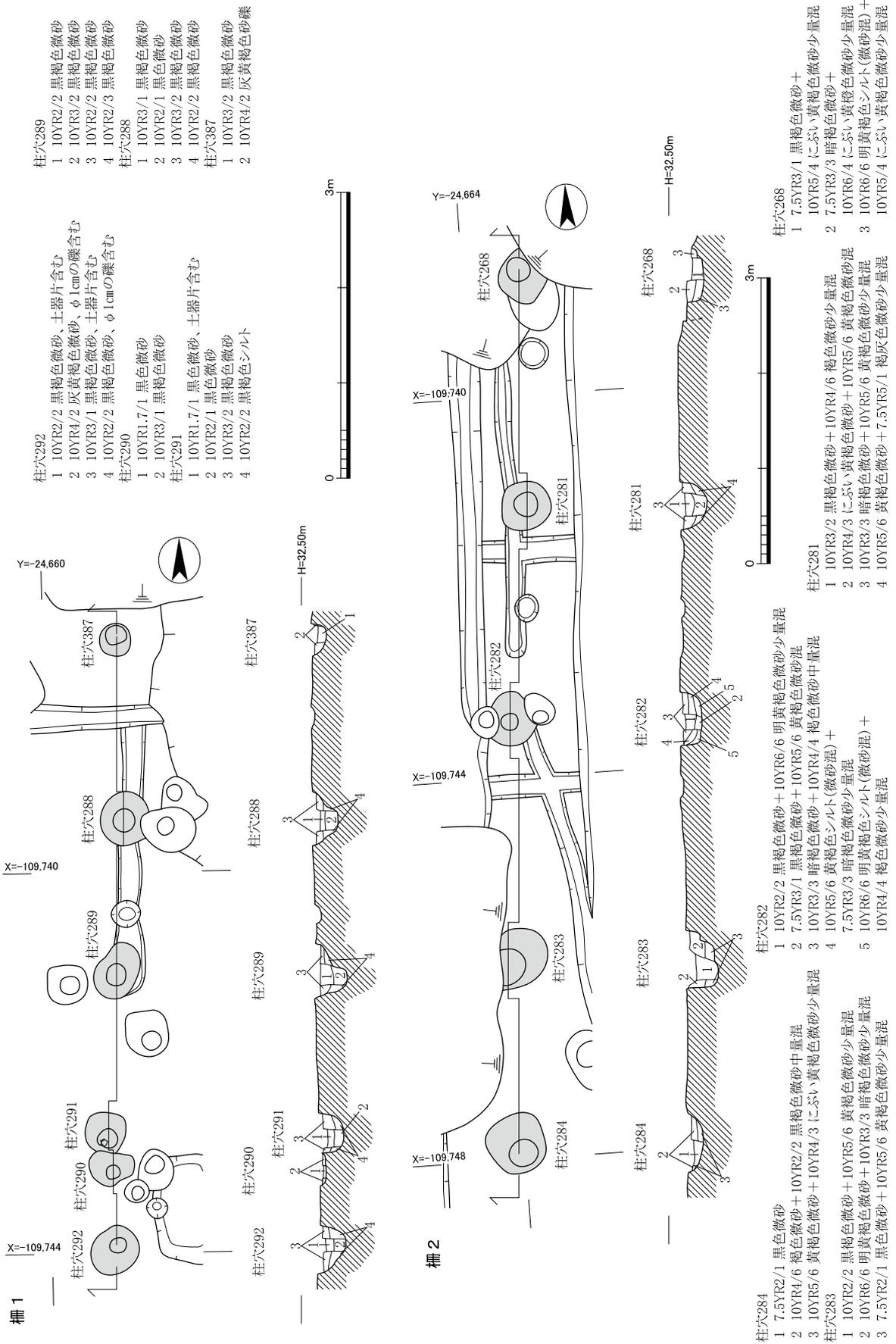
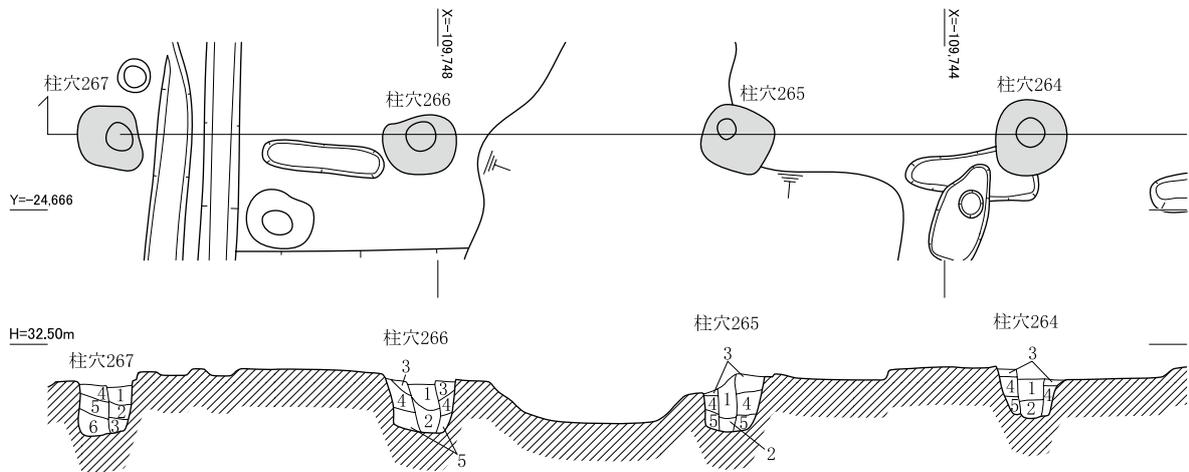
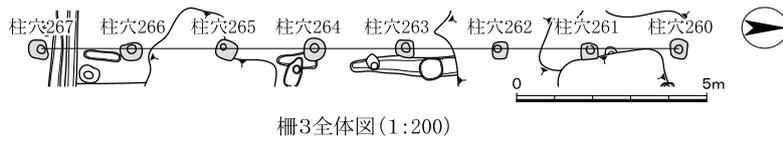


図14 柵1・2実測図 (1:60)



柱穴267

- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、炭少量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト～粘土+10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(微砂混)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、炭少量含む
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色シルト混
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト+10YR6/6 明黄褐色微砂多量混、炭含む
- 6 10YR5/6 黄褐色シルト+10YR6/6 明黄褐色微砂多量混

柱穴266

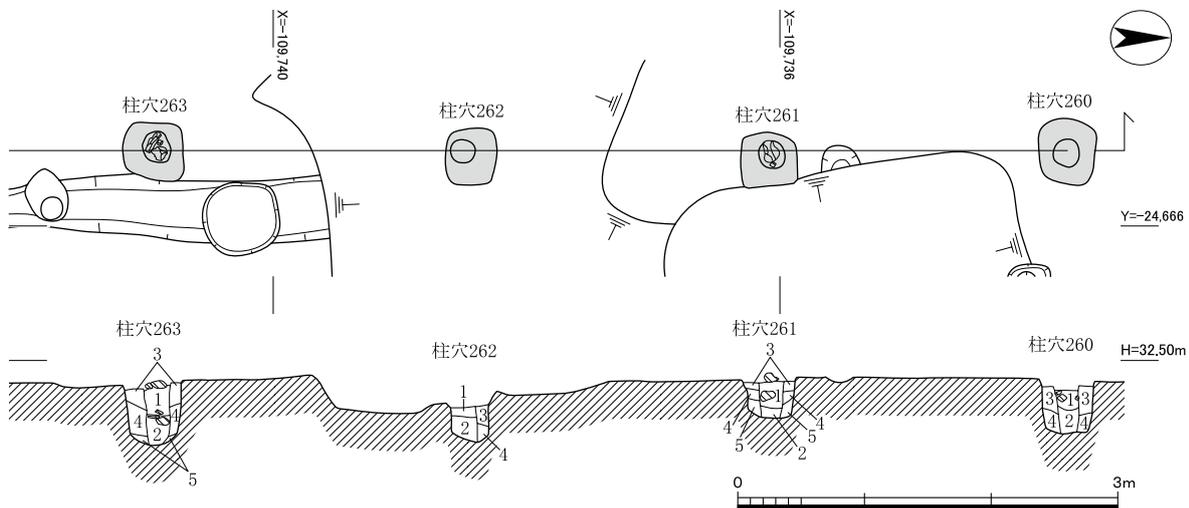
- 1 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色シルト少量混、炭微量含む
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト+10YR6/3 にぶい黄褐色シルト混、炭微量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト(微砂混)+10YR5/6 黄褐色シルト(微砂混)多量混、炭微量含む
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック、炭少量含む
- 5 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混、炭中量含む

柱穴265

- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、炭少量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/2 灰黄褐色微砂混、炭少量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂多量混
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂、炭少量含む
- 5 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混、炭微量含む

柱穴264

- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、炭少量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂少量混、炭中量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂多量混
- 5 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂混、炭中量含む



柱穴263

- 1 10YR3/1 黒褐色微砂
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR6/4 にぶい黄褐色微砂少量混、炭少量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂混、炭中量含む
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂少量混、炭中量含む
- 5 10YR6/6 明黄褐色微砂、炭少量含む

柱穴262

- 1 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂混、炭少量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂混、炭中量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂少量混、炭中量含む
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂少量混、炭少量含む

柱穴261

- 1 10YR3/1 黒褐色微砂
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂多量混、炭微量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR4/6 褐色微砂混
- 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR4/6 褐色微砂多量混
- 5 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂少量混、炭少量含む

柱穴260

- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、炭微量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂混、炭中量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/6 黄褐色微砂少量混、炭少量含む
- 4 10YR5/6 黄褐色微砂、炭多量含む

図15 柵3実測図(1:60)

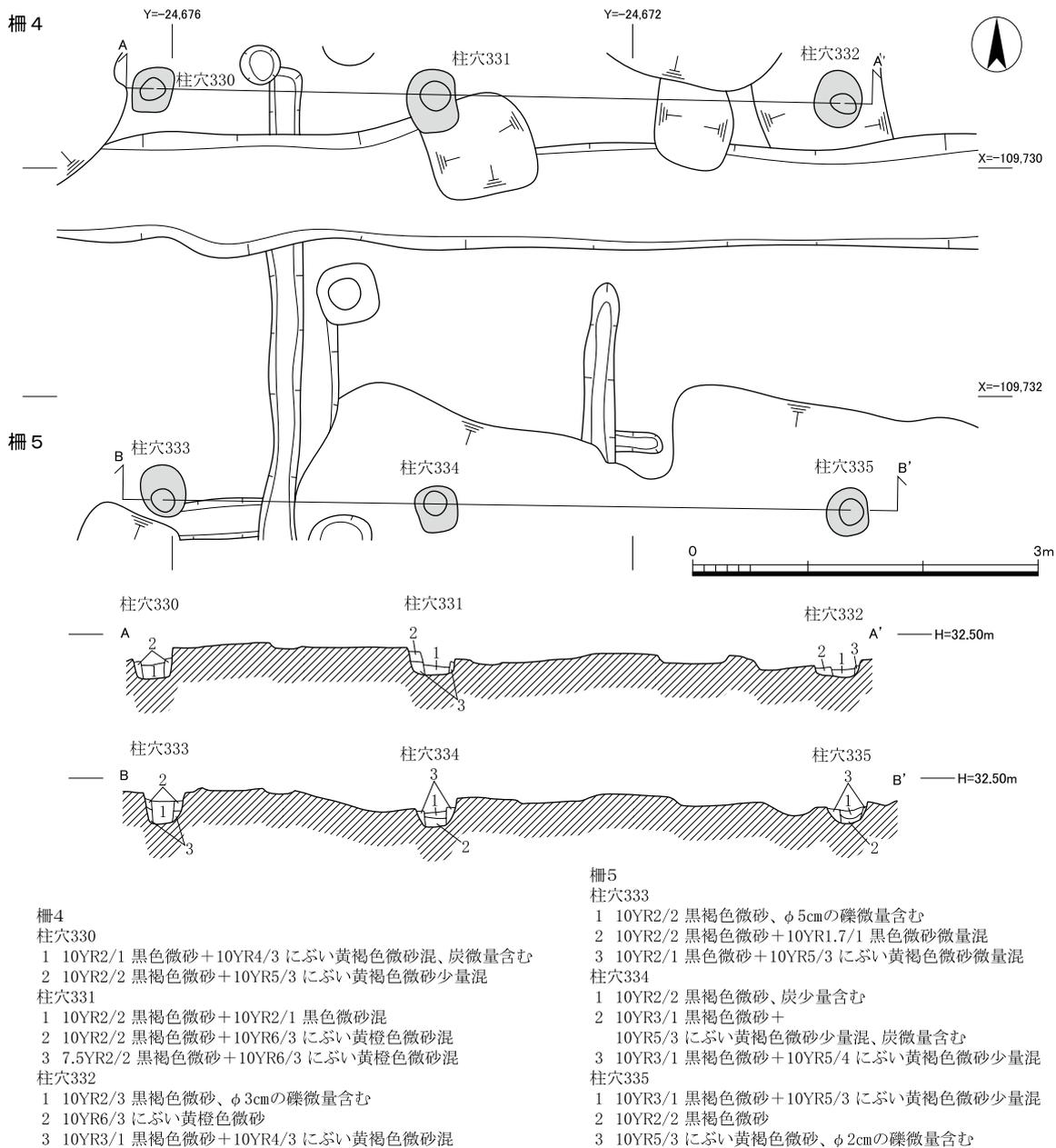
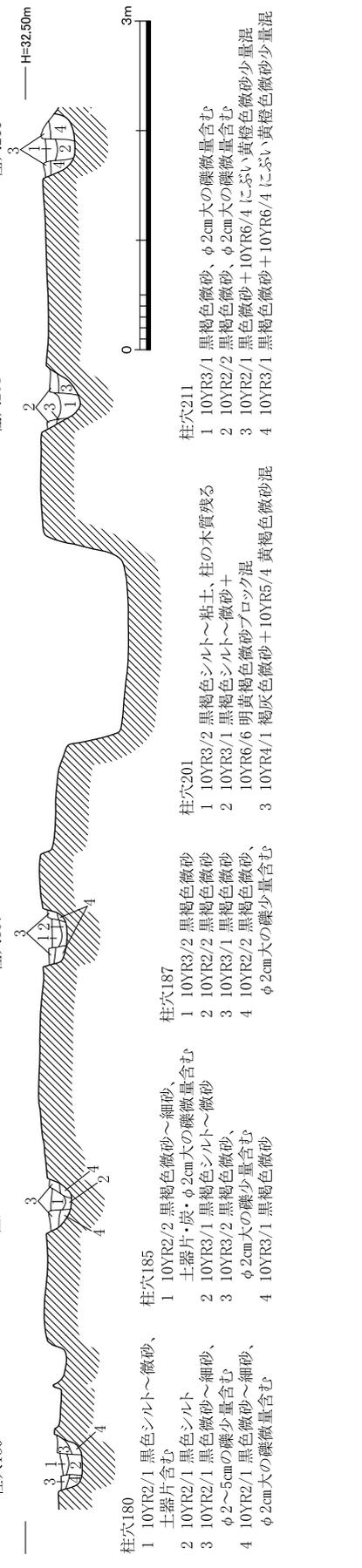
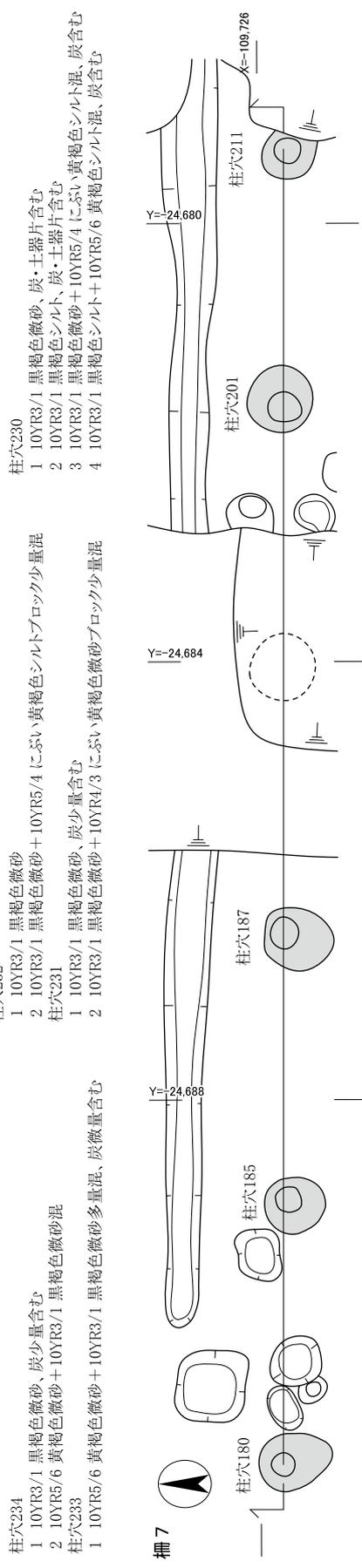
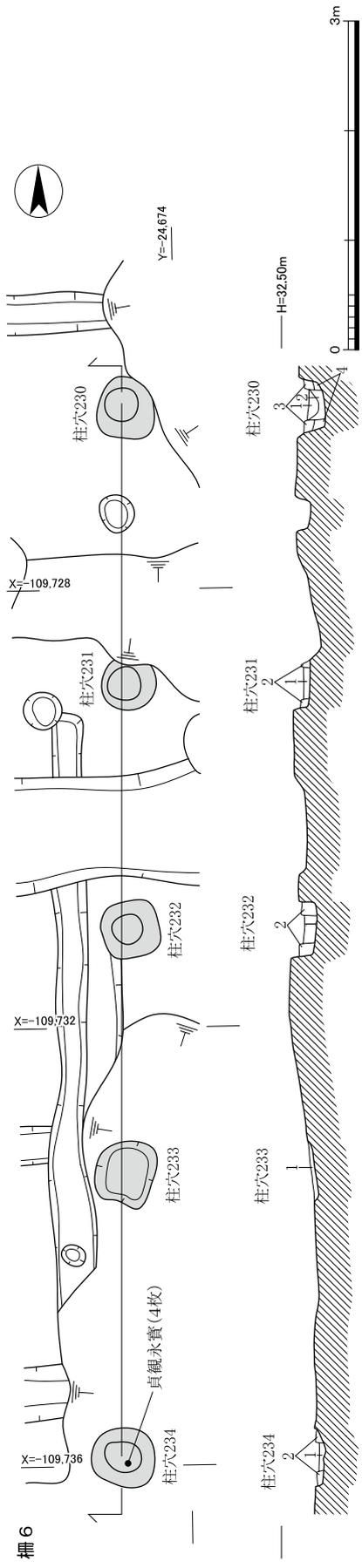


図16 柵4・5実測図(1:60)

もしくは楕円形を呈し、径0.5~0.6m、深さ0.2~0.4mを測る。建物方位はN-5°-Eに振れる。小片のため図示できないがⅡ期新段階の土器類が出土した。

柵3(図15、図版1) 調査区南東部で検出した南北方向に7間の柵。柱間は等間で2.4m(8尺)である。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.45~0.6m、深さ0.35~0.6mを測る。灰釉陶器などが出土したが、小片のために時期は不明である。

柵4・5(図16) 並んで検出され、柱穴の規模・配列もほぼ同じであり、なんらかの有機的な関係が存在したと思われる。一つの建物である可能性もある。しかし、両者の距離が南北に3.6mと離れていること、東西の柱間も大きすぎることから、ここでは2条の柵として報告する。Ⅱ期新段階~Ⅲ期古段階の土器類が出土した。



柵6

柵7

図17 柵6・7実測図 (1:60)

- 柱穴230
- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、炭・土器片含む
 - 2 10YR3/1 黒褐色シルト、炭・土器片含む
 - 3 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい、黄褐色シルト混、炭含む
 - 4 10YR3/1 黒褐色シルト+10YR5/6 黄褐色シルト混、炭含む

- 柱穴232
- 1 10YR3/1 黒褐色微砂
 - 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック少量混
- 柱穴231
- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、炭少量含む
 - 2 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR4/3 にぶい黄褐色微砂ブロック少量混

- 柱穴234
- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、炭少量含む
 - 2 10YR5/6 黄褐色微砂+10YR3/1 黒褐色微砂混
- 柱穴233
- 1 10YR5/6 黄褐色微砂+10YR3/1 黒褐色微砂多量混、炭微量含む

- 柱穴180
- 1 10YR2/1 黒色シルト～微砂、土器片含む
 - 2 10YR2/1 黒色シルト
 - 3 10YR2/1 黒色微砂～細砂、φ2～5cmの礫少量含む
 - 4 10YR2/1 黒色微砂～細砂、φ2cm大の礫微量含む

- 柱穴185
- 1 10YR2/2 黒褐色微砂～細砂、土器片・炭・φ2cm大の礫微量含む
 - 2 10YR3/1 黒褐色シルト～微砂
 - 3 10YR3/2 黒褐色微砂、φ2～5cmの礫少量含む
 - 4 10YR3/1 黒褐色微砂
- 柱穴187
- 1 10YR3/2 黒褐色微砂
 - 2 10YR2/2 黒褐色微砂
 - 3 10YR3/1 黒褐色微砂
 - 4 10YR2/2 黒褐色微砂、φ2cm大の礫少量含む

- 柱穴201
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト～粘土、柱の木質残る
 - 2 10YR3/1 黒褐色シルト～微砂+10YR6/6 明黄褐色微砂ブロック混
 - 3 10YR4/1 褐灰色微砂+10YR5/4 黄褐色微砂混
- 柱穴211
- 1 10YR3/1 黒褐色微砂、φ2cm大の礫微量含む
 - 2 10YR2/2 黒褐色微砂、φ2cm大の礫微量含む
 - 3 10YR2/1 黒色微砂+10YR6/4 にぶい、黄褐色微砂少量混
 - 4 10YR3/1 黒褐色微砂+10YR6/4 にぶい、黄褐色微砂少量混

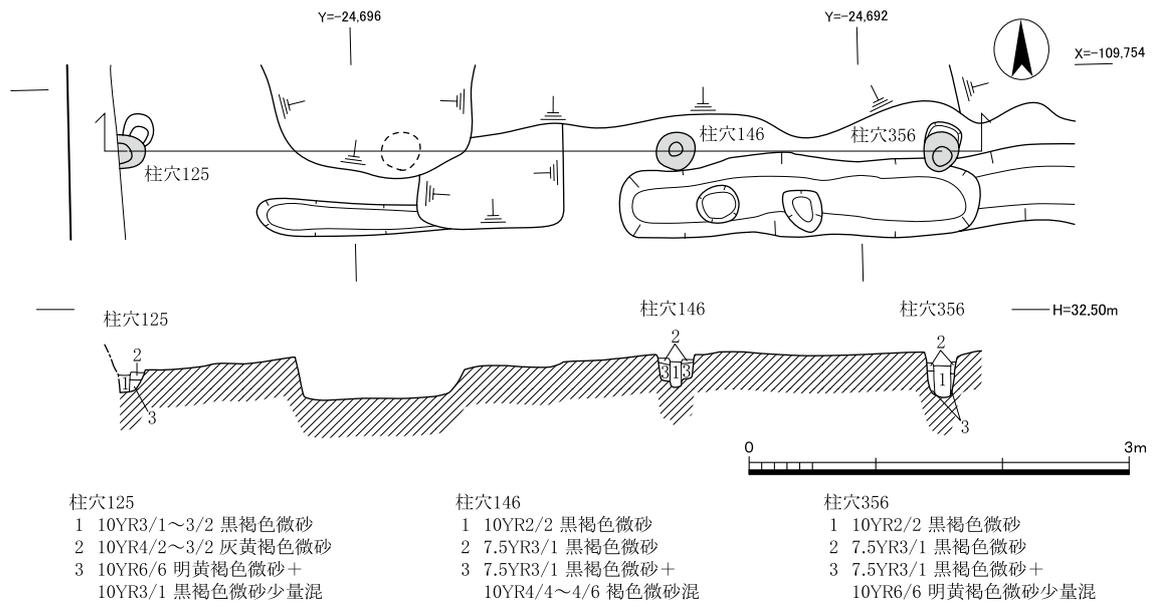


図18 柵8実測図(1:60)

柵6(図17、図版6) 調査区の中央で検出した南北方向に4間の柵。柱間は等間で2.4m(8尺)である。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.55m、深さ0.1~0.2mを測る。柱穴234の柱痕跡の中位から貞観永寶(初铸870年)が重なった状態で出土した。Ⅱ期新段階の土師器皿が出土した。

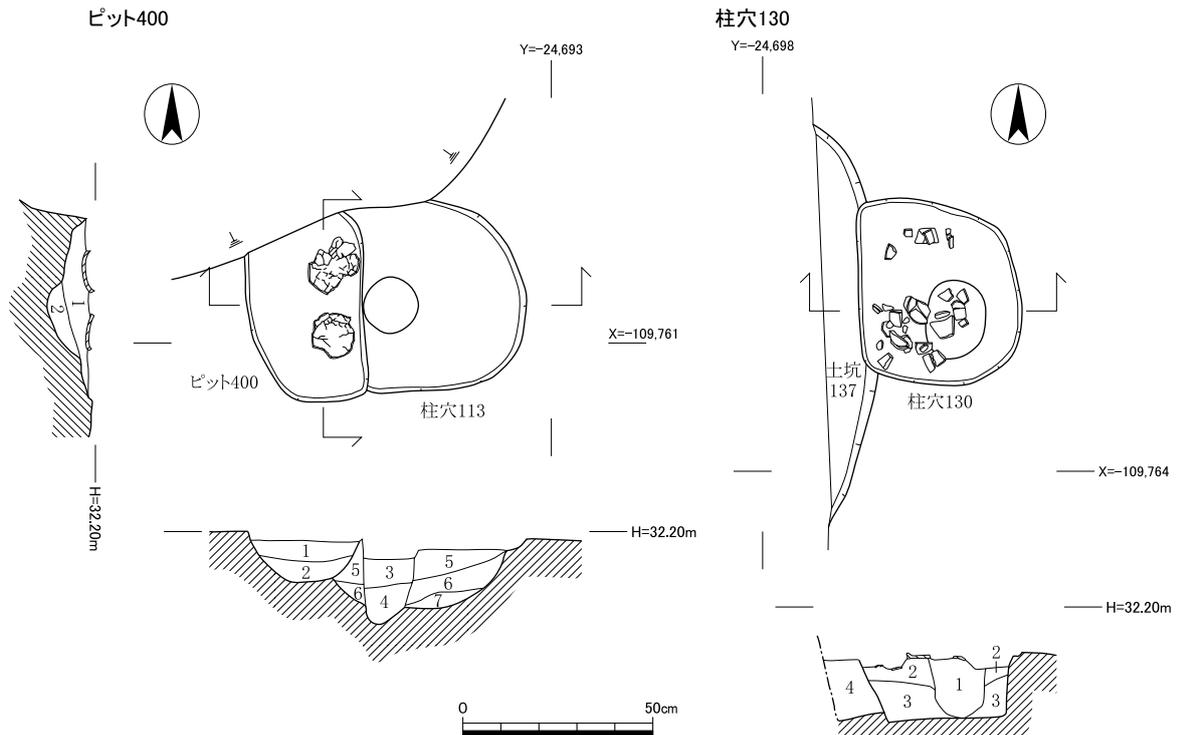
柵7(図17) 調査区の北西部で検出した東西方向に5間の柵。東から3つ目の柱穴は攪乱により失われている。柱間は等間で2.4m(8尺)である。柱掘形の平面形は円形また楕円形を呈し、径0.55m、深さ0.2~0.35mを測る。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

柵8(図18) 調査区の南西部で検出した東西方向に3間の柵。東から3つ目の柱穴は攪乱により失われている。柱間は等間で2.1m(7尺)である。柱掘形の平面形は円形を呈し、径0.55m、深さ0.3mを測る。遺物は小片で時期は不明であるが、北三門と四門の境界推定位置で検出されたこと、溝153と溝90の間に位置することなどから、宅地境界の柵と考えられる。

ピット400(図19、図版6) 西部で検出した土器埋納ピット。北側の一部は攪乱によって失われている。平面形は長方形を呈し、南北0.5m以上、東西0.3m、深さ0.15mを測る。掘形の東側で土師器甕の胴部を南北に並んだ状態で2個検出した。土器はほとんどの部分が後世の削平によって失われており、全体の形や時期は不明である。

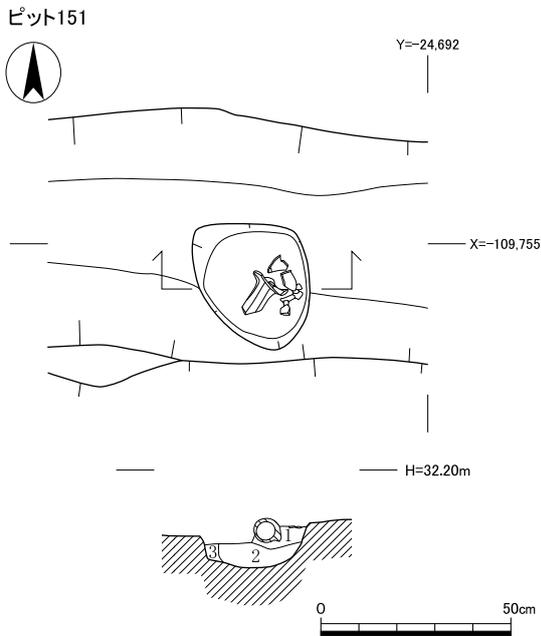
柱穴130(図19、図版5) 調査区南西部で検出した柱穴。柱掘形の平面形は長方形を呈し、南北0.5m、東西0.4m、深さ0.19mを測る。柱掘形と柱痕跡の上面では3~5cmの土師器・緑釉陶器などの土器片を検出した。柱痕跡の土器片は、掘形埋土に含まれていたものが、柱の抜き取り後あるいは腐朽後に柱痕跡上面に及んできたものと思われる。土器は建物建築時の祭祀に使用されたものである可能性もある。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

ピット151(図19、図版5) 調査区南西部の中世の素掘り溝の下層で検出した土器埋納ピット。平面形は方形を呈し、一辺0.3m、深さ0.14mを測る。掘形の東側で土師器皿・高杯脚部などを検出した。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

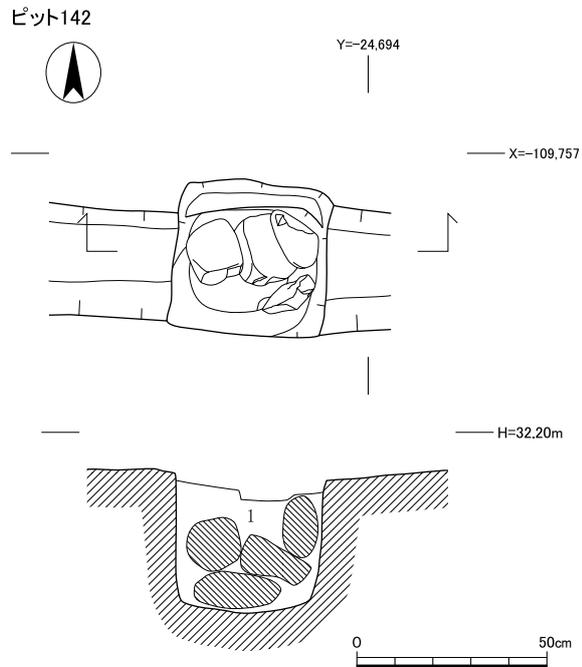


- 1 10YR3/2 黒褐色微砂、φ2cmの礫極少量含む(ピット400)
- 2 10YR3/1 黒褐色微砂(ピット400)
- 3 10YR2/3 黒褐色微砂、炭少量含む(柱穴113)
- 4 10YR3/3 暗褐色微砂(柱穴113)
- 5 10YR2/2 黒褐色微砂(柱穴113)
- 6 10YR2/3 黒褐色微砂、炭少量含む(柱穴113)
- 7 10YR3/2 黒褐色微砂、炭少量含む(柱穴113)

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト粘質、炭・土器片含む(柱穴130)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭含む(柱穴130)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト+10YR4/6 褐色シルト少量混(柱穴130)
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト粘質、炭・土器片含む(土坑137)



- 1 10YR3/2 黒褐色シルト
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト粘質
- 3 7.5YR2/1 黒色シルト粘質+10YR5/6 黄褐色シルトブロック混



- 1 10YR3/1 黒褐色粘土(シルト質)

図19 ピット400・151・142、柱穴130実測図(1:20)

ピット142（図19、図版6） 調査区南西部の中世の素掘り溝の下層で検出した石を埋納したピット。平面形は方形を呈し、一辺0.3m、深さ0.35mを測る。掘形の中からは長さ10～15cm楕円形を呈する砂岩が出土した。柱痕跡は確認できず、石も平坦面を意識していないことから、柱穴とその中に入れられた根石とは考えられない。石を埋納した遺構と考えられる。Ⅲ期古段階の土師器の小片が出土した。

ピット255（図12） 調査区北東部で検出したピット。平面形は楕円形を呈し、長径0.4m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色微砂。緑釉陶器の耳皿（図31－64）が出土した。

ピット342（図12） 調査区北東部で検出したピット。平面形は楕円形を呈し、長径0.4m、深さ0.35mを測る。埋土は黒褐色微砂。灰釉陶器の風字硯（図34－110）が出土した。

土坑158（図20、図版5） 調査区北西部で検出した土器埋納土坑。平面形は楕円形を呈し、南北0.5m、東西1.1m、深さ0.2mを測る。掘形の中央、底面より0.1m上で土器類が出土した。土器には土師器皿、黒色土器杯と甕、緑釉陶器の皿がある。緑釉陶器皿は3枚を正位置で重ねた状態で出土し、このうち2枚は法量・色調・焼成ともに極めてよく似る。いずれも完形ではなく一部を打ち欠いていた。土師器・黒色土器はいずれも破片である。出土した土器類はⅡ期中段階である。

土坑259（図20、図版6） 調査区北東部で検出した石を埋納した土坑。平面形は楕円形を呈し、南北0.78m、東西0.9m、深さ0.3mを測る。掘形は2段に掘られ、南側の一段深く掘り下げられた部分に石が埋納される。石は中央に大きな石の上面を水平に据え、その周辺に小さな石を根固めするように巡らす。中央の石は南北25cm、東西40cm、厚さ18cmを測る。石材は珪岩である。周囲に巡らす石は、長さ5～10cmを測り、石材は、表面で検出した47個の内、チャートが36個、砂岩が

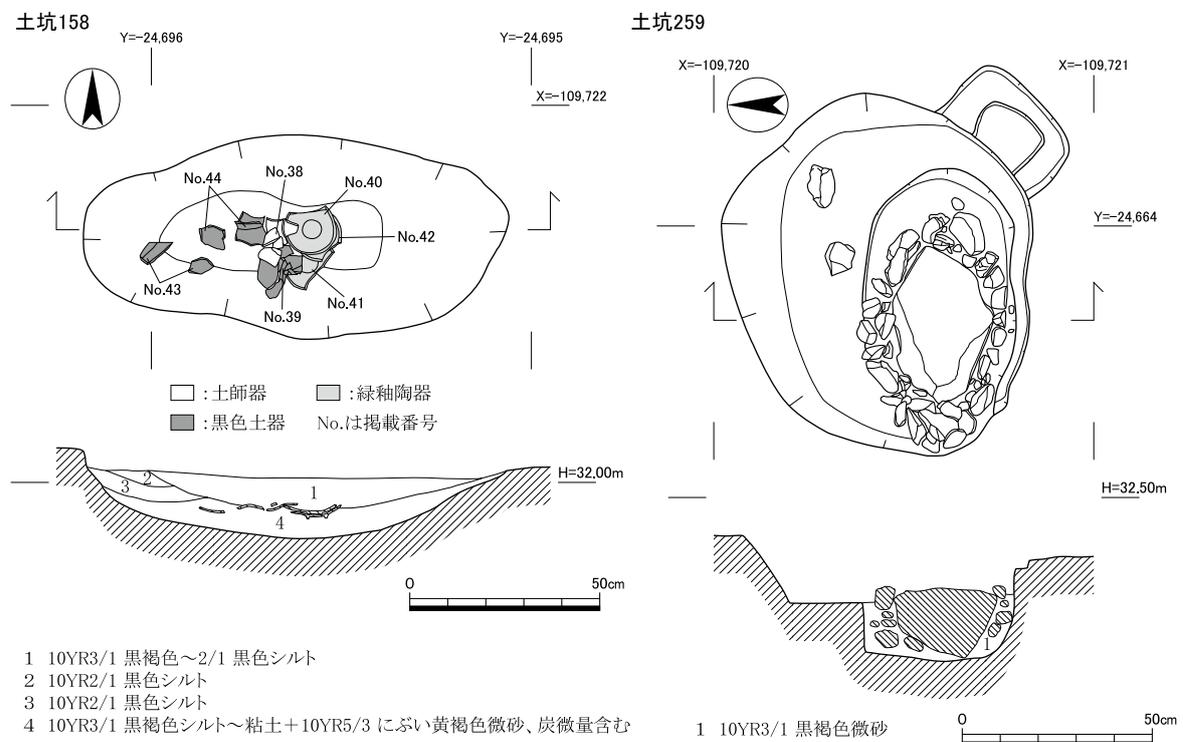
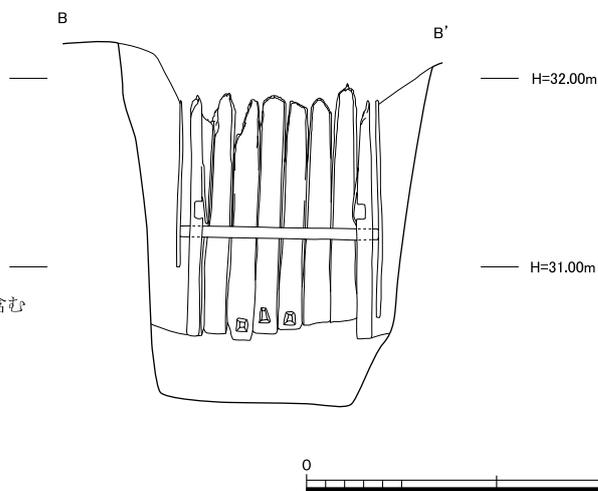
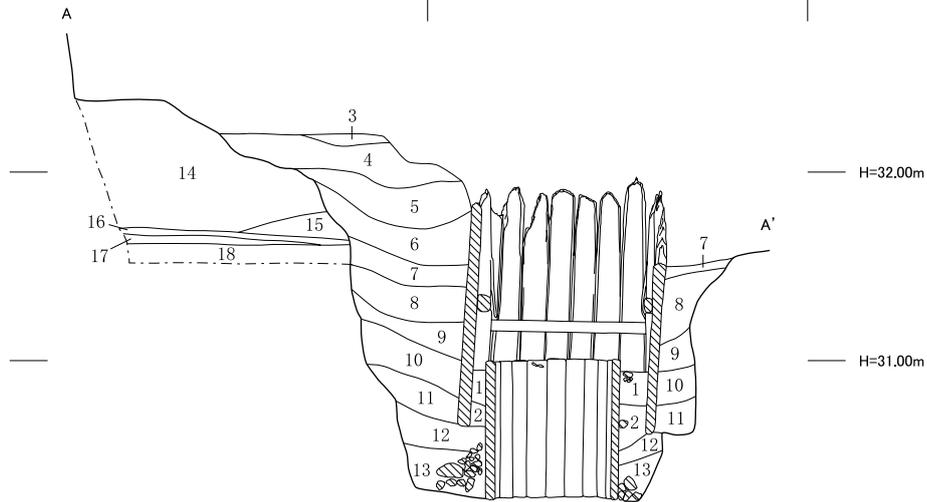
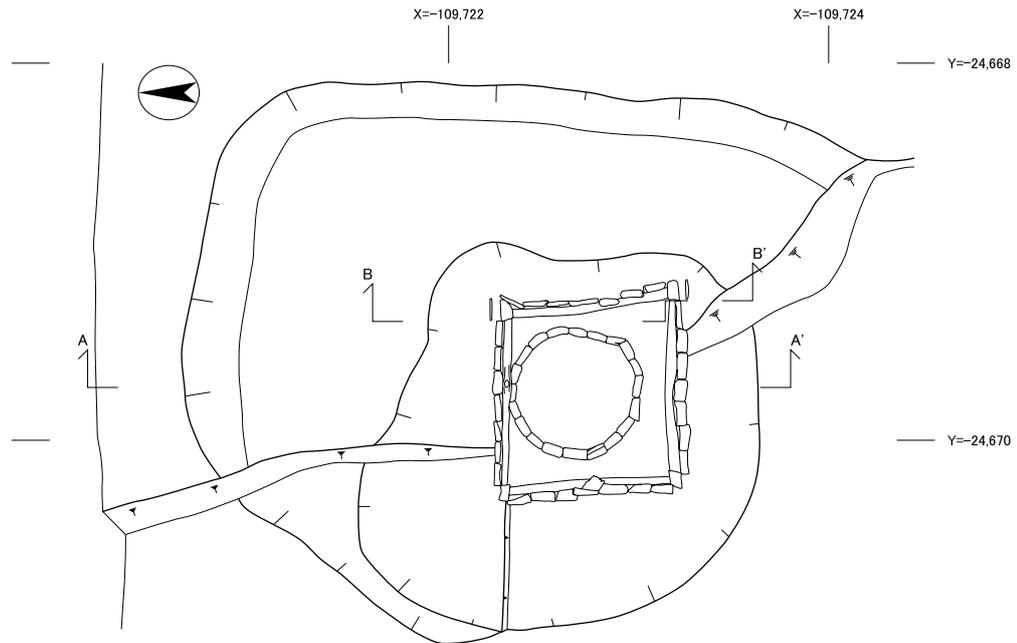


図20 土坑158・259実測図（1：20）



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂、
φ2~5cmの礫多量含む
- 2 10YR6/3 にぶい黄褐色粗砂、
φ2cmの礫多量含む
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト+14層ブロック少量混
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト+14・17層ブロック少量混
- 5 14層:15層:16層=2:2:1で混合
- 6 15層:16層:17層=2:2:1で混合
- 7 15層:16層=1:1で混合
- 8 15層:16層=1:2で混合
- 9 15層:16層=1:3で混合
- 10 15層:16層=1:2+で混合、φ5~10cmの礫多量含む
- 11 15層:16層=1:4で混合、φ2~5cmの礫多量含む
- 12 10YR5/1 褐灰色粗砂、φ2~5cmの礫多量含む
- 13 10YR6/1 褐灰色粗砂、φ2~10cmの礫多量含む
- 14 10YR6/6 明黄褐色シルト~微砂(地山)
- 15 10YR6/1 褐灰色シルト~微砂(地山)
- 16 10YR3/1 黒褐色シルト~微砂(地山)
- 17 10YR4/1 褐灰色シルト~微砂(地山)
- 18 10YR4/2 灰黄褐色微砂(地山)

図21 井戸340実測図 (1:40)

10個、泥岩が1個である。時期は、須恵器甕の口縁部が出土したのみで明らかにしがないが、9～10世紀である。建物3に付随する地鎮遺構の可能性もある。類例として右京三条三坊十五町の地鎮遺構がある²⁷⁾。

井戸340 (図21、図版3・4) 調査区北東部で検出した井戸。井戸枠と水溜の上下2段構造となっており、井戸枠は方形縦板横棧組、水溜部は円形縦板組である。平安京内において、平安時代前期・中期の井戸で、水溜が円形縦板組の構造を持つものは類例がない。西半部は攪乱により掘形の上半部が失われている。掘形は南北3.4m、東西3.0m、深さ2.1mを測る。掘形の埋土は地山の黒褐色シルトを主とし褐灰色シルトがブロックとして混合する。掘形最下層には水溜を根固めするための礫が多く含まれる。

方形縦板横棧組の井戸枠は一辺約1mを測る。縦板は幅10～15cm、厚さは8～10cmを測り、四辺にそれぞれ7枚ずつ並べる。下方に榑木として運ばれた際の方形の穴が残るものがある。四隅に立てられた隅柱は、幅9～10cm、厚さ約8cmを測り、幅に対して厚みはない。隅柱には横棧を組み合わせるための柄穴を穿つ。柄穴は東西方向と南北方向2本の横棧を受けるために2方向に穿たれる。柄穴は東西方向の横棧を組み合わせるためのものが上位に、南北方向に組み合わせるためのものは下位に穿っている。横棧は長さ100cm、幅6cm、厚さ5cmを測る。先端は柄を削り出し、隅柱の柄穴に差し込むが、東側の棧木は隅柱を突き抜け隅柱の背面に立てられた縦板に当てる。

円形縦板組の水溜は径0.7mを測る。縦板は幅8～12cm、厚さは6～9cmを測り、20枚を円形に並べる。それぞれの縦板には上下2つの柄穴が穿たれ、互いを太柄によって繋がれる。太柄は方形を呈し、長さ9cm、幅6cm、厚さ4cmを測る。

手斧による調整は、井戸枠・水溜ともに縦板外面にはごく一部、内面の方が比較的丁寧であるが水溜の縦板側面に最も丁寧に施される。材質は横棧と太柄がヒノキで、縦板と隅柱はスギである。

溝88 (図22～24) 調査区南西部で検出した東西方向の溝。北三・四門の境界推定地付近に位置する。幅0.3～0.6m、深さ0.1mを測る。東側は攪乱によって失われ、西側は後世の削平のためか途切れている。溝90に先行する溝である。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

溝90 (図22～25) 調査区南西部で検出した東西方向の溝。北三・四門の境界推定地付近に位置する。西側は調査区外へと続き、東側は攪乱によって失われている。幅0.7～1.2m、深さ0.1～0.15mを測る。溝底は西側に向かってわずかに傾斜する。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

溝116・153 (図22～25、図版7) 溝116と溝153は調査区南西部で検出した東西方向の溝。北三・四門の境界推定地付近に位置する。溝116は北側に土坑218が存在する。調査段階の遺構掘り下げ時は、溝116と一つの遺構として掘り下げを行ったが、断面観察の結果、これは溝116埋没後に掘削された土坑であることが判明した。この土坑218を除くと溝116の平面形は長方形となる。

溝116は、平面形がやや不整形な長方形を呈する溝で、東側は後世の削平のために一部途切れながら検出したが、これより東は失われている。新旧の2時期がある。旧段階は検出長17.5m、幅2.0～3.0m、深さ0.18～0.35mを測り、溝底は西側へ傾斜する。溝の西側は調査区外へと続く。新段階では、西側の一部を褐灰色シルトを主とする土で埋め、西側への排水機能が消失する。新段階は検

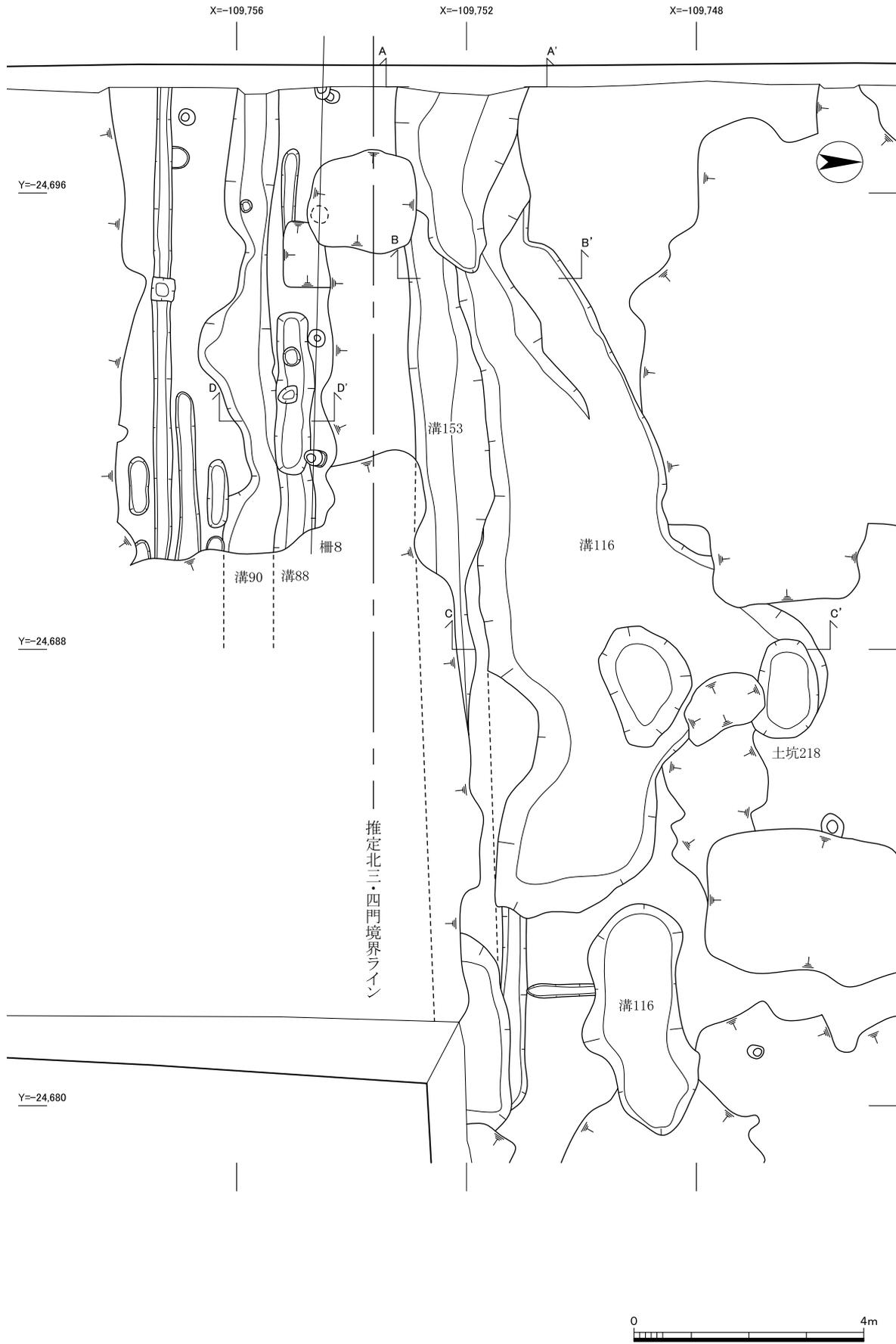


図22 溝116周辺平面図 [古段階] (1 : 100)

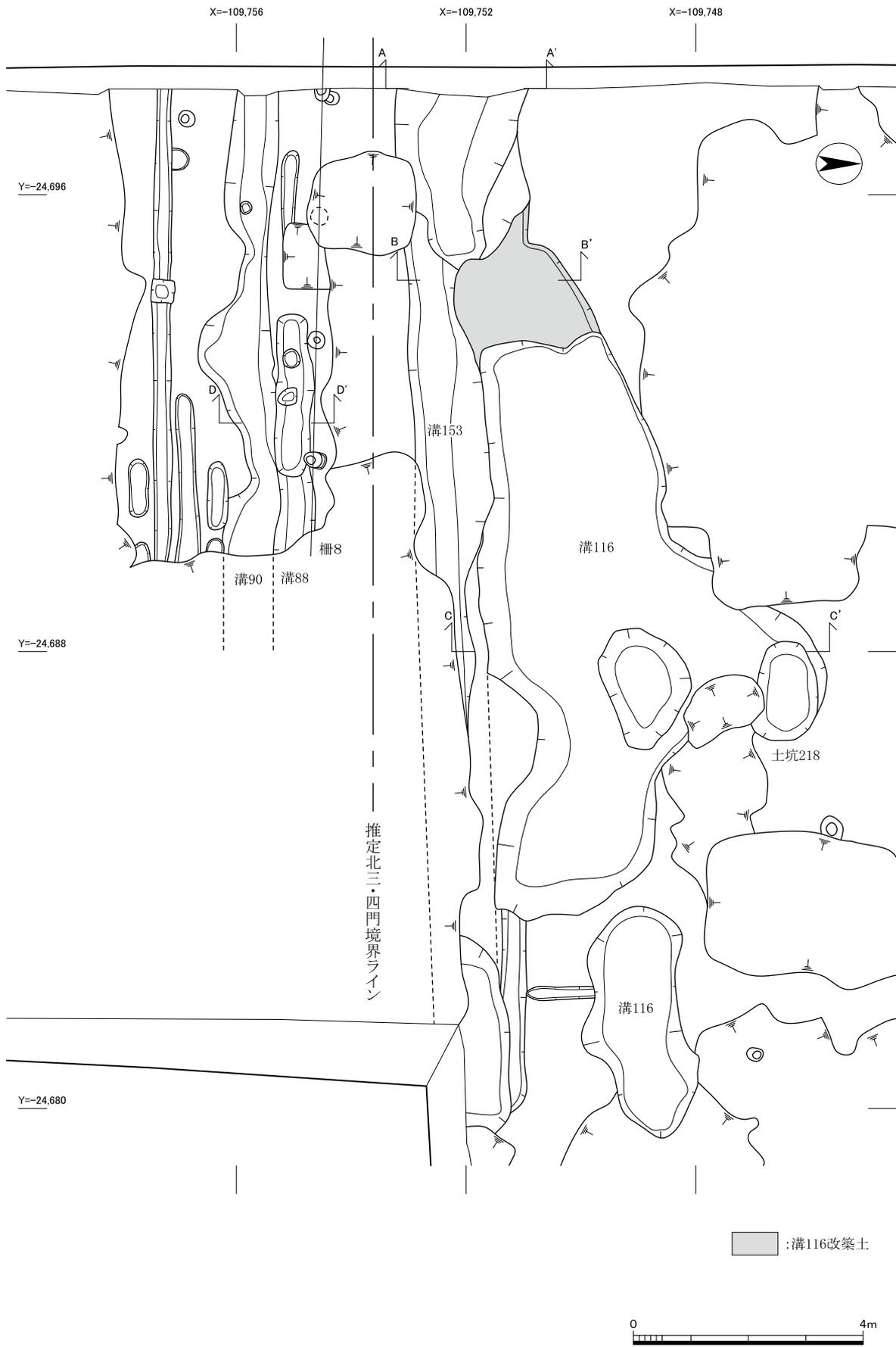


図23 溝116周辺平面図 [新段階] (1 : 100)

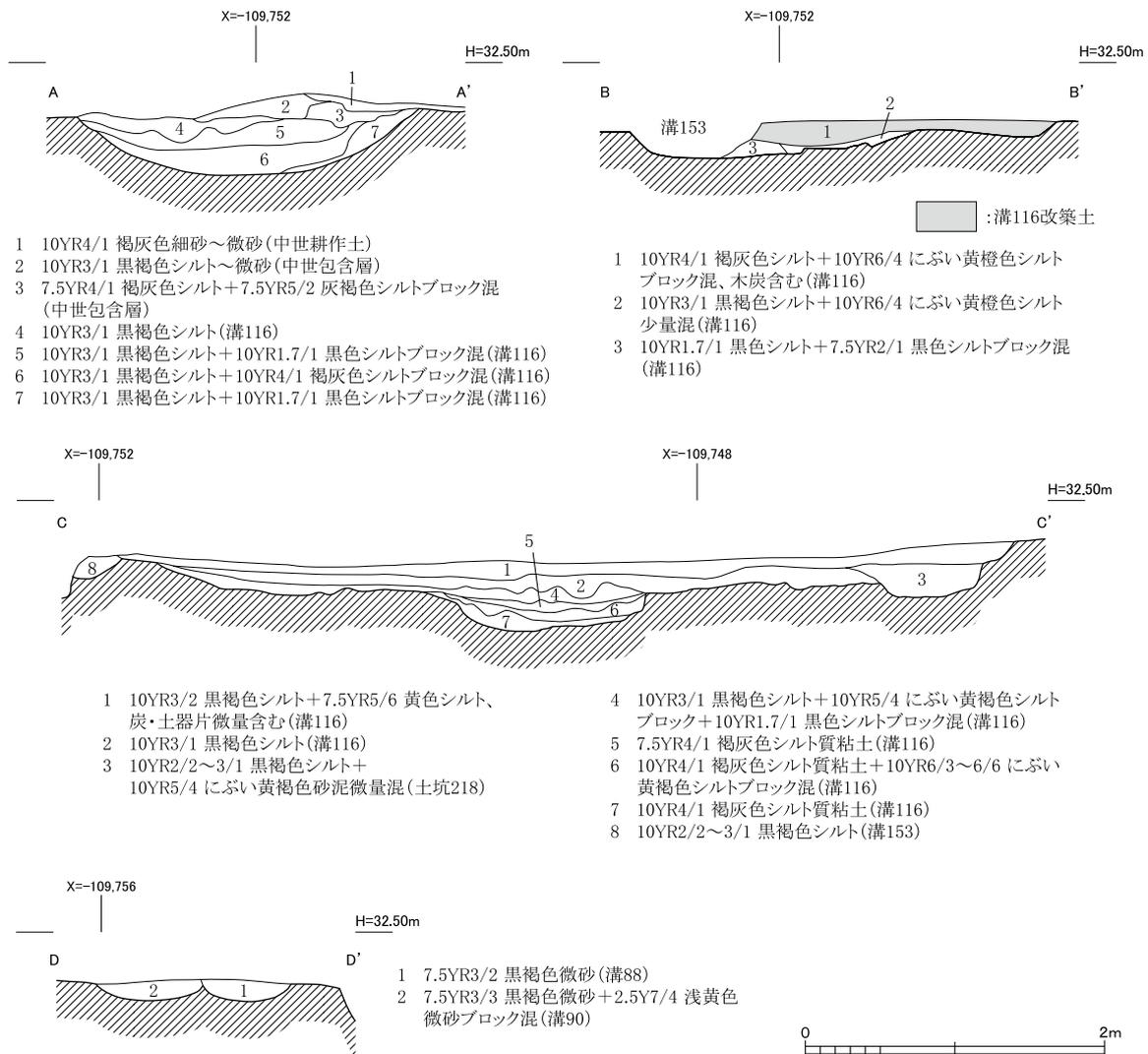


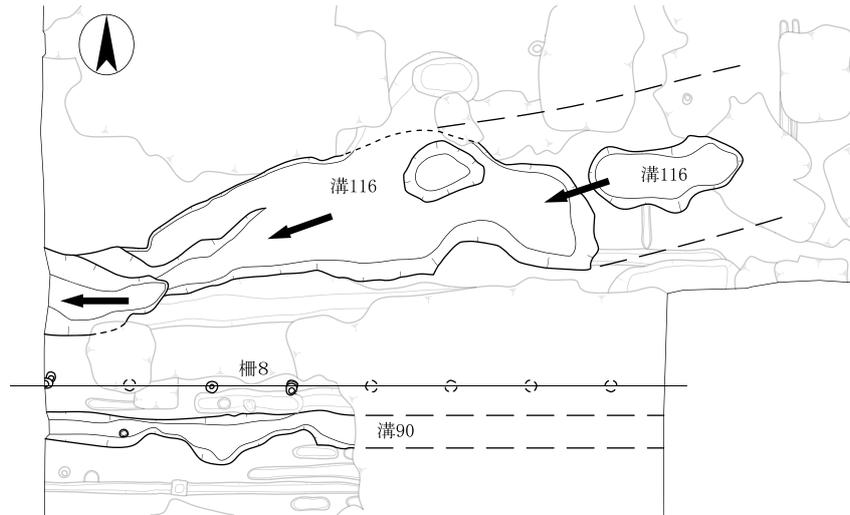
図24 溝116・153・88・90断面図(1:50)

出長16.0mである。溝116の中央部の断面観察では滞水状況であったことを示す土層(図24 C-C'断面図の7層)の堆積が確認され、新段階では貯水機能を持った遺構に変化していたと思われる。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

溝153は溝116の南側に位置する。検出長16.0m、幅0.8～1.0m、深さ0.15～0.35mを測り、溝底は東側へ傾斜する。溝の西側は調査区外へと続き、東側は後世の削平や攪乱によって失われている。西壁際では溝116の古段階と重なることから、溝116新段階の排水機能を持った溝であることがわかる。西壁断面から黒褐色シルトに褐灰色シルトのブロックを含む土で一気に埋め立てられている。Ⅲ期古段階の土器類が出土した。

溝116は、旧段階では排水機能を持った溝であったと思われる。宅地境界の溝としては規模が大きい。調査区の中ではこの付近が最も低く、調査区北東部とでは約0.4mの高低差がある(図7)。集中する雨水に対して集排水機能を高める必要性があったためと思われる。しかし、集水機能が高い溝は、調査区よりさらに低くなる西側では雨水が一気に集中し溢水する可能性もある。このため、新段階では溝116の南側に溝153を掘削して、排水機能はこれに代えた。溝116は一部を埋めて

古段階



新段階

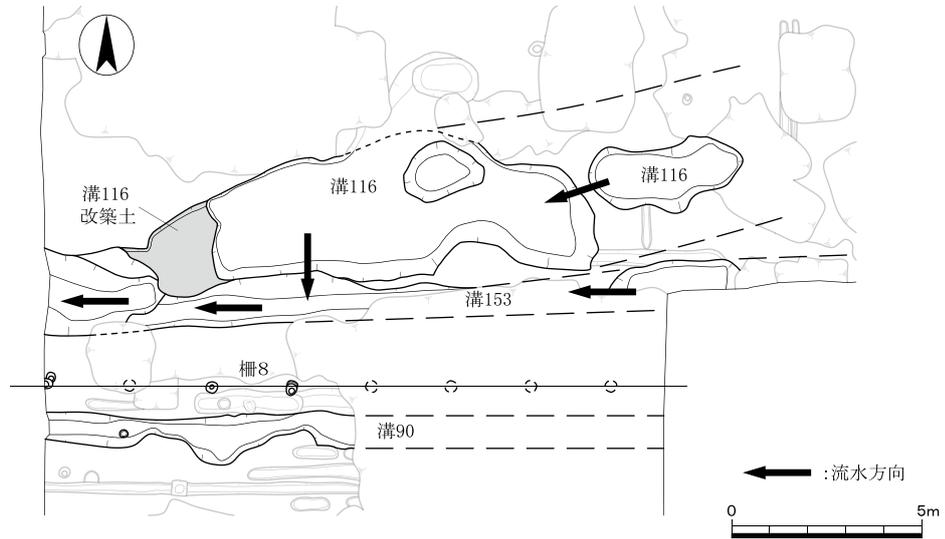


図25 北三・四門境界排水遺構変遷図 (1 : 200)

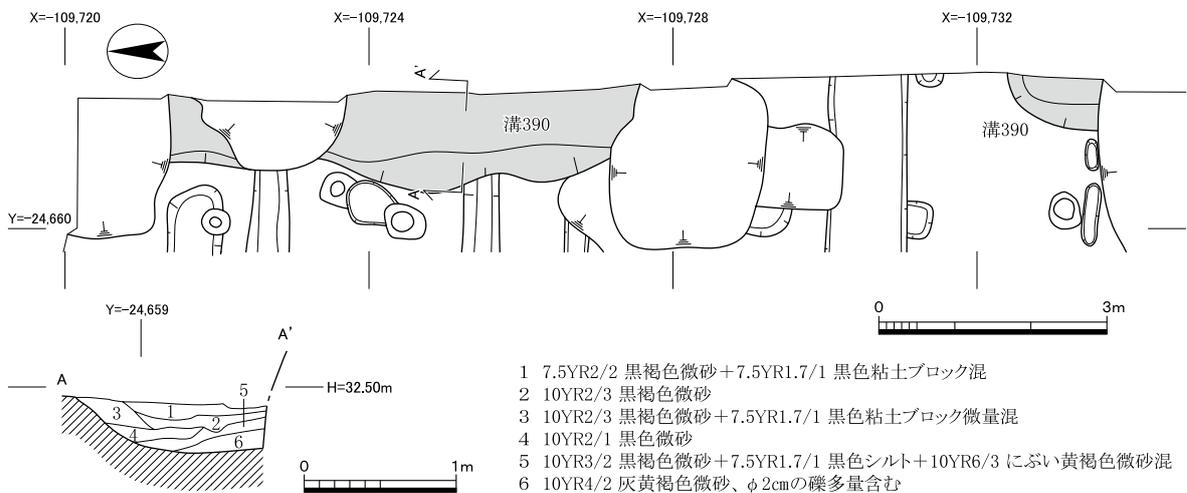


図26 溝390実測図 (平面図 1 : 100、断面図 1 : 50)

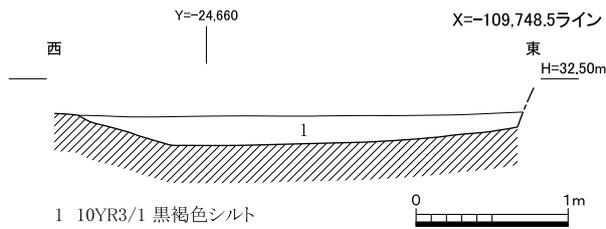


図27 落込み41断面図 (1 : 50)

流水機能をなくして貯水機能を持たせ、これから溢れる水を溝153に流す調整池的な機能を持つものに変化したものと考えられる。

溝390 (図26) 調査区東壁際で断続的に検出した南北方向の溝。検出長12.2m、幅1.2m以上、深さ0.3mを測る。遺物は小片のため

に図示できないが、Ⅲ期新段階の土器類が出土している。検出位置と規模・埋土・時期から2005年にこの北側で検出された道祖大路東側溝の南延長部と考えられる。

落込み41 (図27) 調査区南東部で検出した落込み。東西8m以上、南北7m以上、深さ0.2mを測り、東と南は調査区外へと続いていく。埋土は均質で比較的多くの土器類を含む。自然地形の凹みを埋め立て整地したものと思われる。出土した土器類はⅡ期中～新段階である。

(5) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は調査区南西部の南壁際で検出した溝が1条のみである。遺構埋土は、平安時代と同様に黒褐色微砂を主体とする。

溝396 (図28、図版8) 北東から南西方向の溝である。北半は現代の攪乱を受けるが下半部を検出した。南北側とも調査区外に延びる。断面形は逆台形で、最大幅1.6m、深さ約0.7mを測る。溝の底面は北東から南西に傾斜する。埋土は黒褐色シルトを主とし、底部には流水による堆積層がみられる。遺物は出土しないが、今回の調査の南西側で2009年度に行われた調査で古墳時代の溝が検出されている。溝396の南西延長部に位置しており、規模・形状も近いことから一つの遺構として考えられる。

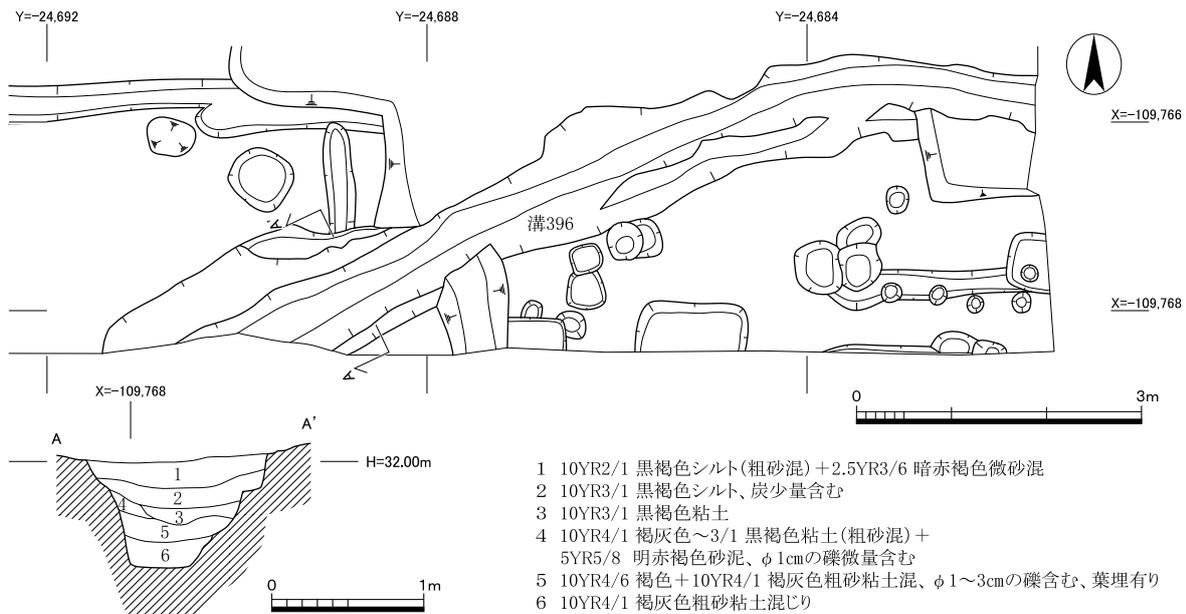


図28 溝396実測図 (平面図1 : 80、断面図1 : 50)

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物には土器類・瓦類・銭貨・木製品があり、この他に種実などの植物遺体などがある。出土遺物の大半は土器類が占め、瓦類の出土はほとんどない。

時代別にみると、平安時代が約9割、室町時代と江戸時代で約1割である。平安時代は9世紀後半から10世紀前半のものに限られ、9世紀前半と10世紀後半以降のものはない。また、鎌倉時代の遺物はほとんど出土しない。

以下では遺物種類ごと、遺構別に出土遺物について述べる。なお、遺物の時期の表記は遺構と同じく、平安京・京都Ⅰ期～Ⅳ期の編年案を準用する。

(1) 土器類

土器類には、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・焼締陶器・施釉陶器・中国産陶磁器などがある。平安時代の輸入陶磁器は極めて少なく、白磁・青磁が各1点出土したのみである。

落込み41(図29、図版9・10) 土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土している。1～17は土師器。1・2は皿。1は色調がやや赤みを帯び、胎土に雲母と赤色のくさり礫を含む。2は1に比べてやや薄手で口縁部の屈曲が強い。3～9は椀。口径13.6～14.2cmを測る。口縁部はいずれも小さく屈曲し、端部は上方に小さくつまみ上げる。4は他のものに比べて器壁が薄い。10～16は杯。口径14.6～15.7cmを測る。口縁部はいずれも小さく屈曲し、端部は上方に小さくつまみ上げる。17は甕。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は内側に肥厚する。体部外面には縦方向のタタキを施し、他はナデによって仕上げる。18は黒色土器羽釜。色調は全面黒色である。鏝部の表裏面を含め全面にヘラミガキを施す。19～27は須恵器。19・20は杯A。いずれも焼成は不良で、色調は灰白色を呈する。21・22は杯B。21は焼成不良で、色調は灰白色を呈する。22は0.1～0.3mm程度の白色粒を多く含む。23は甕。24～27は壺。24は短径壺。胴部と肩部との境は明

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、硯、木製品、銭貨		土師器39点、黒色土器10点、須恵器17点、緑釉陶器25点、灰釉陶器9点、輸入陶磁器2点、硯4点、木製品1点、銭貨4点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、銭貨		土師器4点、銭貨1点		
江戸時代以降	焼締陶器、施釉陶器、磁器、銭貨		銭貨1点		
合計		53箱	117点(4箱)	0箱	49箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。上記の他に井戸340の井戸枠材がある。

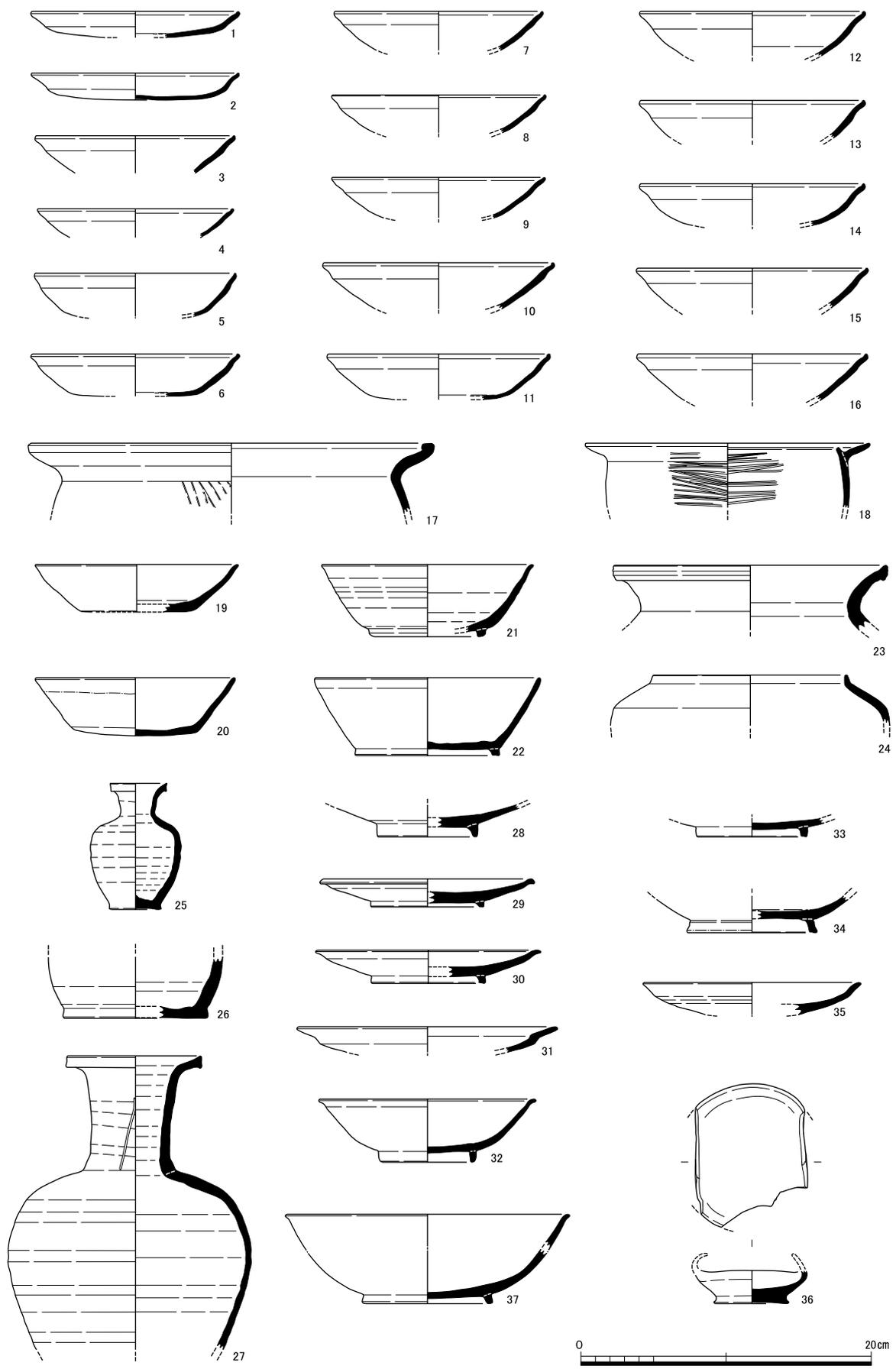


图29 落込み41出土土器実測図 (1 : 4)

瞭で、内傾する肩部に直立する短い口縁が付く。25は小型の壺。丸みを帯びた体部に外傾気味の頸部が付く。口縁部はほぼ直立し、端部は上方につまみ上げる。底部は糸切痕が残る。26は壺の底部。底部にヘラ切痕が残る。27は長頸壺。丸みを帯びた体部に外傾気味の頸部が付く。口縁部はほぼ直立し、端部は上方につまみ上げる。頸部に縦方向の一本線のヘラ記号を施す。頸部から肩部にかかる自然釉はヘラ記号のある部分に厚く掛かる。猿投窯産である。体部内面には皮膜として残る付着物がある。付着物の色調は乳白色を呈する。付着物は肩部より下に3条の帯状に残る。帯の幅は8～10mm、それぞれの間隔は約10mmを測る。以上の遺存状況から、付着物はもともと液体で、内容量の変化と共に付着物が3条の帯状に残されたものと思われる。28～32は灰釉陶器。28～30は皿。28は皿の底部。高台の断面形は三角形を呈し、端部は丸く収まる。遺存部分に灰釉の施釉はない。29・30は共に体部の立ち上がりは低く、口縁端部は小さく外反する。高台は低く、断面は方形を呈する。ヘラミガキは外面底部を除き粗く施し、灰釉の施釉は内面のみである。31は段皿。32は椀。体部は丸みを持ち、口縁端部は小さく外反する。高台はいわゆる三日月高台である。33～37は緑釉陶器。33・34は底部。高台は貼り付けで、断面は方形を呈する。ヘラミガキは、33は外面底部まで施し、34は外面底部には施さない。東海産。35は皿。体部と口縁部の境は鈍い稜をつくり、口縁部は外反する。ヘラミガキは粗い。焼成は須恵質。京都産。36は耳皿。内外面に施すヘラミガキは極めて粗い。外面底部に糸切痕を残す。外面底部を除いて施す緑釉は極めて薄い。焼成は須恵質であるがやや軟質である。京都産。37は椀。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は小さく外反する。高台は低く、断面は方形を呈する。ヘラミガキは外面底部にまで密に施す。緑釉は淡緑色を呈し均質に施釉される。東海産。以上、落込み41出土土器の時期はⅡ期中～新段階である。

土坑158(図30、図版9) 38は土師器杯。底部は平坦で、体部は開きながら立ち上がる。口縁部は屈曲し、端部は上方へつまみ上げる。39は黒色土器A杯。底部は平坦で、体部は丸みを持って立ち上がる。口縁部は丸く収まる。ヘラミガキは外面底部を除いて施す。40～42は緑釉陶器皿。40は体部の立ち上がりは低く、口縁端部はわずかに外反し、口縁内側はわずかに凹む。高台は蛇の目高台。ヘラミガキは外面底部を除き内外面に粗く施す。焼成は須恵質で、緑釉は外面に極めて薄く施釉する。京都産である。41・42は形態・焼成・色調共に極めて似る。体部はやや丸みを持って低く立ち上がり、口縁端部は外反せず丸く収まる。口縁内側はわずかに凹む。高台は輪高台。ヘラミ

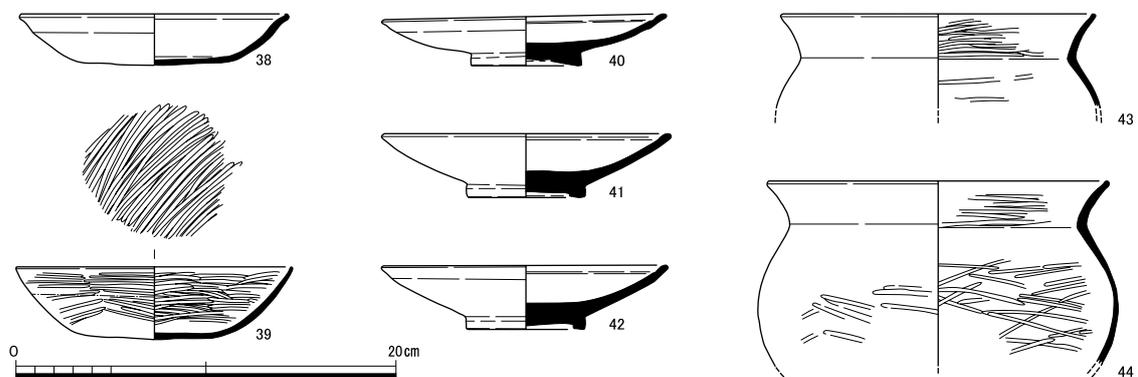


図30 土坑158出土土器実測図(1:4)

ガキは外面底部を除き内外面に粗く施す。焼成は須恵質で、色調は灰色を帯びた緑色を呈する。京都産である。43・44は黒色土器甕。ヘラミガキを体部および口縁内部に施す。44の方が口縁部が強く屈曲する。以上、土坑158出土土器の時期はⅡ期中段階である。

柱穴130(図31) 45～48は土師器皿。口径から12.8cmの45・46と口径14.0cm前後の47・48がある。いずれも口縁部は屈曲し、端部を上方につまみ上げ、器壁は薄い。49は黒色土器A碗の底部。内面のヘラミガキは極めて粗い。全体に磨滅が著しい。50・51は緑釉陶器。50は皿の底部。高台はわずかに外側に開き、断面形は方形を呈する。ヘラミガキは内面は施すが外面には施さない。緑釉は全体に施釉するが極めて薄い。東海産。51は碗の口縁部。口縁部は外側に開き、端部は外反する。内外面のヘラミガキは極めて粗い。以上、柱穴130出土土器の時期はⅢ期古段階である。

ピット151(図31) 52・53は土師器皿。いずれも口縁部は屈曲し、端部を上方につまみ上げる。器壁は52の方が薄い。54は土師器高杯の脚部。脚部は断面10角形を呈し、上部から中部に向かっ

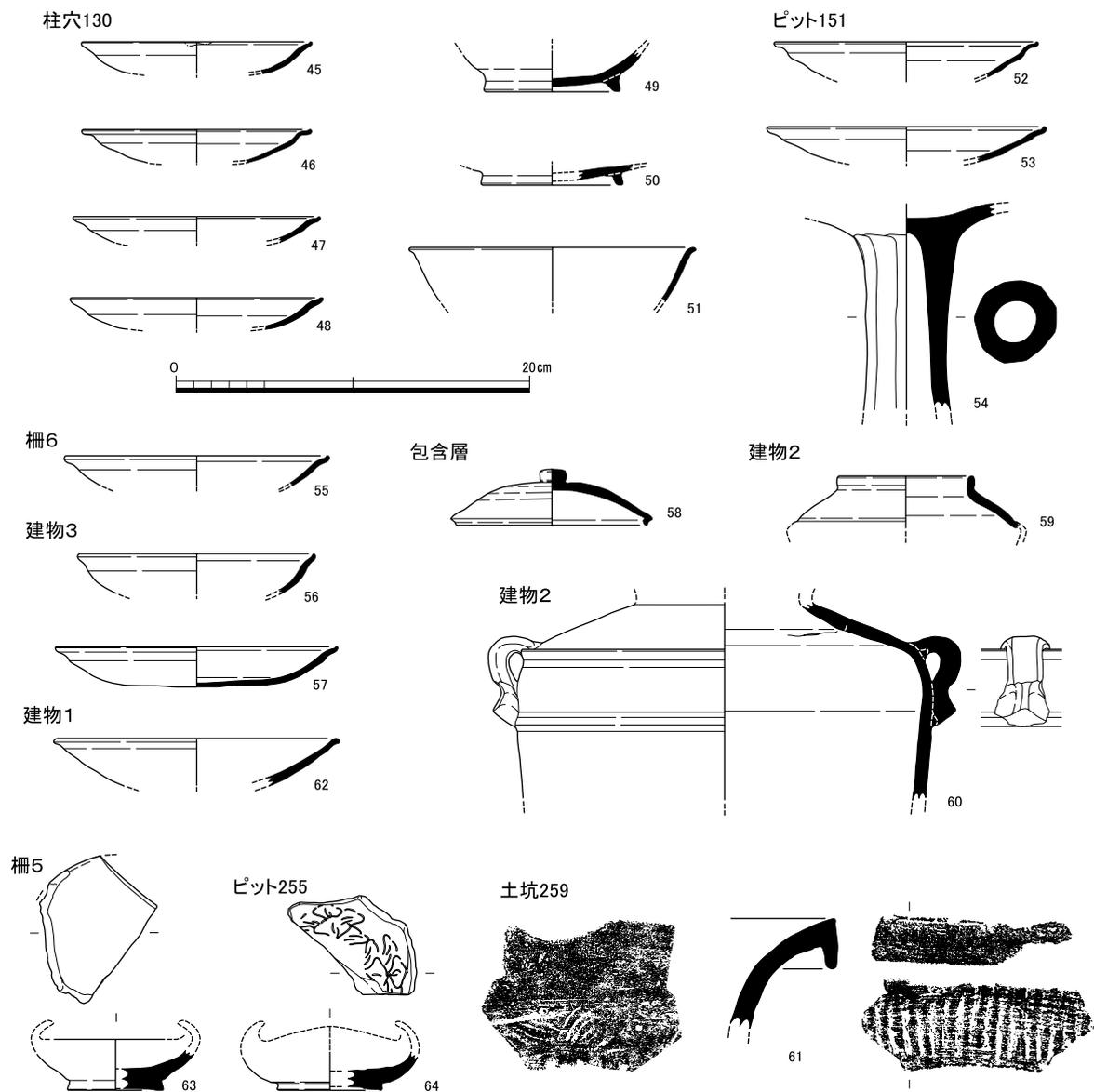


図31 柱穴・ピット・土坑・その他出土土器実測図(1:4)

て細くなる。以上、ピット151出土土器の時期はⅢ期古段階である。

柵6（図31）55は柵6の柱穴232から出土した土師器皿。口縁部は屈曲し、端部を上方につまみ上げる。器壁はやや薄い。Ⅱ期新段階である。

建物3（図31）56・57は建物3の柱穴313の柱痕跡から出土した。56は土師器杯、57は土師器皿。Ⅱ期新段階である。

包含層（図31、図版9）58は調査区北西部（図7の北壁第8層）から出土した須恵器蓋。天井部は丸みを帯びて外側に開き、中心に小さなつまみが付く。口縁端部は下方に突出する。色調は褐色を帯びた灰色を呈し、胎土には0.1mmの白色粒を多く含む。猿投窯産。

建物2（図31、図版10）59は建物2の柱穴322の柱痕跡から出土した須恵器短頸壺。肩部はやや丸みを帯び、口縁部は短く直立する。体部は失われているが、肩部と体部の境は屈曲し凹む。60は建物2の柱穴323の柱痕跡から出土した須恵器双耳壺。直立気味の体部から肩部はやや丸みを帯びて立ち上がる。体部には2条の突線を貼り付け、上下の突線を繋ぐように耳を貼り付ける。色調は白みを帯びた灰色を呈し、胎土はやや粗く約1mmの白色粒を多く含む。肩部に自然釉が掛かる。播磨産である。²⁸⁾

土坑259（図31）61は須恵器甕。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は下方に折れ曲がり幅広の縁体をなす。口縁部外面には縦方向のタタキが、口縁部内面には同心円状の当て具痕跡が残る。

建物1（図31）62は建物1の柱穴316の柱痕跡から出土した灰釉陶器皿。口縁端部は小さく外反し丸く収まる。灰釉は内外面にハケ塗りで施す。

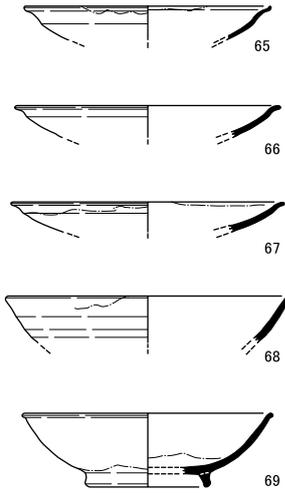
柵5（図31）63は柵5の柱穴333の柱痕跡から出土した緑釉陶器耳皿。高台部は平高台で糸切痕跡が残る。緑釉は外面底部を除き薄く施釉し、色調は暗い緑色を呈する。焼成は須恵質である。京都産。

ピット255（図31）64は緑釉陶器耳皿。高台部は蛇の目高台で糸切痕跡が残る。内面底部には花文を陰刻する。緑釉は前面に極めて薄くまだらに施釉し、色調は施釉部が淡い緑色、無施釉部が橙白色を呈する。焼成は須恵質である。京都産。

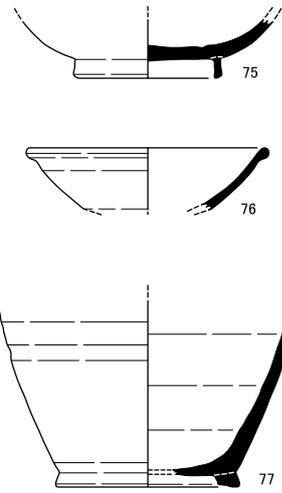
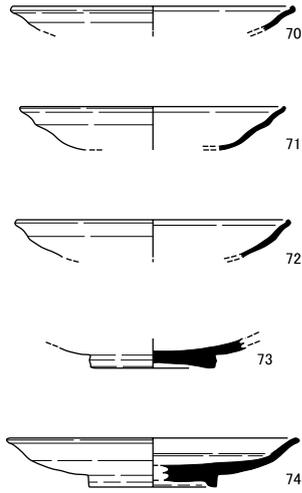
溝88（図32、図版10）65は土師器皿。口縁部は屈曲し、端部は上方につまみ上げる。口縁部にはすずが付着する。66～68は緑釉陶器。66・67は皿。口縁部は外反する。色調は明るい緑色を呈し、焼成はやや軟質である。東海産。68は椀。口縁部は外側に開きながら立ち上がり、端部は丸く収まる。色調は明るい緑色を呈し、焼成は須恵質である。東海産。69は灰釉陶器椀。やや丸みを帯びた体部は外側に開きながら立ち上がる。口縁部は小さく外反する。高台は外下方へ張り出し、端部外面を丸く内方へおさめる、いわゆる三日月高台。灰釉は内外面底部を除きハケ塗りによって施す。以上、溝88出土土器の時期はⅢ期古段階である。

溝90（図32、図版9・10）70～72は土師器皿である。いずれも薄手で、口縁部は屈曲し、端部は上方につまみ上げる。73～75は緑釉陶器。73は底部。高台は平高台。ヘラミガキは外面底部に粗く施される。緑釉は内外面に施されるが極めて薄く素地の色が見える。焼成は須恵質。京都

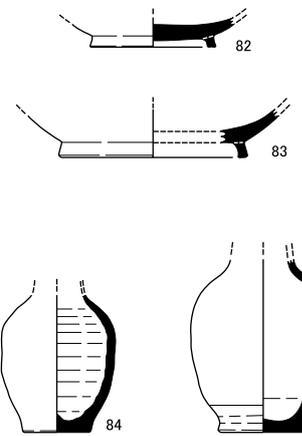
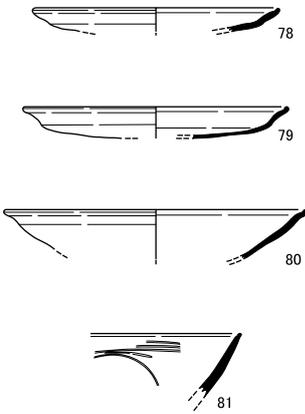
溝88



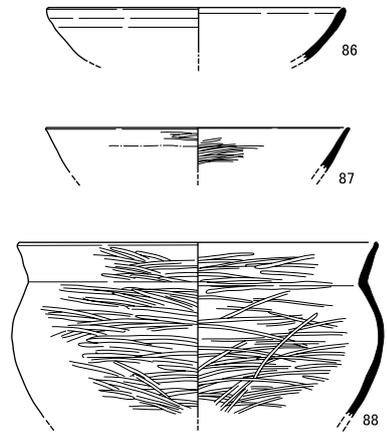
溝90



溝116



溝153



井戸340

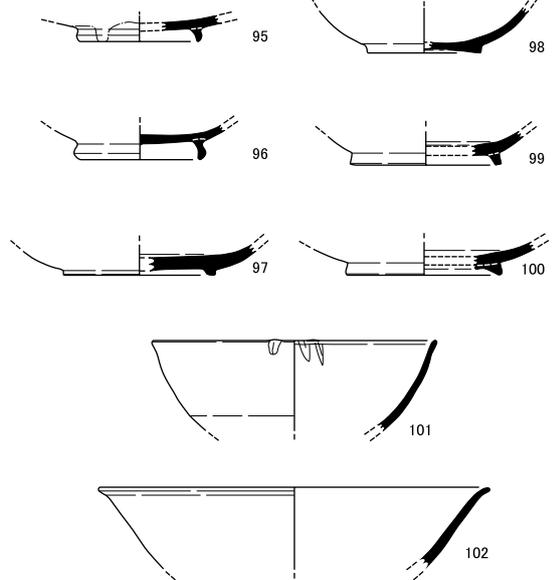
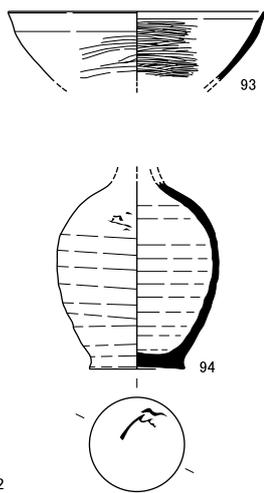
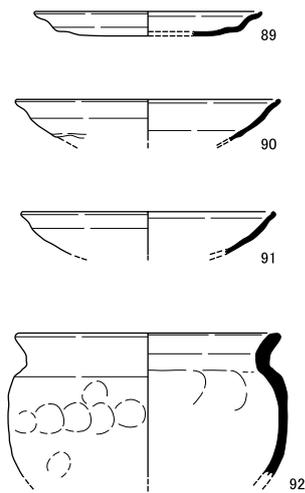


图32 溝88·90·116·153、井戸340出土土器実測図(1:4)

産。74は皿。体部と口縁部の境は外面では鈍い稜をつくり、内面では凹線をなす。高台は削り出しによる輪高台。ヘラミガキは外面底部を除き粗く施される。緑釉は内外面に施され、色調は淡緑灰色を呈する。焼成は須恵質。京都産。75は碗の底部。高台は貼り付けによる輪高台。ヘラミガキは底部外面以外に施される。緑釉は全面に施釉される。内面底部には高台径よりも一回り小さい凹線が丸く巡る。また、この外側には施釉前の乾燥段階で残された高台径と同じ径の浅い凹線が巡る。東海産。76は白磁碗。口縁部は小さく肥厚し玉縁状になる。釉調は滑らかで、色調は純白に近い。77は須恵器壺。体部外面は回転ヘラケズリ、他はナデ調整である。以上、溝88出土土器の時期はⅢ期古段階である。

溝116 (図32) 78～80は土師器皿。78・79は浅手の皿で、器壁は薄い。80は深手の皿と思われる。81は黒色土器A。ヘラミガキは内外面に施されるが、内面はやや疎ら、外面はほとんど施されない。82・83は緑釉陶器の底部。ともに色調は明るい緑色で、焼成はやや軟質である。東海産。82はヘラミガキが内外面に粗く施される。84・85は須恵器の小型の壺。ともに色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。以上、溝116出土土器の時期はⅢ期古段階である。

溝153 (図32) 86～88は黒色土器。86は黒色土器B。内湾しながら立ち上がる口縁部はわずかに肥厚する。2次的な被熱によって器面の炭素はほとんど残っていない。87・88は黒色土器B。87は碗。内面に比べ外面のヘラミガキは粗い。88は甕。体部外面下半はヘラケズリ、他はナデ調整で、ヘラミガキは内外面に粗く施される。以上、溝153出土土器の時期は決定しがたいが、Ⅲ期の範疇で捉えたい。

井戸340 (図32、図版10) 井戸340から出土した遺物は、ほとんどが方形縦板組の井戸枠内からの出土で、わずかに円形縦板組の水溜や掘形からも出土する。90～92は水溜、99は掘形、他は井戸枠内からの出土である。89～92は土師器。89～91は皿。89は浅手の皿で、口縁部は強く屈曲する。92は甕。調整は、外面体部は指押さえが顕著に残り、他はナデである。外面体部は被熱による器面の剥離が認められる。93は黒色土器A碗。外面のヘラミガキは粗い。94は須恵器の小型の壺。糸切り未調整の底部には墨痕が残るが、判読はできない。95・96は灰釉陶器の底部。ともに灰釉は基本的に底部には施されていないが、わずかに掛かる灰釉から漬け掛けであることがわかる。97～101は緑釉陶器の底部。97は削り出しの輪高台、98は削り出しの蛇の目高台。97・98ともに色調は明るい緑色を呈し、焼成は須恵質である。京都産。99は貼り付けの輪高台、100は貼り付けの蛇の目高台。焼成は99・100ともに須恵質である。色調は99はやや暗い緑色、100は明るい緑色を呈する。ともに東海産。101は碗。口縁部はヘラ状工具による押圧によって輪花状を呈する。色調はやや暗い緑色を呈する。焼成は須恵質である。東海産。102は越州窯産青磁碗である。体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。色調は緑色を帯びた青色を呈し、焼成は硬質である。以上、井戸340出土土器の時期はⅢ期古段階である。

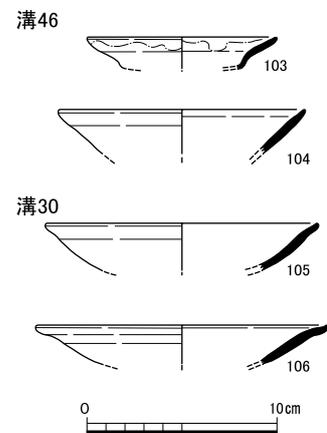


図33 溝30・46出土土器
実測図(1:4)

中世素掘り溝（図33） 103～106は中世の素掘り溝から出土した土師器皿である。103・104は溝46、105・106は溝30からの出土である。103は赤色系の土師器皿。104～106は白色系の土師器皿。105・106は胎土に砂粒を多く含む。103～106の時期はⅨ期である。

（2）その他の遺物

土器類のほかの遺物として硯、木製品、銭貨などがある。以下、種類ごとに述べる。

硯（図34、図版10） 硯は転用硯を含め4点が出土している。107は井戸340の井戸枠、108は溝153、109は溝116、110はピット342から出土した。

107は須恵器の円面硯、硯面の破片。外堤と脚部は欠損する。硯面は平坦で陸部と海部の境に弱い稜をつける。硯面はよく使い込まれている。

108は黒色土器Bの風字硯、陸部の破片。硯面は丁寧なヘラミガキが施される。脚部は、貼り付けの後に面取りを施し、断面形は8角形を呈する。

109は灰釉陶器の壺体部の転用硯。外面は貼り付けによる突帯を施し、灰釉が厚く施釉される。内面は2/3に墨が残り、墨の付着部分は使用により器面が滑らかになっている。

110は灰釉陶器の風字硯、陸部の破片。外堤は低く、下方に行くほど高さを減じていく。外面には灰釉が厚く施釉され、脚の剥離痕跡がわずかに残る。硯面には花文と思われる陰刻文が施される。平安京内では陰刻を施す灰釉陶器の風字硯の出土例はほとんどない。

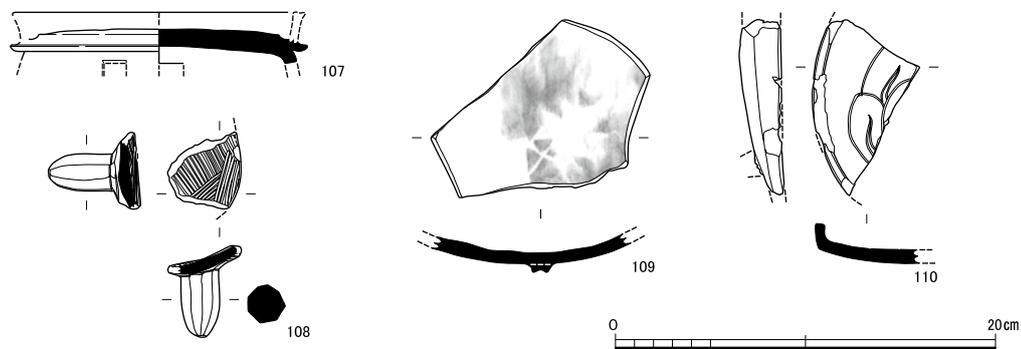


図34 硯実測図（1：4）

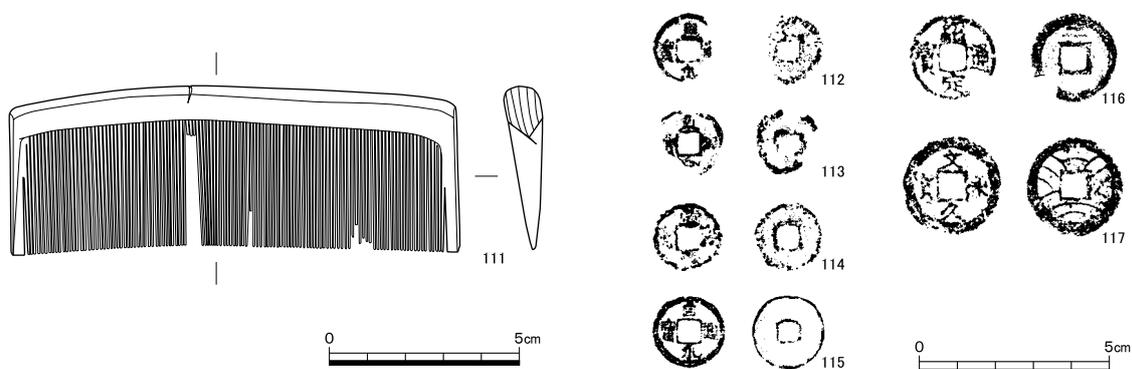


図35 井戸340出土櫛実測図（1：2）

図36 銭貨拓影（1：2）

櫛（図35、図版10） 111は横櫛。井戸340水溜からの出土。棟部は断面は半円形で、角は丸みが付き、下方は直線をなす。歯は密で132本あり、鋸で両側から挽き出す。材質はイスノキ。

銭貨（図36、図版10） 銅銭は3種6点ある。皇朝十二銭の貞観永寶、南宋銭の招定通寶、江戸時代の文久永寶がある。

112～115は貞観永寶。腐食が進み銭文は不明瞭なものが多い。115が最も遺存状態がよく、直径1.9cm、厚さ1.5mm、重さ1.6gを測る。初鑄は870年。柵6の柱穴234の柱痕跡から4枚が重なって出土した。

116は招定通寶。裏文字は「二」。直径2.4cm、厚さ0.8mm、重さ1.9gを測る。南宋銭、初鑄は870年。溝40からの出土。

117は文久永寶。直径2.6cm、厚さ0.8mm、重さ2.6gを測る。初鑄は1863年。攪乱からの出土である。

5. ま と め

調査地は平安京右京三条三坊三町にあたる。三町内の調査は今回で4回目となる。また、三条三坊域でみると10回以上の調査が行われている。ここでは古墳時代と平安時代の10世紀前半まで、10世紀後半以降の大きく3時期に分けて、これまでの周辺調査成果を併せて、歴史的な変遷を述べてみたい。なお、以下の本文中で述べる調査地を示す調査番号は、図6と表1に対応する。

(1) 古墳時代 (図37)

本調査で検出した古墳時代の遺構は、調査区南西部で検出された溝396のみである。溝の規模は、最大幅1.6m、深さ約0.7mを測る。断面形は逆台形を呈し、人為的に掘削された溝であることがわかる。埋土は黒褐色シルトなどで、底部に流水による堆積層がみられる。今回の調査地の南西側で2009年に実施された調査25では、溝396の南西方向への延長部で溝165が検出されている。2つの溝底のレベルは、約30m離れた地点で、溝396が31.5m、溝165が31.4mと、わずかではあるが溝165が低く水は緩やかに北東から南西へ流れていたことがわかる。調査25では、溝165に直交して南北方向の溝280(溝199・260・280は同じ溝)を検出している。

似たような規模・形状を持つ溝は、これ以外の周辺の調査でも検出しており、調査16では溝9、調査26では溝219・²⁹⁾89、調査22ではSD48、調査18でも調査区の中央部で北東から南西方向の溝を検出している³⁰⁾。堆積状況から多くの溝に水が流れた痕跡が窺える。溝の方向は、概ね南北方向のものと北東から南西方向のものがある。これらの溝からは庄内式期・布留式期の土師器、ON46型式からTK47型式の須恵器が出土する。土器は時期ごとに層序的に出土するのではないことから、溝の下限時期は古墳時代中期とみてよい。

このように調査地周辺には、面的な広がりを持つ古墳時代中期を下限とする溝が存在することがわかる。しかし、その性格については、これに伴う遺構の検出がなく、にわかには決定し難い。可能性として考えられるものに集落内外の区画溝や、耕作地の用排水の溝がある。今回の調査地から北東へ約300mに位置する調査21では、古墳時代中期の竪穴建物が検出されており、この周辺に居住域が存在したと思われる。調査21は今回の調査地よりも標高が約2m高い位置にある。この比較的高所に居住域を想定した場合、調査地周辺の古墳時代中期の溝は、集落の内外を区画するものでなく、地形的にやや低い位置に存在した耕作地の用排水の溝である可能性が高くなる。ただし、決定付けるには根拠が未だ乏しく、結論は保留したい。いずれにしても調査地を含めた天神川の扇状地上に、古墳時代中期の集落あるいは生産地が存在したことは間違いがなく、今後も意識的な調査を行っていく必要がある。

(2) 平安時代 (図38・39)

右京三条三坊三町の遺構の変遷と宅地規模 (図38、表4)

今回の調査で検出した平安時代の遺構・遺物は、9世紀中頃から10世紀前半のものに限られた。

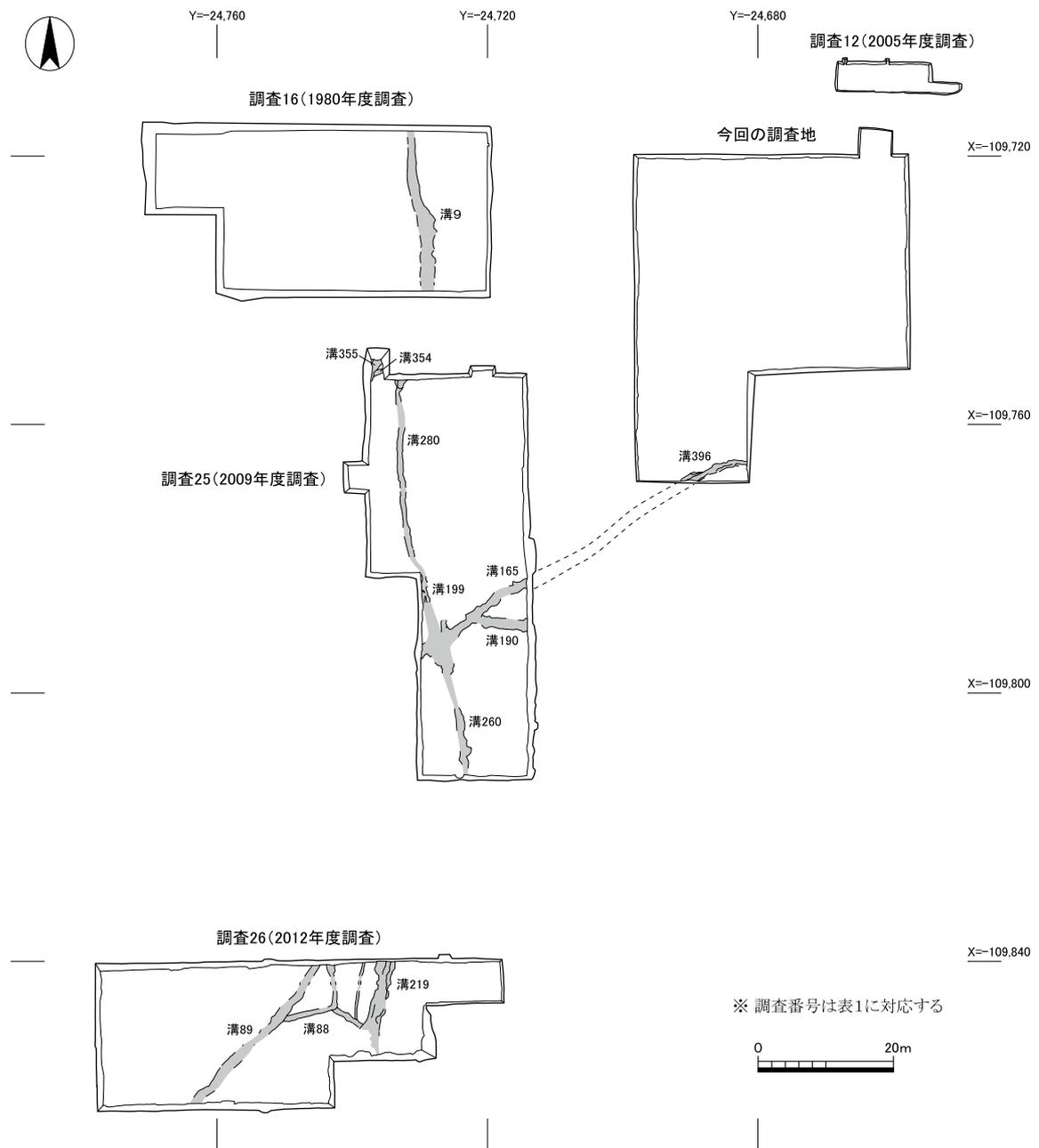


図37 遺構配置図 古墳時代 (1 : 1,000)

最も古い遺構は、土器埋納遺構である土坑158と窪地を整地した落込み41で、9世紀中頃(Ⅱ期中段階)のものである。土坑158は祭祀に伴うものの可能性があり、平安時代の土地利用の開始期の遺構として祭祀と整地に伴うものが検出されたのは、その関連性が注目される。

9世紀後半から10世紀前半(Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階)は最も遺構数が多く、平安時代の遺構のほとんどがこの時期に該当する。北三門と四門の境界ラインでは、宅地分割の遺構として柵8や溝90・116・153を検出した。宅地規模は、柵7が東一行と二行の境界ラインにまたがって位置することから、少なくとも六戸主以上の宅地であったことがわかる。調査区北東部で検出した建物1～3は、柱穴からの出土遺物に時期差がなく、比較的短期間に建て替えられた建物と思われる。建物規模が1間×3間あるいは1間×4間と小規模であり、宅地の主屋となる建物にはならない。建

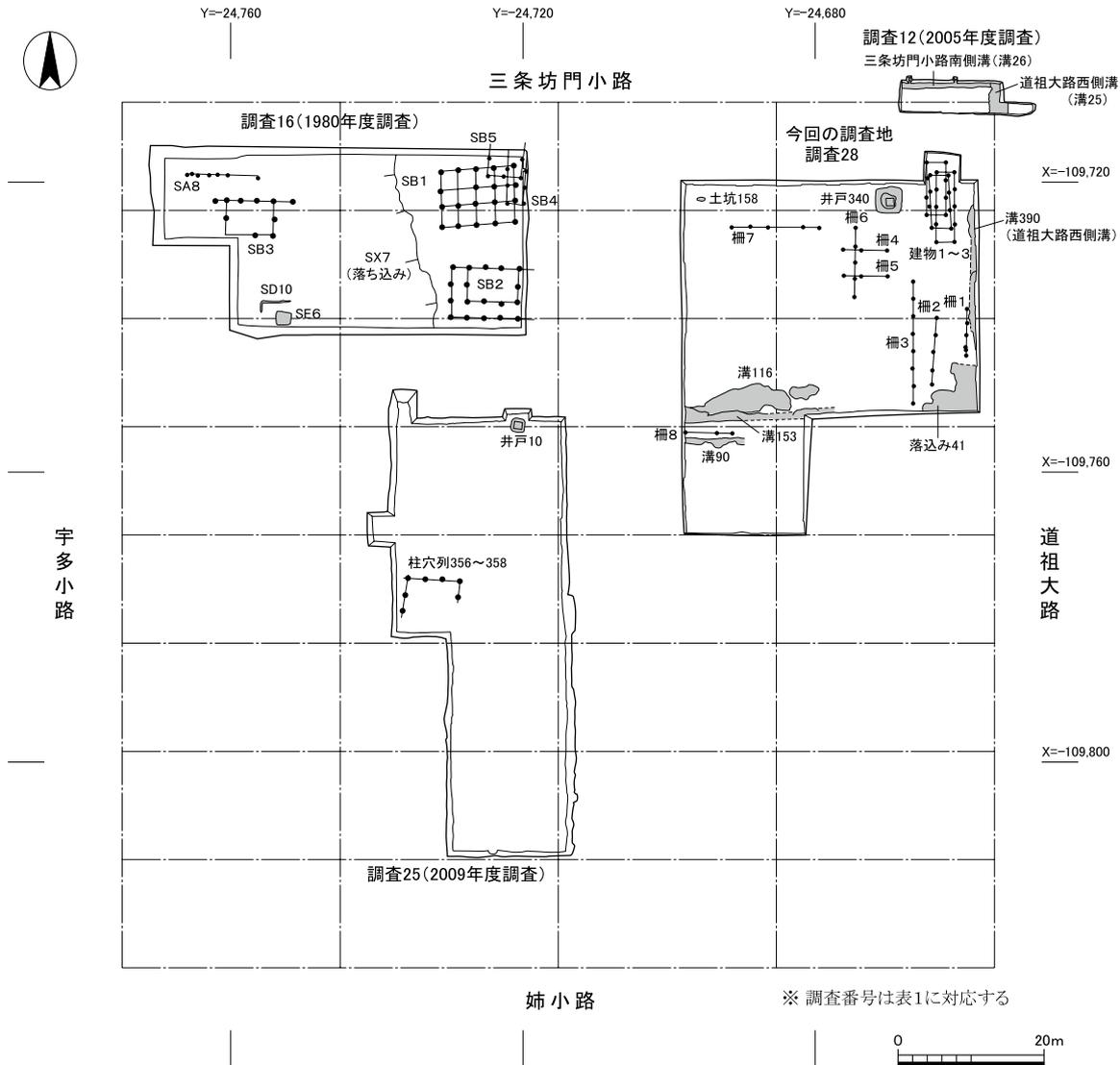


図38 右京三条三坊三町遺構配置図 平安時代 (1:1,000)

物に近接して井戸340があることから、炊事などに関連する雑舎の可能性はある。

三町内でこれまでに行われた2回の調査(調査16・25)と今回調査の主要な遺構を時期ごとに整理する。

三町の西半部と東半部で遺構の時期が分かれる。主要遺構は、三町西半部で行われた調査16・25では9世紀中頃であり、三町東半部で行った今回の調査地では土坑158など9世紀中頃の遺構が若干存在するものの9世紀後半から10世紀前半が主となる。このように三町西半部と東半部とでは遺構の多くが共存しない。以下にそれぞれの宅地規模について述べる。

9世紀中頃の三町西半部の宅地には、SB1～5のいずれかの建物が複数共存し、宅地規模としては、調査25の井戸10が北三門と四門の境界上に位置していることから、これよりも南側まで宅地が広がることがわかり、少なくとも1/4町規模の宅地であったことがわかる。

9世紀後半になると、遺構は東半部に集中する。先にも述べたように、宅地境界の遺構として柵8などが存在すること、三町西半部には遺構が存在しないことから、今回調査が行われた三町北東

表4 右京三条三坊三町主要遺構一覧表

時 期	調査16	調査25	今回調査（調査28）
9世紀中頃	SB 1～5、SE 6、SX 7	井戸10	土坑158、落込み41
9世紀後半 ～10世紀前半	—	—	建物 1～3、柵 1～8、井戸340、 溝90・116・153

部の宅地規模は六戸主分と想定される。建物1～3が雑舎とすると、主屋がどこに存在したのかが問題となる。柵6や柵7は、その南西側は遺構面が攪乱により大きく失われているため、本来が柵であったのか建物の一部であったのか不明である。しかし、地形的にも比較的高所にあり（図7）、六戸主分の宅地を想定した時に、柵6・7はほぼ中央に位置することから、本来はこれらが宅地の主屋を構成する一部であった可能性が高い。

なお、井戸340の水溜内埋土の種実・花粉分析を行った結果、栽培種あるいは栽培の可能性のある植物として、モモ、サンショウ、アサ、マメ、ウリ、トウガン、ナス、オオムギ、コムギなどの種実と、カキノキ、ソバ、ベニバナなどの花粉が検出された。10世紀の平安京内で宅地と共に耕作地が存在したことを示すものとして注目される。また、溝116の第1層は宅地廃絶直後に堆積した土と考えられるが、ここでは栽培種は検出されておらず、耕作地としての土地利用も途絶えることがわかる。

柵8の南側ではピット130・142・151・400などの土器などの埋納遺構を集中して検出している。調査区の南西部でも9世紀後半から10世紀前半の宅地利用が存在したことがわかる。都城における埋納遺構は藤原・平城・長岡京など平安京以前の都城でも例はあるが、量的に増加するのは、9世紀中頃以降の平安京においてであり、検出事例は100例を超える³¹⁾。今回の事例は宅地境界付近に集中しており、今後、埋納遺構が宅地のどのような位置に存在するかを含めて検討を行う必要がある。

右京三条三坊の宅地規模と変遷（図39、表5）

次に、右京三条三坊域でこれまでに行われた調査成果と併せて遺構の変遷とそれぞれの宅地規模を見てみたい。

三町では、先述したように西半部には9世紀中頃の1/4町規模程度の宅地、東半部は9世紀後半から10世紀前半の六戸主程度の宅地が存在した。

四町では調査17・26が行われている。調査17では9世紀前半（I期新段階～II期古段階）の道祖大路東築地内溝とそれに架けられた橋の基礎部を検出している。調査26では同じ9世紀前半のコの字形に配置される大型建物を3棟検出している。このうち主殿と目される建物は、身舎が東西7間（柱間10尺）、南北2間（柱間10尺）で南庇（庇の出14尺）が付く。調査17の大路内溝に架かる橋の存在は、宅地の門が大路に対して開いていたことを示しており、居住者の位階が三位以上であったことを示す³²⁾。また、平安京内でも最大級の建物の存在はそれを裏付け、宅地規模は1町規模であったことがわかる。

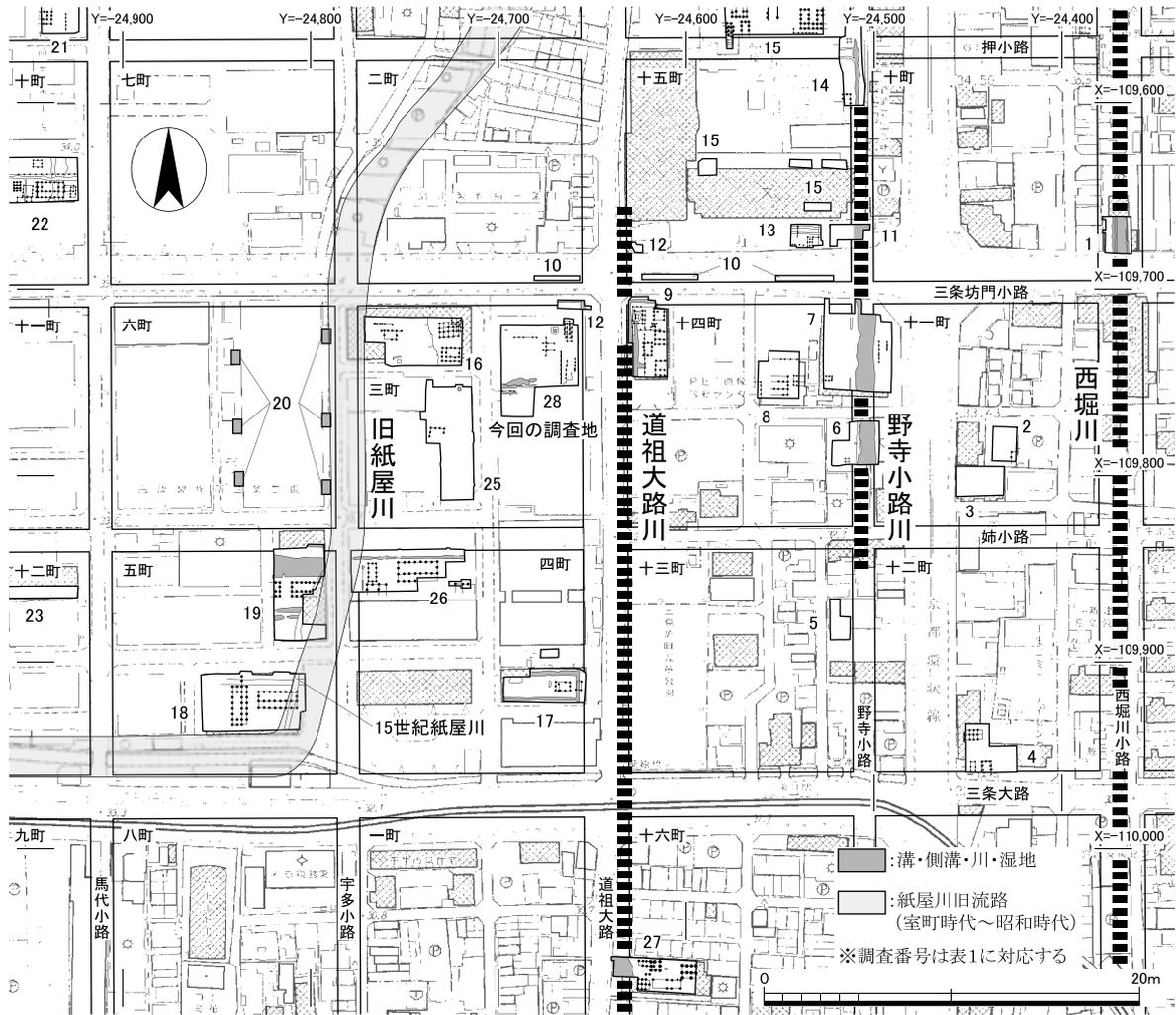


図39 調査地周辺遺構配置図 (1 : 4,000)

五町では調査18・19が行われている。五町南西部で行われた調査18では、9世紀前半（I期中～新段階）2棟の大型建物を検出している。このうち主殿と思われる建物は、身舎が東西7間（柱間10尺）、南北2間（柱間10尺）で南庇（庇の出12尺）が付く。この北側の調査19では、9世紀前半（I期中～新段階）の東西に並ぶ建物を2棟検出している。以上の建物は、時期が同じであることと建物の配置に企画性があることから、一つの宅地に存在したものであり、建物規模や配置関係から宅地規模は1町規模を有したと考えられる。

十町では調査22が行われている。ここでは中小規模の建物が溝と柵によって区画されており、1/4町規模の宅地が考えられる。時期は9世紀前半（I期中段階～II期古段階）である。

以上のように、右京三条三坊域では、9世紀前半は1町規模の邸宅2例を含め宅地として活発な土地利用がみられる。しかし、9世紀中頃以降、三町を除いて途絶えてしまう。左京に比べ早く衰退する右京ではあるが、右京全体で見れば、10世紀までは宅地としての土地利用が存続するし、1町規模の邸宅も三条二坊十五町の齋宮邸などのように9世紀後半までは確実に存在しており、三条三坊域は右京全体から見て早く衰退する地域といえる。

このように見たときに注目されるのが溝116である。溝116は宅地境界に位置する排水に伴う遺

表5 右京三条三坊宅地規模一覧表

町	9世紀前半	9世紀中頃	9世紀後半	10世紀前半	遺構面標高(調査区中央)
三町	—	1/4町規模宅地	6戸主宅地	6戸主宅地	調査12:32.3m 調査16:31.5m 調査25:31.6m
四町	1町規模邸宅	—	—	—	調査17:30.8m 調査26:31.0m
五町	1町規模邸宅	—	—	—	調査18:30.2m 調査19:31.0m
六町	湿地	湿地	湿地	湿地	調査20:32.0m
十町	1/4町規模宅地	—	—	—	調査22:32.4m
十二町	湿地	湿地	湿地	湿地	調査24:30.2m

構である。当初は溝として、後に調整池的な遺構に変化している。機能段階では乾燥と滞水を繰り返しながら浚渫も行われて使用され、最終的には周辺水位の上昇に伴って埋没したことが層相観察と花粉分析の結果から確認された。溝116は宅地内の排水溝としては幅2～3mと規模が大きい。これまで実施されている右京三条三坊域での調査でも、宅地内の排水溝が大規模である事例が多い。調査17のSD12（幅3m）、調査19のSD19（幅12m）などがあり、また調査20では遺構が検出されず湿地状堆積のみが確認されている。これらの存在は、三条三坊域が雨水の影響を受けやすい立地に位置することを反映しているものと思われる。遺構面の標高は、今回の調査地の南西側の四・五・六町では1m余り低くなっている。地形的に雨水の影響を受けやすいことから、比較的早い時期に宅地としての利用されなくなった可能性がある。

(3) 10世紀中頃以降 (図40・41)

10世紀以降の右京と人工河川

調査地は、10世紀前半に宅地としての土地利用が終焉することを確認したが、同時期に道祖大路東側溝である溝390も埋没する。この東側溝は調査12でも検出している。しかし、これまでの調査によって道祖大路の持つ排水機能はこの頃に高められていることが判明している。調査9や調査27では、10世紀以降に路面の大部分が人工河川に変化していることが確認されている。川幅は、調査27によって9m以上であったことがわかっているが、調査12ではこの川を検出していないことから、路面幅いっぱいではなかったようである。調査9によって川は10世紀前半には存在したことが明らかになっており、時期的には微妙であるが、大路東半部に掘削された人工河川と路面と西側溝は一時期併存していた可能性が考えられる。

右京二坊・三坊ではこれまでの調査で、道祖大路を合わせて5条の人工河川が確認されている。ここでは、それぞれの河川名称を道路名を付して呼称する。西から順に西大宮川、西堀川、野寺小路川、道祖大路川、それから昭和19年(1944)の付け替え工事まで調査地の西側を流れていた旧紙屋川である。これまでの調査によってそれぞれの存続期間が概ね判明しており、一覧表にして記す(表6)。

表6 右京二坊・三坊検出河川一覧表

名称	川幅	深さ	時期	調査地点	備考
西堀川	6 m	1.0 m	794年から10世紀後半	調査1	
道祖大路川	9 m以上	1.8 m	10世紀から12世紀	調査9・27、 二条三坊一町(註34)、 六条二坊十五町(註35)	
西大宮川	5 m以上	1.0 m	13世紀後半 (掘削時期不明)	二条二坊二町(註36)	
野寺小路川	10 m	1.8 m	11世紀後半から14世紀	調査6・7・11・14	
旧紙屋川	3 m	1.0 m	15世紀以前から1944年	調査18・19	15世紀以降天井川化

右京の基幹水路である西堀川は10世紀後半に埋没するが、これと相前後して道祖大路川が掘削される。同様に、道祖大路川は12世紀に埋没するが、これも相前後して野寺小路川が掘削される。旧紙屋川の掘削時期は不明であるが、調査18で川底から15世紀代の土師器が出土しており³³⁾、それ以前に掘削されたことがわかる。おそらく野寺小路川が埋没する前後に掘削されたと考えられる。また、西大宮川は1箇所を確認されたのみで詳細は不明であるが、13世紀後半に埋没している。以上のように、右京域では西堀川の埋没後も新たに人工河川を掘削して基幹水路は維持され続けている。また、それぞれの河川は、一時期重複して存在して、河川内に土砂が堆積して排水機能が劣化してくると新たに河川を掘削している可能性がある。実際、道祖大路川は大きく上下2層の砂礫が堆積するが、上層は12世紀で下層が10世紀であり、野寺小路川も同様に上下2層に分かれる堆積は、下層が12世紀で上層が14世紀と併存する時期がある。

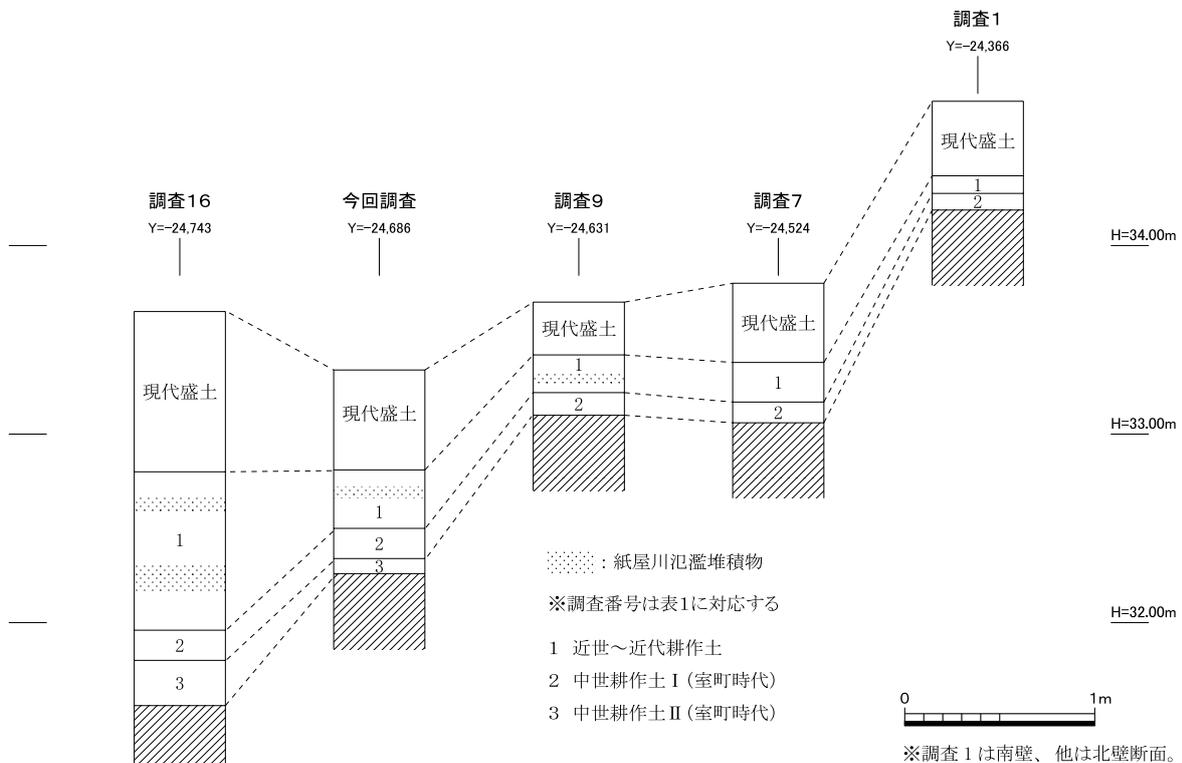
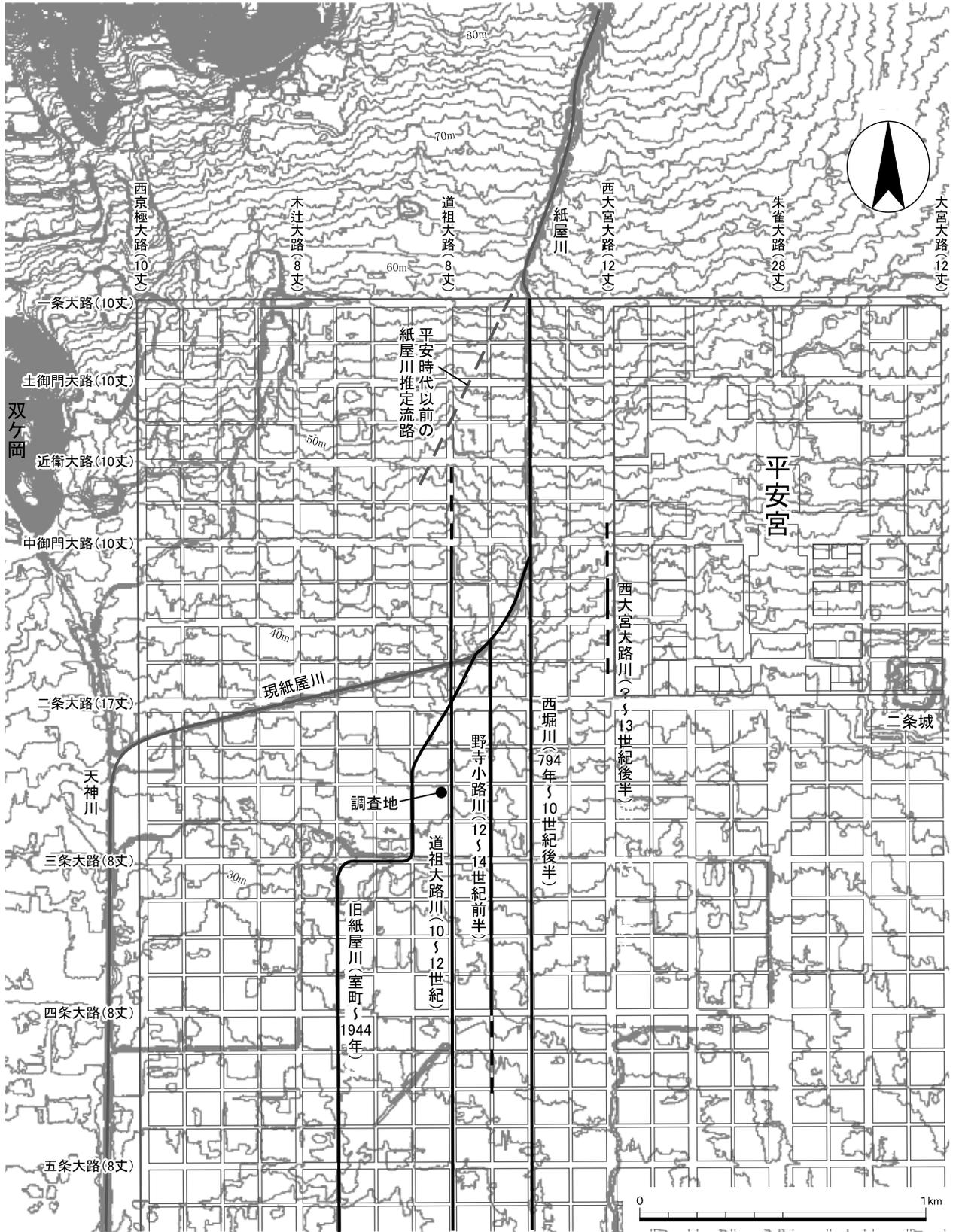


図40 右京三条二坊十町から三坊三町柱状断面図 (1 : 40)



※等高線は現況地形、河角龍典氏の提供による。

図41 右京河川変遷図 (1 : 20,000)

図40は各河川を検出した調査地点の断面柱状図である。地山面は東から西へ順に低くなっていることがわかる。平安京造営当初に掘削された西堀川は、調査1で検出しており、右京域の中でも地形的に高い位置にあることがわかる。図41の地形図を見ると西堀川は、鷹ヶ峰を源流とする紙屋川を京内に引き込んだもので、平安京造営以前の紙屋川は、一条大路から南流することなく北東から南西方向右京域を横断しながら流れていたとみられる。西堀川の河道は、平安京の条坊に沿って設定されたものであり地形に即したものではない。西堀川の埋没前後に掘削されるのは道祖大路川である。先にも述べたように、道祖大路は排水路としての河川と道路がある時期併存していたと考えられ、道路としての機能を残しながら河川を掘削するのに大路の規模が必要であったためと思われる。次に掘削されるのが野寺小路川で、道祖大路川東側の地形の高低差がない場所に位置している。調査6（図39）で確認している当初の野寺小路川の川幅は2m程度であり、道祖大路川の補助的な役割を担うものであったと考えられる。これらの人工河川が埋没した後、地形的に低い場所に旧紙屋川が掘削される。これ以降、昭和になって現在の紙屋川が掘削されるまで河道は固定され、旧紙屋川は天井川化していく。中世以降、今回の調査地周辺の堆積土が厚くなっていくのは、この旧紙屋川の氾濫時に土砂が供給されることによる。

調査地の宅地としての土地利用は10世紀前半に終焉する。これは右京全体をみても同じである。しかし、これ以降の右京が無人の荒野になったのではないことは、これまで述べたように、繰り返し行われる人工河川の掘削と雨水の管理からもわかる。人工河川は基本的には道路部分に位置している。道路で囲まれるそれぞれの「町」では、宅地としての土地利用が途絶えて以降も、土地に対する所有関係は存在し、これを侵すことが憚られたため、公共の土地である道路に河川の掘削が行われたものと考えられる。

10世紀後半以降の右京は一般には多くの土地が耕作地と化したといわれる。人がほとんど住まなくなった右京に人工河川が維持され続けるのも耕作地としての土地利用が存在したことによる可能性が高い。史料上は、右京域に存在した小泉荘は11世紀後半の文書に見えるが、これ以前の耕作地としての在り方は不明である。³⁷⁾ 今後も継続的な調査が望まれる。

註

- 1) a 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年
b 石田志郎「京都盆地北部の扇状地 - 平安遷都時の京都の地勢 -」『古代文化』34巻12号 1982年
- 2) 小澤嘉三『西院の歴史』西院の歴史編集委員会 1983年
また、昭和13年(1938)の『京都市都市計画図 京都市都市計画街路並と地区区画整理図』には、付け替え前の紙屋川と付け替え計画線が描かれている。
- 3) 『京都市遺跡地図台帳 第8版』京都市民文化局 2009年
- 4) 「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 5) 『平安京右京三条二坊十一町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-24』財団法人京都市

埋蔵文化財研究所 2007年

- 6) 「平安京右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1979年
「平安京右京三条二坊十二町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 7) 『平安京右京三条二坊十三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004 - 19』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 8) 『平安京右京三条二坊十四町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006 - 1』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 9) 「平安京右京三条二坊2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 10) 「平安京右京三条二坊十四町跡 島津メディカルプラザ新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内5遺跡 平安京跡研究調査報告第23輯』 財団法人古代学協会 2009年
- 11) 「平安京右京三条二坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 12) 『平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001 - 6』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 13) 『平安京右京三条二坊十五町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003 - 8』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 14) 『平安京右京三条二坊十五町跡・三坊二町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005 - 5』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 15) 「平安京右京三条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 16) a 「右京三条二坊(2)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
b 『平安京右京三条二坊十五・十六町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 17) 註16 - bに同じ。
- 18) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990年
- 19) 「平安京右京三条三坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 20) 『平安京右京三条三坊六町・西ノ京遺跡』 株式会社日開調査設計コンサルタント 2007年
- 21) 「平安京右京三条三坊九町跡 島津本社内新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内5遺跡 平安京跡研究調査報告第23輯』 財団法人古代学協会 2009年
- 22) 「HR - 145」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
- 23) 『平安京右京三条三坊三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009 - 4』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 24) 『平安京右京三条三坊四町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012 - 4』 財団法人京都市埋

蔵文化財研究所 2012年

- 25) 「平安京右京四条二坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 26) 遺物の編年と年代観については以下の文献に拠った。
- a 小森俊寛「平安京の土器・陶磁器の概要」『平安京提要』 角川書店 1994年
 - b 小森俊寛「土師器・黒色土器・瓦器」『平安京提要』 角川書店 1994年
 - c 上村憲章「須恵器」『平安京提要』 角川書店 1994年
 - d 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』 角川書店 1994年
 - e 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃		840頃		930頃		1010頃		1080~90頃		1180頃		1270頃		1360頃		1440頃		1500頃		1580~90頃		1660頃		1740年代頃		1820年代頃			
I		II		III		IV		V		VI		VII		VIII		IX		X		XI		XII		XIII		XIV			
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 27) 註16 - bに同じ。
- 28) 『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ - 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅢ -』 兵庫県教育委員会 1995年
- 29) 溝88は註24の報告では方形周溝墓の可能性を指摘している。
- 30) 古墳時代の溝に関しては未報告ではあるが、調査を担当した平尾政幸氏からご教示を得た。註19の図版15に検出状況の古墳時代の溝をみることができる。
- 31) 上村和直「都城における埋納遺構 - 鎮祭遺構を中心として -」『瓦衣千年』1999年
- 32) 『延喜式』卷四十二 左右京職
- 33) 調査担当者の平尾政幸氏の御教示による。
- 34) 「平安宮左馬寮 - 朝堂院跡・平安京右京」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 35) 「平安京六条二坊2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 36) 「右京二条二坊 (HR81)」『平安京跡発掘調査概報 昭和57年度』 京都市文化観光局 1983年
- 37) 『大徳寺文書』卷六、永保二年 (1082) 正月廿日条 「如意輪庵山城国西院小泉庄文書」 (『大日本古文書』2126)

6. 付章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、平安京右京三条三坊三町跡における平安時代前半（10世紀初頭頃）の古環境に関する情報を得ることを目的として、花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。また、本報告では京都市埋蔵文化財研究所の竜子正彦氏の分析による大型植物遺体分析結果・樹種同定結果も含め、複合的に検討する。

1 調査地点

平安時代の遺構の基盤をなす堆積物は、側方への層相変化が著しい扇状地性の堆積物からなり、調査区北東から南西方向に傾斜する地形勾配を形成している。分析調査は、平安時代前半（10世紀初頭）の溝116と、井戸340の水溜内堆積物について実施する。各調査地点の断面写真、模式柱状図、分析試料写真等を図42に示す。以下に遺構別に堆積層の層相について記載する。

(1) 溝116

溝116は調査区南西部の低所側の斜面に構築されている溝で、より低所に構築されている溝153につながることから、宅地周囲の排水施設として機能していたことが推定されている。溝116の堆積状況は斜面上部側の末端部で堆積断面が作成されている。この断面の堆積物は1～6層に区分されている。

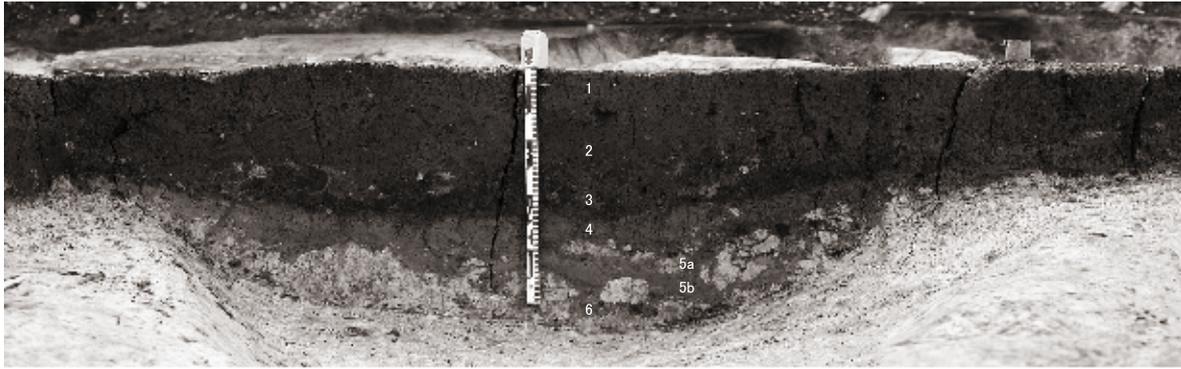
1層は、暗灰色を呈するやや腐植を含む、細礫・砂混じり砂質泥からなる。上位層準から連続する根成孔隙が分布し、上部層準ほど生物擾乱が顕著である。また、1cm程度の炭片も混じる。下位の2層との層界は不明瞭である（図24 C-C'断面第1層）。

2層は、灰色を呈する泥からなる。最上部には土器片・礫が水平方向に断続的に分布する。下部は下位層の偽礫間の隙間を充填している（図24 C-C'断面第2層）。

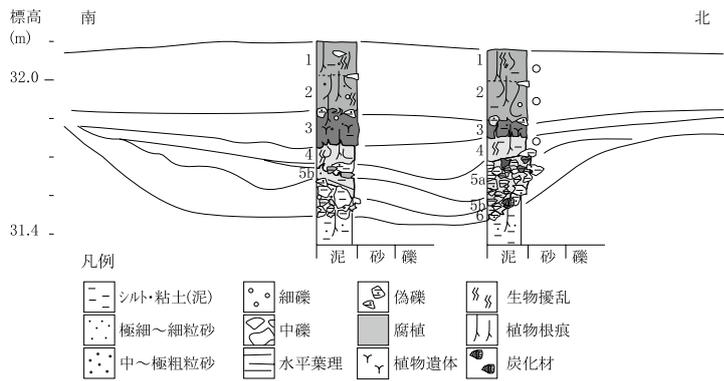
3層は、下部が暗褐色を呈する分解が進行した植物遺体の集積層からなる。上部は土器片が比較的多く混じる、ブロック状を呈する3cm以下の垂角の偽礫からなる。偽礫の母材は黄白色砂質泥、灰色泥、暗灰色泥、有機質泥など多様であることから、人為的営力により形成された堆積物と判断される。また、この偽礫層準の形成時、および後述する地震動による変形によって下部の植物遺体集積層は著しく変形している（図24 C-C'断面第4層）。

4層は、5層上部の偽礫層を最掘削して形成された凹地を充填する堆積物で、暗灰～灰色を呈する砂混じり泥からなる。上部層準ほど生物擾乱が顕著である。人為的営力により投入されたとみられる中礫や、灰色泥の偽礫がわずかに混じる（図24 C-C'断面第5層）。

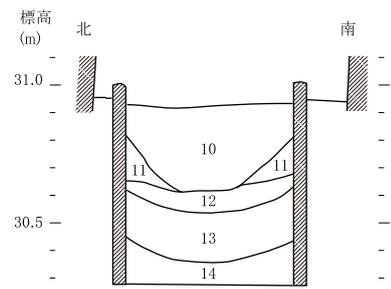
5層は、下部が灰白色泥の薄層を挟在する、水平葉理が確認される灰色泥からなる。上部は1～10cm程度の基盤堆積物由来の黄白色を呈する砂質泥ないし泥の偽礫を主体とする人為的営力に形



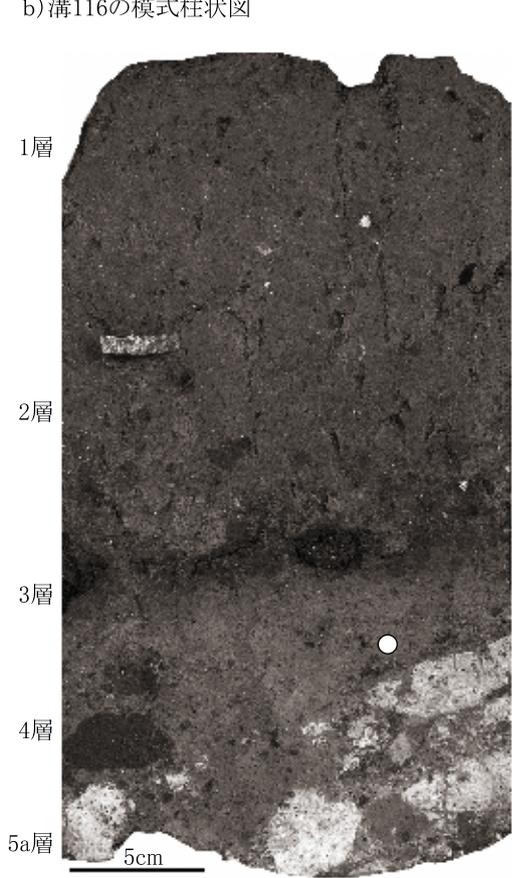
a) 溝116断面写真



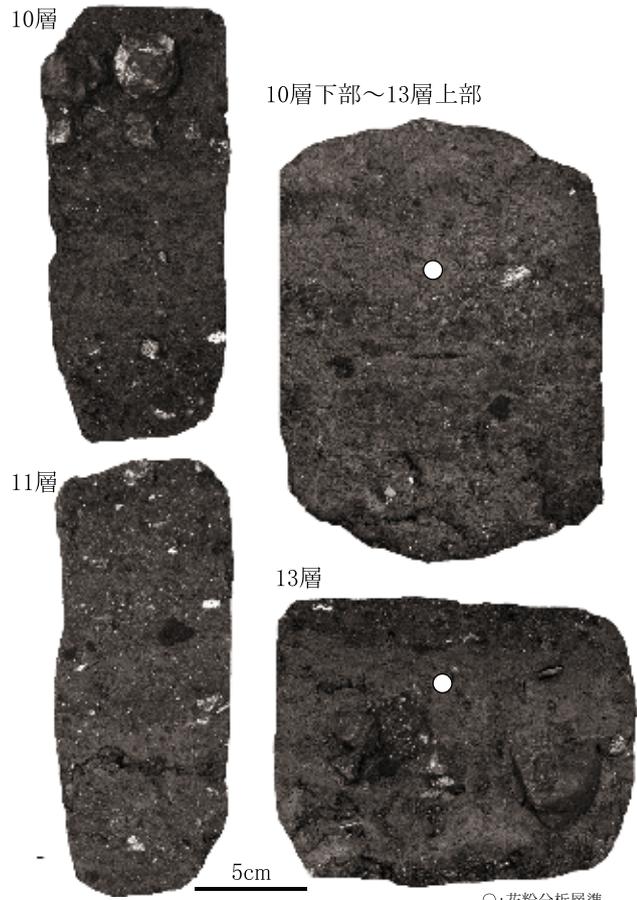
b) 溝116の模式柱状図



c) 井戸340水溜の断面図



d) 溝116の採取試料写真



d) 井戸340の採取試料写真

○: 花粉分析層準

図42 調査地点の模式断面図および試料写真

成された偽礫堆積物からなる。北側から南側にかけて、偽礫の大きさおよび層厚が減ることから、溝北側から投入された堆積物と判断される（図24 C-C'断面第6層）。

6層は、基盤堆積物由来の黄白色を呈する砂質泥ないし泥の偽礫を主体とする堆積物からなる。偽礫の大きさは10cm以下の垂角でブロック状をなすものが目立つ。これら偽礫の多くは溝116掘削時に生じたものと判断されるが、基盤堆積物由来の大きな偽礫間には3cm以下の灰色泥ないし暗灰色砂質泥の偽礫や微小ブロックが混じる。これらは、溝掘削後に溝内に堆積した灰色泥・暗灰色泥に由来する可能性が高く、溝の浚渫が示唆される（図24 C-C'断面第7層）。

以上の層相から、溝116の6層が構築期から機能期、5～3層が機能期、2～1層が放置期の堆積物と推定される。機能期には浚渫が行われており、異なる2種の偽礫やブロックの堆積は、溝の浚渫などの人為的な行動が示唆され、排水溝としての機能が維持されている状況が確認される。3層下部形成期には埋没の進行に伴い有機物の分解が進行する乾湿を繰り返す場所へと変化したことが推定される。その後、2・1層形成期は地下水位が上昇し、泥が堆積するようになる。2・1層は遺構周辺にも連続して堆積しており、調査区一帯の水文条件が大きく変化したことが推定される。

また、溝116を充填する堆積物は、上限は明確ではないが、2層以降の水位上昇期に発生した地震動により著しく変形している。下位の6層中の偽礫の多くは地震動に伴い回転し破壊されており、5層は遺構の斜面を剪断応力により回転移動しているように見える。また、4～2層にかけては上位層準への水抜けに伴い、含水塑性変形している状況が確認される。

（2）井戸340

井戸340は、10世紀初頭に人為的に埋め戻されているが、井戸下部の水溜施設内には腐植に富む堆積物が確認されている。水溜内の堆積物は、発掘調査時に10～14層に区分されている（図42c）が、調査時の湧水によって仔細な層相観察が不可能であったため、ここでは各層から採取した不攪乱柱状試料の層相について記載する（図42d）。写真右側の10層下部から13層上部と13層試料は埋土中央部、左側の10・11層の試料は、水溜壁側より採取されている。試料の層相をみると、10～12層は灰色泥と、1cm以下の有機質砂質泥・灰色泥の偽礫・微小ブロック（フラグメント）からなる堆積物の積層からなることが確認される。水溜壁近くでは中央部に比較して、相対的に堆積物や偽礫の粒径が粗く、偽礫の分布密度も高くなる。13層は4cm程度の礫や、木材片が混じる泥からなる。14層は井戸の基底をなす砂層にあたる。10世紀初頭の遺物が出土する。

以上の層相から、13層から10層堆積物は、周囲からの崩落や流れ込みの堆積物を挟在する滞水域で形成された堆積物と推定される。したがって、水溜内の堆積物は、井戸廃絶後、人為的に埋め戻されるまでの間の放置期に形成された堆積物と推定される。また、これらの堆積物も著しく含水塑性変形している。

2 試料

溝116では、土坑埋没後の1・2層形成期の植生環境を把握するために植物珪酸体、溝116機能

期の植生環境を把握するために4層について植物珪酸体分析・花粉分析を実施する。

井戸340では、全層準について大型植物遺体分析、下部の12層、13層について花粉分析を実施する。また、井戸構築材について樹種同定を実施する。

3 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の散布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量について層位的変化を図示する。

(3) 大型植物遺体分析

試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで拾い出す。大型植物遺体の同定は現生標本、石川（1994）、中山ほか（2000）などを参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。

(4) 樹種同定

各試料より、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作製し、生

物顕微鏡を用いて、木材組織の種類や配列を観察し、種類同定を行う。

4 結果

(1) 花粉分析

結果を表7、図43に示す。溝116の4層は、花粉化石が豊富に産出するものの、保存状態はやや悪く、花粉外膜が破損あるいは溶解しているものが多く認められる。群集組成は木本花粉とシダ類胞子の割合が高く、木本花粉ではツガ属、マツ属が多産し、マキ属、モミ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ソバ属、ナデシコ科、アリノトウグサ属、ベニバナ属、キク亜科等を伴う。

井戸340の2試料は、溝116の試料と比較すると保存状態は良好である。12層についてみると、木本花粉ではマツ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、スギ属、アカガシ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科等を伴う。多産するイネ科花粉中には、栽培種のイネ属に似た個体も、わずかではあるが含まれている。また、水湿地生植物のイボクサ属、ミズアオイ属や、栽培種のソバ属、栽培の可能性があるベニバナ属も検出される。なお、花粉や胞子以外にも、回虫卵、鞭虫卵などの寄生虫卵も確認された。

13層をみると、木本花粉ではスギ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、アカガシ亜属等を伴う。その他ではイチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、ヤマモモ属、クマシデ属ーアサダ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等が認められる。草本花粉ではイネ科が最も多く、次いでミズアオイ属が多く認められる。その他ではイボクサ属、アカザ科、ナデシコ科、キク亜科等を伴う。栽培種あるいは栽培の可能性がある種類ではカキノキ属、ソバ属、ベニバナ属などが挙げられる。また、回虫卵も検出された。

(2) 植物珪酸体

結果を表8、図44に示す。溝116試料からは植物珪酸体が産出するものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量は4層で多く、約1.5万個/gである。2層と1層は4層よりもやや少なく、いずれも約1.2万個/gである。

各層からは栽培植物であるイネ属が産出し、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は概して少なく、短細胞珪酸体が100個/g前後、機動細胞珪酸体が100～200個/g程度である。また各層から粉（穎）に形成される穎珪酸体も検出される。各層での植物珪酸体の産状は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。

(3) 大型植物遺体同定

結果を表9に示す。井戸340の水溜内埋土10～13層から産出した大型植物遺体は、木本がオニグルミ、クワ科、ヒサカキ、モモ、アカメガシワ、サンショウ、センダン、クサギの8種類（分類

表7 花粉分析結果

種類	溝116		井戸340	
	4層	12層	12層	13層
木本花粉				
マキ属	5	1		1
モミ属	25	21		19
ツガ属	82	27		39
トウヒ属	-	-		1
マツ属単維管束亜属	-	1		-
マツ属複維管束亜属	44	30		11
マツ属(不明)	43	50		23
スギ属	3	45		60
イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	-	2		6
ヤマモモ属	1	3		5
サワグルミ属	-	2		-
クルミ属	2	-		-
クマシダ属-アサダ属	2	2		5
カバノキ属	1	5		2
ハンノキ属	-	-		1
ブナ属	1	2		6
コナラ属コナラ亜属	1	4		8
コナラ属アカガシ亜属	8	25		19
ニレ属-ケヤキ属	1	2		4
エノキ属-ムクノキ属	-	3		-
ジャケツイバラ属	-	1		-
センダン属	2	-		-
アカメガシワ属	-	-		1
ツゲ属	-	2		1
モチノキ属	1	-		-
カエデ属	1	-		-
トチノキ属	-	2		-
ブドウ属	1	-		-
ウコギ科	1	-		-
ツツジ科	2	-		-
クチナシ属	2	-		-
カキノキ属	-	-		1
エゴノキ属	2	1		-
スイカズラ属	2	-		-
草本花粉				
イネ科	89	219		113
カヤツリグサ科	4	16		3
イボクサ属	-	1		6
ミズアオイ属	-	2		28
クワ科	-	1		1
ギンギン属	-	4		2
イブキトラノオ節	1	-		-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	7	5		1
ソバ属	9	6		1
アカザ科	1	16		9
スベリヒユ属	-	-		1
ナデシコ科	8	11		4
カラマツソウ属	-	1		1
アブラナ科	-	13		3
アリノトウグサ属	6	3		2
セリ科	-	3		2
シソ科	-	1		-
オオバコ属	-	1		-
ヨモギ属	3	20		3
ペニバナ属	13	4		3
キク亜科	11	10		4
タンポポ亜科	3	5		1
不明花粉				
不明花粉	9	17		15
シダ類孢子				
ヒカゲノカズラ属	4	1		-
ゼンマイ属	2	3		-
イノモトソウ属	2	-		-
他のシダ類孢子	168	165		42
合計				
木本花粉	233	231		213
草本花粉	155	342		188
不明花粉	9	17		15
シダ類孢子	176	169		42
合計(不明を除く)	564	742		443
その他				
回虫卵	-	4		1
鞭虫卵	-	4		-

木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。○は1%未満を示す。

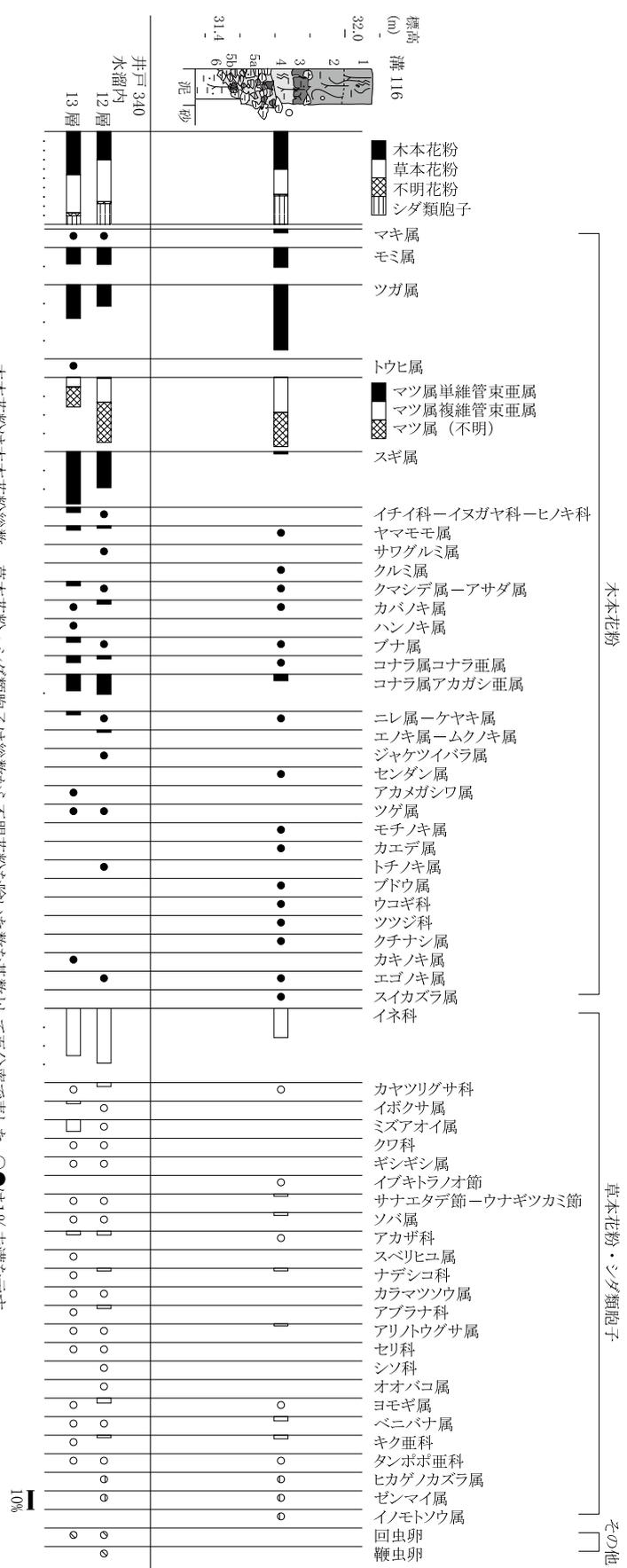


図43 花粉化石群集

表8 溝116の植物珪酸体含量

分類群	層位		
	1層	2層	4層
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	100	<100	-
メダケ属ネザサ節	800	1,000	1,200
タケ亜科	3,000	3,700	3,700
ヨシ属	100	200	100
ウシクサ族ススキ属	100	100	200
イチゴツナギ亜科	200	<100	100
不明	1,900	1,700	1,800
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	100	200	100
メダケ属ネザサ節	1,200	1,000	900
タケ亜科	2,700	1,800	3,700
ヨシ属	300	400	400
ウシクサ族	-	-	200
不明	2,300	2,000	2,300
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	6,200	6,800	7,100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,600	5,400	7,600
植物珪酸体含量	12,800	12,200	14,700
珪化組織片			
イネ属類珪酸体	*	*	*
イネ属短細胞列	*	-	-

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めている(100単位にする)。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。<100は100個/g未満、-は未検出、*は検出を示す。

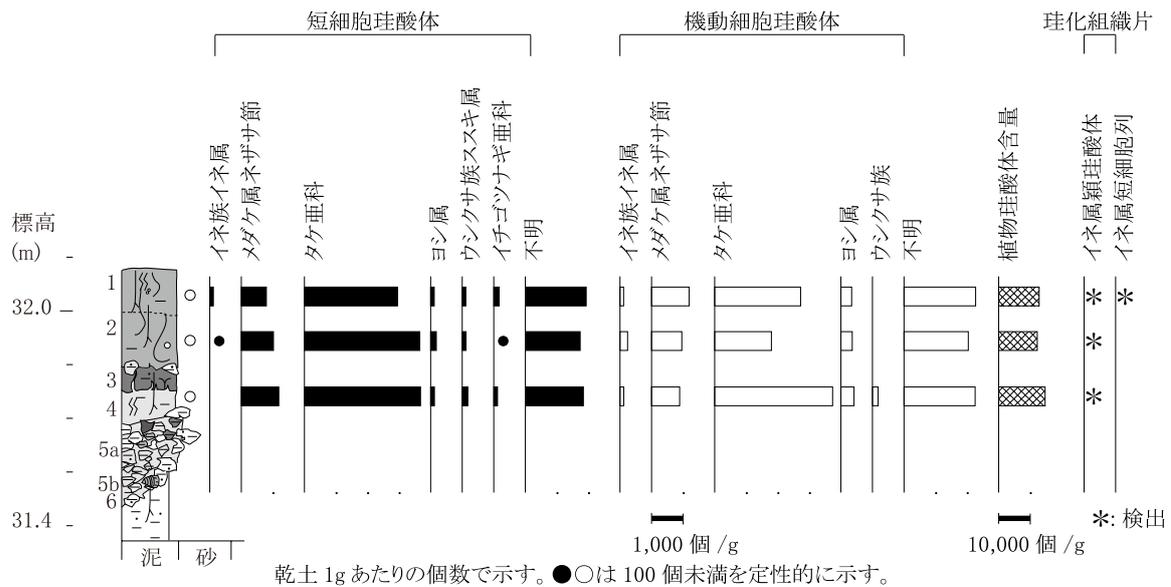


図44 溝116の植物珪酸体含量

群)、草本がアサ、ギシギシ属、ミゾゾバ、タデ科、ザクロソウ、スベリヒユ、ノミノフスマ、ツメクサ、ハコベ属、アカザ属、ヒユ属、タガラシ、キンポウゲ属、アブラナ科、キジムシロ属、マメ類(炭化)、カタバミ属、コミカンソウ属、エノキグサ、スマレ属、ウリ類、トウガン、チドメグサ属、セリ科、オカトラノオ属、ヤエムグラ属、シソ属、ナス、ナス科、タヌキモ属(ノタヌキモ)、オオバコ、タカサブロウ、コオニタビラコ、コナギ、ミズアオイ、ツユクサ、スズメノヒエ類似種、エノコログサ属、オオムギ(炭化)、コムギ(炭化)、イヌビエ属、カヤツリグサ属、ホタルイ属、の43種類(分類群)である。

種類構成をみると、人里植物を主体とする組成からなり、ミズアオイ・コナギ・タヌキモといっ

表9 井戸340出土大型植物遺体

種類(分類群)	部位	主な生育場所	上段:層位、下段:分析量(2mmまで選別)				
			10層	11層	12層	13層	
			約190	約60	約120	約290	
木本							
クルミ科	オニグルミ	果実	山野の川沿い	1	—	—	—
クワ科	クワ属	果実	山地・庭木・栽培	—	1	—	—
ツバキ科	ヒサカキ	種子	庭木・山地	—	1	—	—
バラ科	モモ	核	栽培・庭木	—	1	—	2
トウダイグサ科	アカメガシワ	種子	山野	—	—	—	1
ミカン科	サンショウ	核	山野	2	—	1	1
センダン科	センダン	核	山野	—	—	—	2
クマツヅラ科	クサギ	核	山野	—	1	—	—
草本							
クワ科	アサ	果実	栽培	1	—	—	2
タデ科	ギシギシ属	果実	田畑の畔や道端の湿地・水辺	—	5	—	—
		花被	田畑の畔や道端の湿地・水辺	53	18	10	2
	ミゾソバ	果実	水辺	—	—	—	3
	タデ科(三稜形)	果実	水辺・湿地・道端	5	95	84	5
	タデ科(扁平形)	果実	水辺・湿地・道端	1	19	11	6
ザクロソウ科	ザクロソウ	種子	道端・畑	—	—	5	—
スベリヒユ科	スベリヒユ	種子	畑・道端	—	—	6	—
ナデシコ科	ノミノフスマ	種子	水田・畑・野原	—	—	12	—
	ツメクサ	種子	道端	—	—	1	—
	ハコベ属	種子	道端・畑	—	54	6	—
アカザ科	アカザ属	種子	道端・荒地	—	4	—	—
ヒユ科	ヒユ属	種子	畑・道端	—	23	16	1
キンポウゲ科	タガラシ	果実	水田	—	—	3	—
	キンポウゲ属	果実	山野・道端	—	—	2	—
アブラナ科	アブラナ科	種子	水田・水辺・道端	—	—	8	—
バラ科	キジムシロ属	果実	野原・河原	—	—	2	—
マメ科	マメ類(炭化)	種子	栽培	1	—	—	—
カタバミ科	カタバミ属	種子	道端・畑	—	25	31	6
トウダイグサ科	コムカンソウ属	種子	道端・畑	—	—	—	—
	エノキグサ	種子	道端・畑	—	35	8	13
スマレ科	スマレ属	種子	道端・山野	—	2	2	1
ウリ科	ウリ類	種子	栽培	2	2	5	4
	トウガン	種子	栽培	—	2	—	—
セリ科	チドメグサ属	果実	道端・庭・野原	—	—	7	1
	セリ科	果実	湿地・山野	—	1	—	—
サクランソウ科	オカトラノオ属	種子	湿地・山野	—	—	1	—
アカネ科	ヤエムグラ属	果実	山野・道端・湿地	—	1	3	—
シソ科	シソ属	果実	道端	—	27	6	4
ナス科	ナス	種子	栽培	4	3	—	7
	ナス科	種子	山野・道端	—	1	—	—
タヌキモ科	タヌキモ属(ノタヌキモ)	種子	—	—	1	—	—
オオバコ科	オオバコ	種子	道端・山野	—	—	1	—
キク科	タカサブロウ	果実	湿地・水田	—	3	7	8
	コオニタビラコ	果実	水田	—	1	—	—
ミズアオイ科	コナギ	種子	水田	—	—	1	—
	ミズアオイ	種子	水田・沼	—	—	1	—
ツユクサ科	ツユクサ	種子	畑・道端	83	105	280	290
イネ科	スズメノヒエ類似種	穎	山野	4	4	8	2
	エノコログサ属	穎	道端・荒地・野原	1	38	26	4
	オオムギ(炭化)	果実	栽培	3	—	4	1
	コムギ(炭化)	果実	栽培	2	—	—	—
	イヌビエ属	穎	湿地・溝辺・水田	—	3	—	—
カヤツリグサ科	カヤツリグサ属	果実	水田・湿地・道端	—	—	4	—
	ホタルイ属	果実	水田・溝・湿地	1	5	2	1
その他	昆虫	頭・上翅・胸腹・脚		39	126	114	111

た水生植物がわずかに産出する。また、ツクサの種実が特徴的に多産する。木本類は、高木となるオニグルミの核以外は低木の種実類がわずかに産出する。

(4) 樹種同定

井戸340の方形組木杵、および水溜の縦板は全て針葉樹のスギ (*Cryptomeria japonica*) に同定された。また、木組の横棧および太柄はヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) に同定された。木材の材質は、針葉樹を主体とする木材利用状況が推定される。

5 平安時代前半の古環境

(1) 溝116機能期～放置期

溝116を充填する堆積物は、上述したように6～3層が機能期、2・1層が放置期に形成されたと推定される。年代的には、出土遺物から、2層までが10世紀初頭に形成されたことが推定される。

溝116機能期後半の5層は、土壤生成が進行する時期を挟在する湿地・沼地のような堆積環境で形成された堆積物である。4層中からは花粉化石が豊富に産出するものの、保存状態がやや悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。本層の層相から推定される堆積環境と同調的な産状であり、乾湿を繰り返すなど好気的環境下にさらされる時期が存在したことを示唆している。産出する種類は、酸化に強い種類や分解の影響を受けても同定可能な種類が多く認められる。検出された花粉化石の保存状態を考慮すると、経年変化による分解・消失の影響を受けて、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。特に多産したモミ属、ツガ属、マツ属等の針葉樹花粉は分解に強く、母植物における花粉生産量の多い種類であることから、実際の植生に対して過大評価されているだけでなく、木本花粉と草本花粉の比率にも影響を与えているとみられる。これらの点を踏まえ、機能期後半の植生について検討する。

局地的な植生を反映している可能性が高い草本花粉の産状をみると、イネ科を主体として、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、アリノトウグサ属、キク亜科など、開けた明るい場所に生育する「人里植物」が多く認められることから、機能期後半の溝内およびその周辺にはこれら草本類からなる草地が存在したことが推測される。また、ベニバナ属やソバ属といった栽培種の花粉が比較的多く産出しており、これらの栽培・利用が示唆される。

一方、木本花粉組成をみると、温帯性針葉樹のモミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属やヤマモモ属、河畔林・溪谷林要素であるクルミ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、センダン属、林縁に生育するツツジ科、クチナシ属、エゴノキ属、スイカズラ属などが確認される。これらが各種類の生態性に応じて、周辺に分布していた可能性があるが、後述するようにマツ属やセンダン属などは植栽樹として存在した可能性がある。

一方、植物珪酸体組成をみると、ネザサ節をはじめとして、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属などのイネ科植物が生育していたと思われる。産出の目立ったタケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量が多いことが指摘されており（近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986）、他の種類よりも残留しやすい。このため、分析結果からは調査区周辺でタケ亜科が優勢であったように見えるが、周辺にはそれほど多くなかったと考えられる。また、栽培種のイネ属も産出するが、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の含量密度は100個/g程度と著しく低く、堆積環境を考慮すると栽培されていたものではなく、周辺より集落到に資材や食料として持ち込まれた稲に由来する可能性が高い。

10世紀初頭以降の放置期に形成された2・1層の植物珪酸体群集をみると、基本的には機能期の4層と同様な群集組成を示している。2・1層からもイネ属（穎珪酸体）が産出するが、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の含量は多くても200個/g程度と少ない。このような産状および層相からは、放置期の2・1層形成期における稲作は考えにくい。なお、先に調査された平安京右京三条三坊三町跡の平安時代前期とされる遺構埋土とその上位を覆う中・近世の堆積物ではイネ属が産出し、宅地として利用されていた平安時代前期の調査区内では水田稲作が考えにくいものの、中・近世では水田稲作の行われた可能性が指摘された（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2009）。本調査区でも上位層準において中世の耕作地が確認されていることから、イネ属については上位層準から落込みに由来する可能性がある。

（2）井戸340

井戸340は、10世紀初頭に構築され、人為的に埋め戻されていることから、放置期に形成された水溜内堆積物の植物化石群集は10世紀初頭の井戸内および周辺の局所的な植生を反映していることになる。花粉化石群集をみると、木本花粉では層位的な変化が確認されるものの、多産する種類は概ね類似しており、マツ属、スギ属が多産し、モミ属、ツガ属、アカガシ亜属等が認められる。マツ属は生育の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから二次林の代表的な種類である。スギ属は、モミ属、ツガ属等とともに温帯針葉樹林の構成要素であり、アカガシ亜属は、ヤマモモ属など共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素である。よって、井戸340が埋積する10世紀初頭頃の井戸の周囲には、アカガシ亜属等の常緑広葉樹とスギ属、ツガ属等の温帯針葉樹が混交する林分が存在したと推測される。その他に検出される種類から、より後背の標高の高い部分にはブナ属などの落葉広葉樹が、周辺河川沿いなどにはサワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属なども生育していたと想定される。また、多産するマツ属については、マツは有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安京の庭園でも植栽されていたことが、文献等の調査により明らかにされている（飛田, 2002）。平安京域においてマツ属花粉が増加・多産するようになるのは、低地の調査区では12世紀末以降の場合が多いが、今回の調査区のように扇状地や宅地域の調査では、9世紀前半に既に増加している事例が多い（パリノ・サーヴェイ, 2009・2012など）。このことは宅地域を中心にマツ属が分布、あるいは植栽されていたことを示唆している。また、庭園の園池の発掘調査では、マツ属のほか、センダンなど多くの樹種

が植栽樹として存在したことも確認されてきている（飛田,2002）。今回の結果でもクチナシ属やセンダン属、カキノキ属、ツツジ科などの樹種は、植栽樹として生育していた可能性がある。なお、今回の井戸340の結果では、マツ属が上方に向けて増加し、これとは逆に井戸構築材に利用されているスギ属が減少傾向を示している。このような層位変化が地域的に拡がりのある植生変化を反映しているかは現時点で判断できないが、遷都時の植生破壊と、その再生、さらに植栽といった平安時代前半の植生変化を考えるうえで興味深い結果といえる。今後の情報の蓄積が待たれる。

草本花粉についてみると、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科など、開けた場所に生育する種類が多く検出される。大型植物遺体群集でも、産出する種類の大部分が人里植物を主体とする草本類からなる。このように花粉群・大型植物遺体群集は人里植物を主体とする草本類が多産する点で共通している。なお、ツユクサのように産出量に大きな違いが認められる種類もあるが、これは、大型植物遺体分析が花粉分析のように薄層単位で分析を実施していないことに起因する可能性が高い。

以上のことから、10世紀初頭の井戸周辺は、人為的植生攪乱が頻繁に及ぶ、上記の人里植物が生育する開けた場所であったと推定される。また、ミズアオイ属、イボクサ属等の水湿地生草本も産出するが、これらは放置期の井戸内に生育していたものに由来する可能性が高い。

栽培種について着目すると、イネ科花粉中には、栽培種のイネ属に類する形態を示すものもわずかではあるが含まれている。このほか、栽培種・利用植物としては、木本類ではカキノキ属、モモ、サンショウ、草本類ではツバ属、ベニバナ属、ウリ類、トウガン、ナス、オオムギ、コムギ、アサ、マメ類などが挙げられる。これらの種類には上述の溝116機能期の4層でも確認される種類がある。平安京右京五条二坊九町・十六町における平安時代前期遺物包含層からも、イネ属の植物珪酸体やツバ属花粉が検出されており、これらの栽培・利用が指摘されている（パリノ・サーヴェイ,1991,2009など）。今回の結果からも、多くの栽培種が栽培・利用されていたことが推定される。なお、ベニバナ属については、平安京の平安時代前半の条坊側溝や庭園の園池堆積物などから普遍的に産出する傾向があり、ベニバナが広い範囲で栽培されていたことを示している可能性がある。

また、井戸埋積物中からは、回虫卵・鞭虫卵などの寄生虫卵が検出された。寄生虫卵は、糞便などの堆積物で多産するが、普通の土壌中にも含まれており、ある程度の人口密度を持つ集落では1cm²あたり100個未満程度は汚染の範囲内とみなされている（金原ほか,1995a,b）。今回は単位堆積あたりにどの程度含まれているか不明であるが、花粉化石の産状と比較すると汚染の範囲内に含まれると推測される。

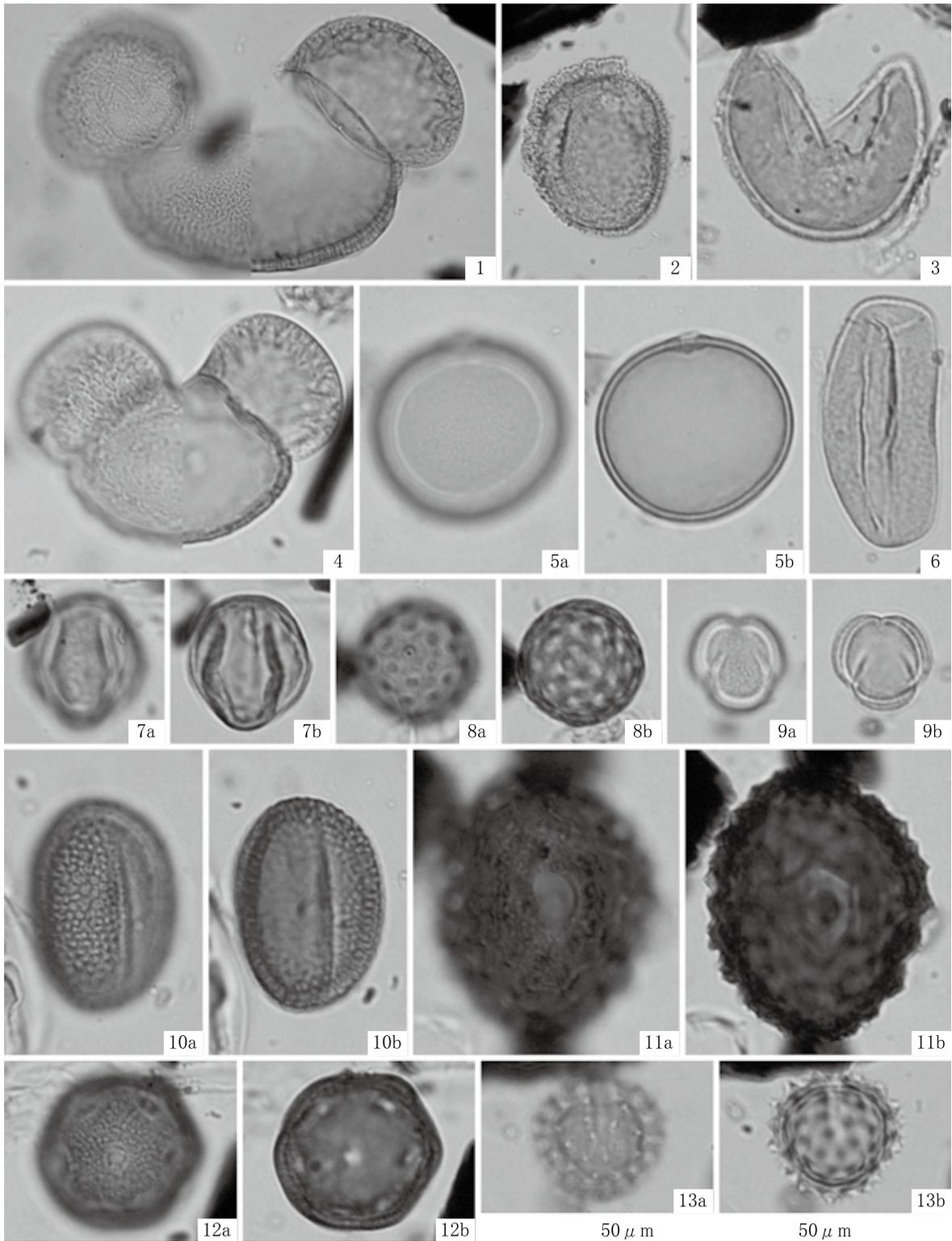
6 井戸の部材について

今回の井戸340の井戸枠・水溜の部材は、スギとヒノキに同定された。スギとヒノキは、木理が通直で割裂性・耐水性が比較的高く、加工は容易である。スギは柔らかい早材部と厚く硬い晩材部との材質差が大きい、ヒノキは晩材部が薄く、早材部と晩材部の材質差が少なく、均質である。このような材質を考慮した木材利用が想定される。

平安京域では、左京七条一坊十三町で9世紀の井戸材について樹種同定が実施されている（岡田,1986）。そこでは、横棧、縦板、方形木柵の横板、曲物等の樹種が明らかになっており、スギ、ヒノキ、ネズコが確認されている。部位別に見ると、縦板と曲物は全てヒノキであり、樹種が単独になる傾向があるが、横棧ではスギ、ヒノキ、ネズコが混在し、方形木柵の横板でもスギとヒノキの利用が認められる。この結果から、縦板や曲物とその他の部位とで木材選択が異なっていた可能性がある。今回の井戸340では、横棧・太柄についてはヒノキ、板材についてスギが利用されており、今後部位別の樹種構成についても検証することが必要である。

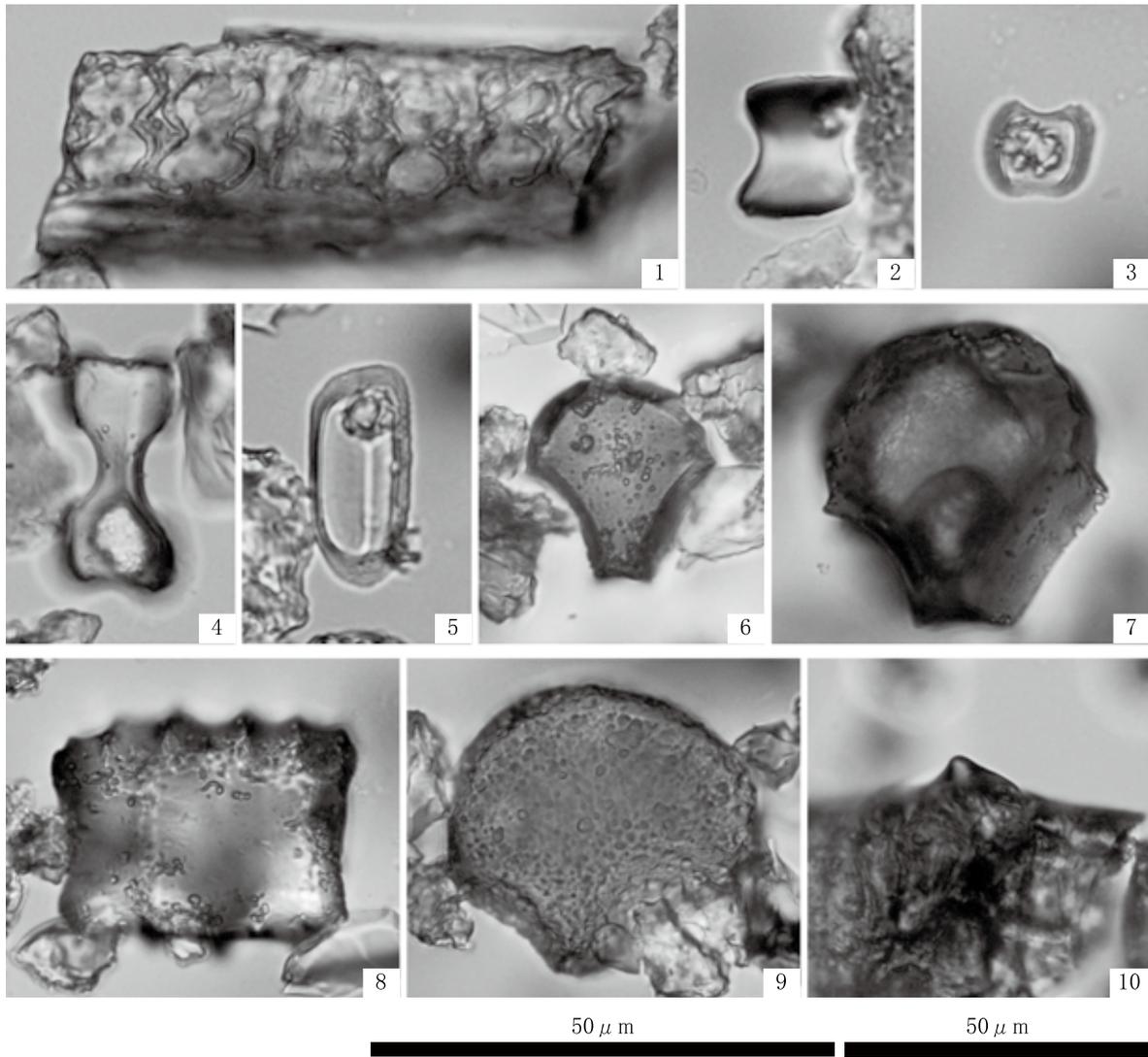
引用文献

- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 金原正明・金原正子・中村亮仁,1995a,大宮坊跡（厠跡）における自然科学的分析.史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ,石川県鹿島町教育委員会,51-70.
- 金原正明・金原正子・中村亮仁,1995b,川合遺跡八反田地区SE402・SE405における寄生虫卵・植物遺体分析,静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第63集 川合遺跡 八反田地区Ⅱ 本文編,静岡県埋蔵文化財調査研究所,341-354.
- 近藤鍊三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書,32p.
- 近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
- 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II（図版）.大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- 岡田文男,1986,井戸柵部材・木製品の樹種の調査.「左京七条一坊十三町平安京東市外町の調査」,平安学園考古学クラブ,55-60.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,1991,平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査 花粉・植物珪酸体分析報告.京都文化博物館調査研究報告 第7集 平安京右京五条二坊九町・十六町 京都市右京区西院三蔵町,京都府 京都文化博物館,108-116.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2009,付論1 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-4 平安京右京三条三坊三町跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,44-62.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2012.6.付論 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-4 平安京右京三条三坊四町跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,46-51.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－.考古学と自然科学,19,69-84.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- 飛田範夫,2002日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.



- | | | |
|---------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 . モミ属(井戸340;13層) | 2 . ツガ属(井戸340;12層) | 3 . スギ属(井戸340;12層) |
| 4 . マツ属(井戸340;12層) | 5 . イネ科(井戸340;12層) | 6 . ミズアオイ属(井戸340;13層) |
| 7 . コナラ属アカガシ亜属(井戸340;12層) | 8 . アカザ科(井戸340;12層) | 9 . ヨモギ属(井戸340;12層) |
| 10 . ソバ属(井戸340;12層) | 11 . ベニバナ属(井戸340;13層) | 12 . ナデシコ科(井戸340;12層) |
| 13 . キク亜科(井戸340;13層) | | |

図45 花粉化石



- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 . イネ属短細胞列(溝116;1層) | 2 . ネザサ節短細胞珪酸体(溝116;4層) |
| 3 . ヨシ属短細胞珪酸体(溝116;4層) | 4 . ススキ属短細胞珪酸体(溝116;1層) |
| 5 . イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(溝116;2層) | 6 . イネ属機動細胞珪酸体(溝116;2層) |
| 7 . イネ属機動細胞珪酸体(溝116;4層) | 8 . ネザサ節機動細胞珪酸体(溝116;4層) |
| 9 . ヨシ属機動細胞珪酸体(溝116;2層) | 10 . イネ属穎珪酸体(溝116;2層) |

図46 植物珪酸体

圖 版



1 調査区全景（西から）



2 調査区南東部、柵2・3（北東から）



1 建物1～3、拡張前（北から）



2 建物1～3、拡張区（南から）



3 柵2（北から）



1 井戸340 (南西から)



2 井戸340半裁状況 (西から)



1 井戸340側板検出状況（北西から）



2 井戸340水溜半裁状況（西から）



3 井戸340水溜細部（北西から）



4 井戸340東側板検出状況（西から）



1 土坑158 (北西から)



2 ピット151 (北東から)



3 柱穴130 (東から)



1 ピット400土器出土状況（東から）



2 柵6柱穴234貞観永寶出土状況（東から）



3 土坑259（南から）



4 ピット142（東から）



1 溝116新段階、溝153検出状況（北東から）



2 溝153（東から）



3 溝116古段階（北東から）



1 溝396 (北東から)



2 溝396断面 (北東から)

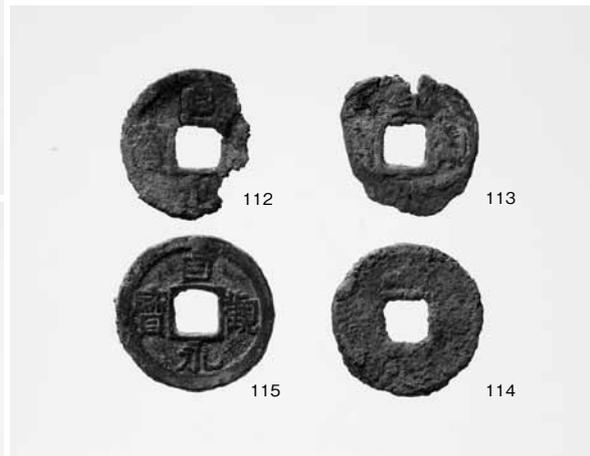
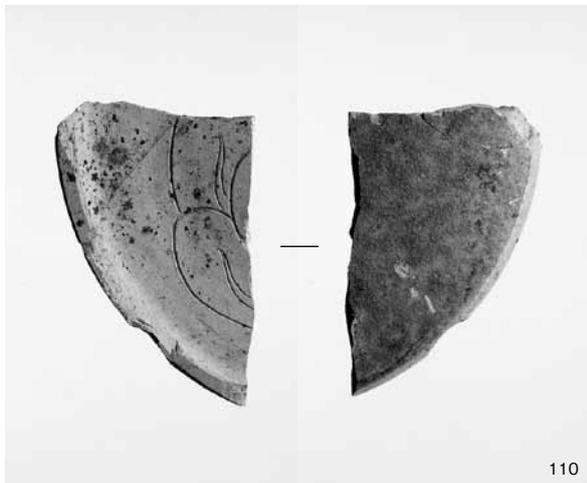


3 溝30 (西から)



4 北壁断面Y=-24,675付近 (南から)





土器類、硯、櫛、錢貨

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょうさんぼうさんちょうあと・にしのきょういせき							
書名	平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-23							
編著者名	南 孝雄							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 にしのきょういせき 西ノ京遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょうくわぼらちょう 西ノ京桑原町 いちばんち 1番地	26100	1 461	35度 00分 38秒	135度 43分 47秒	2012年11月 19日～2013 年2月22日	1650㎡	会社社屋 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	古墳時代	溝			平安時代前期から 中期の中規模宅地 を検出した。		
西ノ京遺跡	散布地	平安時代	柵、柱穴、ピット、 土坑、土器埋納土 坑、石埋納土坑、 井戸、溝、調整池 遺構	土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、輸入陶磁器、硯、 櫛、銭貨				
		室町時代	溝	土師器、銭貨				
		江戸時代		銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-23

平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡

発行日 2013年6月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961